

目次

はじめに	1
構想調書の概要	2
研究開発完了報告書	4
研究開発の経緯	12
組織図	13
3年間の流れ	14
KOA Global Studies 授業実施報告	15
生徒・教職員の意識変容について	
SGH サーベイ	19
卒業時のサーベイ	20
入学前のサーベイ	21
1年目のサーベイ	22
平成30年度 SGH 推進に関する教職員アンケート	23
英語科教科指導法の改定について	
“SGH and the KOA Global Skills”	27
英語資格試験によるコミュニケーション能力の評価	36
体育科におけるアクティブラーニングの取り組みについて	
2018年度 高校I年国際コース「体育実践報告」	38
SGH 対象コース以外での探究学習の取り組み	
Science Global Studies の取り組みについて	47
フィールドトリップ・海外研修報告	
ベトナム報告	56
フィリピン報告	64
フィンランド報告	74
アメリカ研修旅行報告（KSSにおける今後の展望）	85
海外教育機関との連携	
Global College Network 年次総会報告	89
ザンビア訪問報告	96
Viktor Rydbergs Skola の交流	103
平成30年度実施教育課程	104
課題研究発表会	
第1回発表会	108
第2回発表会	114
Super Global Congress	119
Super Global Congress Draft Resolution	120
Super Global Congress Resolution	121
SGU 対象大学への進学者数	129

はじめに

「21.3世紀の日本を牽引するグローバルナビゲーターの育成」を掲げ4年が経過しました。この度平成30年度生徒課題研究成果報告書を刊行するにあたり、ご支援をいただきましたすべての皆様に心から感謝を申し上げます。

本校の今年度学校スローガンは、「連携・交流・共汗 ～科学と芸術～」です。このスローガンを具現化する行動は、SGH事業を通して高校生の皆さんがちょうど30歳になった頃、世界中の皆さんの立場を尊重し、自ら連携し、交流し、そしてともに汗を流し仕事に励む人になるために、SGH課題研究に勤むことに結びついているのです。この事業を通してグローバルナビゲーターとしての8つのスキルを身につけること。それは批判的思考、コラボレーションとリーダーシップ、俊敏性と適応力、起業家精神、コミュニケーション力、情報アクセス力と分析力、好奇心と想像力、そして英語力です。本校のSGH事業の目的の一つに、生徒の皆さんと同様、教職員こそが先ず先頭に立って、上記の8つのスキルを実践することを掲げています。これまでの4年間、SGH事業を通して、世界の国々の皆様との連携に努めて参りました。

中でも一昨年10月に本校の芸術科の教員が、日本画家の皆様とアフリカ・ザンビア共和国を訪問したことが契機となり、昨年3月にザンビア共和国国連大使のカマンブエ氏がご来校くださり、ザンビアの学校と教育連携を進めていくことにご理解とご支援をいただくこととなりました。そこで、昨年7月に外国語科の教員とともにザンビアを再度訪問し、2校の学校との交流が叫びました。そして、Club Zambiaが立ち上がりました。それは、生徒の皆さんと教職員とが一緒になってザンビアの生徒の皆さんとの交流を具体的に進めていく学内組織です。早速、様々な交流が始まっています。

これまで4年間、SGH事業を進めていくにあたり、私たちに多くの国内外の先生方、企業の経営者の皆様から貴重なご教示をいただきました。中でも、本校の卒業生である京都外国語大学外国語学部国際教養学科准教授宮口貴彰先生には、ご多忙のところ毎週のようにご指導をいただきました。また、この書面で感謝を申し上げなければならない先生がいます。それは、本校SGH事業特別顧問であり、UNDP国連開発計画開発政策局長、関西学院大学総合政策学部教授を歴任された西本昌二先生です。西本先生は、昨年の11月に永眠されました。闘病生活の中にあっても、本校のSGH事業の発展のために、この4年間常にご助言、ご指導を頂戴しました。先生にはフィリピン・マニラにあるアジア開発銀行で20数年にわたってご活躍なさいましたご縁で、セント・ペドロ・ポベダ・カレッジをご紹介くださり、2016年2月姉妹校提携の調印式に同席くださいました。帰国時、先生が私になぜセント・ポベダ・カレッジとの教育提携を進言したか、その理由をお話くださったことを鮮明に覚えています。

ポベダの生徒の皆さんは、地域ボランティア活動を積極的に行っています。実際に学園生がポベダの生徒とともに現場に行き、現地の皆さんと言葉を交わし、より良い社会を目指すには何が必要なのか、を若いうちに肌で知ってほしいのです。そして、社会が抱えている課題を解決する人になってほしい。しかし、「人間の個人の力には限界がある、だからこそ組織を築く一人として力をつけることが大切だ」ということをポベダの生徒の皆さんとのフィールドワークを通して確信してほしいのです」と熱を持って語ってくださいました。長年の間、国連でご尽力なされたからこそその先生の思いを私たちはこれからも心に刻み続けなければなりません。これまでの4年間、講義やフィールドワークの実践をとおしてご指導をいただきましたことに感謝を申し上げ、心からご冥福をお祈りいたします。

西本先生が私たちにご教示くださった言葉、「組織を築く人となれ」の具体的な行動がClub Zambia設立です。これからもSGH事業を通して、本校生が世界の舞台で将来活躍する機会が広がっていくことを心から祈念します。今後とも皆様から貴重なご意見を拝聴いたしたいと思っております。よろしく願いいたします。

学校長 佐々井 宏平

人
平成 27 年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要人
人

指定期間人	ふりがな人 きょうとうなんがくえん人きょうとうがくえんこうとうがっこう人					②所在都道府県人	京都府
27～31人	①学校名人	京都光楠学園 京都学園高等学校					
③対象学科名人	④対象とする生徒数人				⑤学校全体の規模人		
普通科人	1 年人	2 年人	3 年人	4 年人	計人	国際 195 名	特進 ADVANCED 301 名
国際コース人	57	65	73	人	195	特進 BASIC 491 名	進学 446 名計 1433 名 (平成 30 年 11 月 20 日現在)
⑥研究開発構想名人	「21.3 世紀のグローバルナビゲーター育成プログラム」人						
⑦研究開発の概要人	グローバル・リーダーに不可欠な 8 つのスキル (=コア・グローバルスキル) 育成のため、人間存在に包括的に連関する「食」をテーマに、アフリカ・アジア地域における国際開発協力モデル開発・ビジネスモデル開発を目指し、国際機関や国内外の企業、国内外の高校・大学との協働で実践する。人						
⑧研究開発の内容等	⑧-1 全体人	<p>(1) 目的・目標人</p> <p>〈目的〉 2030 年の日本を牽引するグローバルナビゲーター、すなわち豊かな創造性と旺盛な好奇心を有し、多種多様な国や文化を乗り越え協働でき、多角的な視野をもって現象と専門的知識とを関連付け、常に失敗を恐れず、実験し行動し続けることができる人材の育成。</p> <p>〈目標〉 人グローバルナビゲーター育成に資するカリキュラムの研究・開発・実践を行う。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説人</p> <p>〈現状分析〉 人</p> <ol style="list-style-type: none"> SGH アソシエイト校として、「KOA(=幸せ)を世界に広めることができる人材」という目標を設定したが、生徒に身につけさせるべき具体的な能力の明確な共通認識を形成できていなかった。 その共通認識がなされていなかったため、SGH アソシエイト校としてのプログラム全体を貫く理念が希薄となり、統合性に欠けるところが散見された。 プログラムに参加した生徒は、批判的思考力、コラボレーション能力、コミュニケーション能力を一定高めることができたが、主体的行動者としてそれらのスキルを統合することが困難であった。 2006 年以来、様々な国際コラボレーション事業に取り組んできたが、結局、交流それ自体が目的化していた。 英語を母語とする生徒たちとのコミュニケーションを考えた時に、CEFR B1、B2 ではまだまだ不足である。 <p>〈仮説〉</p> <p>「食」をテーマに、アフリカ・アジア地域における「国際開発協力モデル」「ビジネスモデル」を内外の大学、企業、国際機関と共に研究するコアグローバル講座を通して、</p> <ol style="list-style-type: none"> 生徒は、ワグナーの 7 つのスキルに英語運用能力を加えた 8 つのスキルを身につけることで、「解のない世界」に慣れ親しみ、世界的視野で考え主体的に行動するグローバルナビゲーターへと成長することができる。 既存のすべての教科に影響を与え、すべての教員がそれらのスキルを育むアクティビティの開発に取り組むことができる。 <p>(3) 成果の普及人</p> <p>①課題研究発表</p> <p>成果発表を、国際機関、国内外企業、国内外高校・大学、地域などに対して行う。</p>					

	<p>②Global Simulation Gaming 大会を開催し、全国の高校・大学、保護者へ公開。 ③課題研究授業などを全国の高校・大学へ公開・普及にあたる。 ④保護者対象ワークショップ開催 ⑤課題研究授業、発表、研究会に対するエバリュエーションシートの作成 ⑥バイリンガルホームページの更なる発展</p>
<p>⑧-2 課題研究人</p>	<p>(1) 課題研究内容人 「食」をテーマに、アフリカ・アジア地域における国際開発協力モデル開発・ビジネスモデル開発を目指し、国際機関や国内外の企業、国内外の高校・大学との協働で実践する。人</p> <p>(2) 実施方法・検証評価人 〈実施方法〉 本校のSGHの取り組みは、2015年度においては高校1年・2年の国際コース在籍者生全員および、高3生の希望者を対象とし、2016年度で国際コース3学年全生徒対象のプログラムを完成する。2015年度における国際コース3年生対象プログラムは英語科の授業の中で、希望者25名を対象に、食をテーマとする課題研究を実施する。また教科横断的なプロジェクトを随時実施することで、8つのスキルの習得を深化させる。 国際生対象プログラム 国際機関職員、企業の方々、国内外の高校や大学、関連機関との連携を通し、2015年度においては高校1年～2年での、2016年度においては高校全学年で「総合的な学習の時間」及び英語、国語、社会、理科、家庭科、情報、保健で、講義、討議、グループワーク、課題研究、発表などを通し、8つのスキルを身につけるためのプログラムを実施する。 〈フィールドトリップ〉 課題研究の深化のために、高2の夏期休暇を利用してアジア・アフリカ地域へのフィールドトリップを実施する。 〈検証評価〉 検証評価として、8つのスキルそれぞれのルーブリックを作成し評価する。また、本校生徒、本校教員に対してアンケートの実施やSGH運営指導員による指導・助言をいただく。さらに3年次の成果検証として国内外のコンペや東京大学と立命館大学国際関係学部が共同で開発したグローバルシミュレーションゲーミング(GSG)を本学において実施する。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等人なし</p>
<p>⑧-3 上記以外人</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価人 〈ルーブリック研究会〉SGH対象コース以外の教員とも吟味し、成果を私学研究大会他で発表する。 〈留学〉高2の8月～高3の6月対象生徒はイギリスもしくはカナダに留学するが、留学先においても食をテーマとする課題研究に継続的に取り組む。 〈English Website Competition〉マーケティング調査をターゲットごとに行い、英語でブログを作成する。訪問者数が一番多いグループが優勝 〈オープンプログラム〉全校の希望者を対象として、平日放課後や授業のない土曜日を利用して、国際機関職員や企業の方々を招いてのワークショップや協働プログラムを実施する。これにより国際開発協力モデルや世界的規模で展開するビジネスモデルの現状とその課題を理解するとともに、自分の将来につながるヒントを獲得する。</p> <p>(2) 〈課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等〉人 特になし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法 特になし</p>
<p>⑨その他 特記事項人</p>	<p>特になし</p>

(別紙様式3)

平成31年3月13日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 京都府京都市右京区花園寺ノ中町8
管理機関名 学校法人光楠学園
代表者名 佐々井 宏平 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日(契約締結日)～平成31年3月31日

2 指定校名

学校名 京都学園高等学校

学校長名 佐々井 宏平

3 研究開発名

21. 3世紀のグローバルナビゲーター育成プログラム

4 研究開発概要

今年度は、本校の課題研究授業の根幹である総合的学習の時間「コアグローバルスタディーズ」(以下「コア学」)の3学年分の教材・資料をGoogle Classroom上に整備し、学内教員が安定的に課題研究の指導に当たることができるようにした。また、第2学年次に実施するベトナム、フィリピンへのフィールドトリップが、それまでの課題研究の成果検証の場として機能するように「掘場チャレンジ」の内容をリメイクした。SGH対象コースの国際コース用に開発した英語指導法を他コースにも適用する第一歩として、特進ADVANCEDコースの「英語会話」の指導・試験のやり方・評価法を国際コースに準ずるものに改め実施した。生徒ばかりでなく教員の英語運用能力を高めるために海外研修旅行引率者のホームステイ研修を導入した。海外での成果の普及活動として、イギリスの姉妹校Chichester Collegeで本校生と同College生を主体とする「食料安全保障に関するフォーラム」を3月末に開催する。ザンビアの2校に教員2名を派遣し、2019年度中の生徒の交換の実現に大きく前進した。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
公開研究授業大会								○				
運営指導委員会					○					○		
海外研修旅行			○	○	○		○	○				

(2) 実績の説明

ア 職員体制に関する支援

(ア) ネイティブ教員の増員（計8名）、海外留学経験を有する優秀な教員の配備

(イ) SGH活動のための事務員配置（1名）（SGH活動のための事務作業）

イ 取組内容に関する支援

(ア) フィリピン、フィンランドへのフィールドトリップ引率教員経費負担（延4名）

(イ) ザンビアフィールドトリップ実現に向けての下見教員旅費経費負担（2名）

(ウ) Super Global Coongress 参加のフィリピンの姉妹校生徒国内移動費用負担

(エ) SGH委員会の設置および開催

SGH事業対象コースの国際コースの教科担当者および教務部長、国際部長でSGH委員会を設置。毎週1度中核メンバーによるミーティングを持ち、SGH事業における課題研究の仮説の検証および成果に基づいた指導法の確立をはかった。

(オ) SGH対象である国際コース以外の海外研修実施

5月25日～6月5日 カナダ・ノバスコシア州 Chignecto-Central 教育委員会傘下の5校へ中学3年生49名派遣

5月26日～6月7日 カナダ・カルガリーNose Creek School 中学3年生14名派遣

6月29日～7月20日 イギリス姉妹校2校（Chichester CollegeとEast Sussex Collegeの3キャンパスへ高校生102名派遣（語学研修と英国史に関する課題研究）

7月17日～8月1日 Cardiff Metropolitan Universityへ高校生16名派遣（語学研修）

10月10日～10月19日 アメリカ姉妹校9校へ高校生330人派遣（異文化交流・アグリビジネス課題研究） [p. 85 参照]

(カ) 教員対象講演会および研究会

8月18日第1回SGH生徒課題研究発表会 [p. 107 参照]

8月21日第1回SGH研究発表会兼教員リトリート大会

11月21日 公開研究授業大会

11月21日 講演会「Society 5.0で求められる力とは何か」講師 福原正大氏

(キ) 保護者対象講演会

4月21日 教養講座「自然の宝庫 御泥池」

4月28日 講演会「これからの時代に持つべきスキル」講師 福原正大氏

5月12日 講演会「芸術から見た今日の京都」講師 日本画家・本校教諭米田実氏

6月20日 講演会「21世紀型の学力とは？- 大学が求める人材の変化」講師 佛教

大学教授 原清治氏

ウ 関係機関との連絡調整等

- (ア) 高大連携プログラム等を円滑に実施するため、大学、企業、NPO 法人との連携支援
- (イ) ザンビア大使館との交渉他

エ 運営に関する支援

運営指導委員会の開催 年 2 回実施 (8 月 21 日、1 月 23 日)

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コア学 III (Global Simulation Gaming)	→											
コア学 II	→											
コア学 I	→											
Field Trip (SGH 対象)		○			○		○				○	
Overseas Writing (留学中)						→						
評価法フレーム ワーク開発	→											
英語資格試験 によるコミュ ニケーション 能力の評価に 関する研究	→											

(2) 実績の説明

【コア学 I ~ III】

ア コア学 I、II、IIIともオンラインの Google Classroom 上に年間を通しての教材、参考資料を整備した。

(ア) コア学 I ([前期 毎週木曜日 2 時間、8 回の土曜日 4 時間] 、 [後期 毎週水曜日 2 時間、1 1 回の土曜日 4 時間]) カリキュラム監修：本校 SGH 事業特別顧問西本昌二元国連開発計画政策局長、同宮口貴彰京都外国語大学准教授、授業担当：本校教員 6 名 (村上和弘、片山由美子、Lawrence Denes、Andrew Friederich、橋本千佳、黒宮康明)、SGH 対象生徒 5 7 名。 [p. 14 参照]

[4 月～6 月] [日本食を通してみる日本の心]

外部講師による課題研究のテーマの提示及びワークショップ、学内教員による課題研究指導。

4 月 1 2 日 本校 SGH 事業特別顧問宮口貴彰氏「21. 3 世紀の No. 1、Only 1 とは」

4 月 2 8 日 本校 SGH 事業特別顧問福原正大氏「これからの時代に持つべきスキル」

5 月 1 0 日 京都の老舗料亭「山ばな平八茶屋」当主園部晋吾氏「和食の未来」

5 月 3 1 日 元マッキンゼーアンドカンパニーコンサルタント石崎優氏「マッキンゼー的情

報分析と起業家精神」

6月9日 全農京都元副本部長藤田正氏「京野菜のブランド化」

[6月～8月] [アフリカ・アジアの食料問題に関する国際開発協力]

ザンビア共和国日本大使館一等書記官 Victor Mumba 氏の講演、WFP 国連世界食料計画日本事務所の上野きより氏によるワークショップによりアフリカ・アジアの食料問題の提示、学内教員による課題研究指導。

<<夏休み中の課題>>アマルティア・センの『人間の安全保障』を読み、「①『人間の安全保障』で語られている「貧困」とは何か。②世界においてそのような「貧困」をなくさなければならないと貴方は感じるか、それはなぜか」、さらに「そもそも我々人類はこの SDGs (1～6) を実現しなくてはいけないのか？」をテーマとする課題研究。

8月18日 第1回 SGH 生徒課題研究発表会 (代表4チームの口頭発表)

[9月～1月] [食料問題に関する国際開発協力] ～長期課題研究～

SDGs 1～6に関するグループ単位 (13チーム) での長期課題研究。

9月1日 元 WHO 事務局長室国別支援課専門官の藤井まい氏によるワークショップ (「『国際協力とは』 - 今の自分を最大限に生かす」)

11月10日 清風南海高校発表会でポスター発表

11月16日 関西学院大学総合政策学部主催「リサーチフェア」で4グループ口頭発表。総合政策学部長賞受賞。

12月24日 特定非営利活動法人関西 NGO 協議会他主催ワン・ワールド・フェスティバル for Youth ポスター発表

1月23日 Super Global Congress 参加、第2回 SGH 生徒課題研究発表会

[1月～3月] [食を取り巻く環境とビジネス]

1月30日の本校教員によるビジネスにおける情報収集のあり方及びビジネスモデルキャンパス (BMC) に関する講義を皮切りに、ベトナムへのフィールドトリップで検証可能なビジネス企画の作成に取り組んだ。

2月2日 本校 SGH 事業運営指導委員・(株)堀場製作所総務部長堀井愛士氏による BMC ワークショップ

3月16日 ベトナムへのフィールドトリップで検証可能な BMC 発表会

3月18日 (株)堀場製作所びわ湖工場で同社に関する調べ学習成果発表会

(イ) コア学Ⅱ ([前期 毎週木曜日2時間、8回の土曜日2時間]) カリキュラム監修：本校 SGH 事業運営指導委員・(株)堀場製作所総務部長堀井愛士氏・本校教員黒宮康明、授業担当：本校教員5名 (喜多雄哉、中西文恵、Mike Wales、Cristain Pires、黒宮康明)、SGH 対象生徒66名。 [p. 18 参照]

[4月～5月] [ベトナムに関わる環境とビジネス]

4月12日 (株)堀場製作所琵琶湖工場でフィールドワーク

4月14日 (特非) アジア教育友好協会理事坪井未来子氏「ベトナムの社会情勢について・国連の役割」

5月6日～13日 ベトナムフィールドトリップ

[5月～8月] [フィリピンに関わる環境とビジネス]

5月25日～26日姉妹校 Saint Pedro Poveda College (以下「POVEDA」) 教員 Clarissa Gutierrez 氏「フィリピンにおける格差問題」ワークショップ開催。格差問題に

ついでに事前学習を行い、現地での「研究調査活動」を実現した。

6月9日 堀場チャレンジBMC 課題研究発表会

7月30日～8月5日 フィリピンフィールドトリップ

[7月] [茶の湯を通して見る日本の心]

7月18日～19日 本校SGH 事業運営指導委員筒井優子氏 茶の湯・茶懐石実習

[8月] [SGH 生徒課題研究発表会]

8月18日 第1回SGH 生徒課題研究発表会

8月21日 海外フィールドトリップ発表会

[8月～3月] [Overseas Writing Project]

(ウ) **コア学Ⅲ** (毎週水曜日2時間) カリキュラム監修：立命館大学国際関係学部副学部長・准教授安高啓朗氏・本校SGH 事業特別顧問宮口貴彰京都外国語大学准教授、授業担当：本校教員8名(黒宮康明、朝守啓太、Nordine Lafdal、Cristain Pires、喜多雄哉、Lawrence Denes、廣藤啓二)、SGH 対象生徒73名。 [p. 19 参照]

コア学Ⅲにおいては、東京大学と立命館大学が共同で開発したGlobal Simulation Gaming (以下「GSG」)を実施。4月から授業は全て英語で行い、国際会議における英語での交渉、そして会議場での討議のできる英語力養成を目指した。また、Food Securityの問題そのものに対する生徒の理解を助けるため73名の生徒に対して8名の教員を配当し、アクター単位でのきめ細かな指導ができる態勢を整えた。

1月22日～24日のGSG本番(校内名「Super Global Congress」)には、昨年同様フィリピンの姉妹校POVEDAの生徒15名の来校を得て会議をすべて英語で実施。最後の「世界食糧安全保障サミット」では共同宣言採択をすることができた。

元立命館大学准教授、現京都外国語大学准教授宮口貴彰先生そして立命館大学国際関係学部副学部長の安高啓朗先生の指導を仰ぎ、研究開発に取り組んだ結果、平成28年度は4%の時間数しかなかった自校教員による指導時間を66%にまで高めることができた。

イ **コア学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ**の本校教員による指導時数を大幅に増加させた。

以下の表は、コア学の全指導時間に対し、本校教員が直接指導している時間数の割合を示すものである。各学年とも、新たなテーマの導入は外部講師に委託し、分析技法やビジネスプランの作成法等の指導は本校教員が行うようにした。

コア学Ⅰ		コア学Ⅱ		コア学Ⅲ	
H28年度	H30年度	H28年度	H30年度	H28年度	H30年度
34%	70%	54%	59%	4%	66%

ウ **コア学Ⅰ**の最終フェーズ(2月～3月)～**コア学Ⅱ**の4月は、ベトナムをテーマとしての課題研究に取り組み、5月のベトナムへのフィールドトリップで、また、**コア学Ⅱ**の5月～7月はフィリピンをテーマとしての課題研究に取り組み、8月のフィリピンへのフィールドトリップで、それぞれの課題研究の成果検証を行うことができるようにした。

【海外フィールドトリップ (SGH 対象)】

ア ベトナムフィールドトリップ：5月6日～5月13日、国立フエ農林大学へSGH 対象生徒10名、教員2名を派遣。 [p. 56 参照]

(ア) アジア開発銀行ベトナム支店副支店長斎藤法雄氏「ベトナムにおけるアジア開発銀行の役割」

(イ) エースコック社 ハノイ工場見学

- (ウ) フェ農林大学教員と学生の指導の下、ベトナム中部における農林水産業に対する持続可能な支援のあり方についての課題研究実施、成果発表。
- イ フィリピンフィールドトリップ：7月30日～8月5日、POVEDAへSGH対象生徒20名、教員2名を派遣。 [p. 64 参照]
- (ア) POVEDAのGrade12(高校3年生)の生徒とともにハイウェイヒルズ地区での「タラバン」(コミュニティ奉仕活動)に参加、同校のGrade10～Grade12の有志とともにマニラ市立女子孤児院と同市立老人救済施設を訪問し「食の交流会」を持った。
- (イ) スモーキーマウンテン見学。
- (ウ) アジア開発銀行本部でセミナー受講
- ウ Global College Network Student Ambassadors Conference: 10月29日～11月2日、スペインのバレンシアのGCNメンバー校Xabecで開催されたGlobal College Network Student Ambassadors Conference(6カ国9校参加)へGCN対象生徒6名、教員2名を派遣した。 [p. 89 参照]
- エ 2月17日～22日 フィンランドの姉妹校Seduでの食文化交流を目的とするフィールドワークにSGH対象生徒12名と教員2名を派遣した。 [p. 74 参照]

【国内フィールドトリップ(SGH対象)】

(株)堀場製作所びわ湖工場訪問：3月18日(月)、ビジネスにおける情報収集のあり方に関する研修の一環として(株)堀場製作所びわ湖工場へSGH対象生徒57名と教員3名を派遣。同工場講堂において、同社総務部長堀井愛士氏他の同社社員に対し、生徒らが(株)堀場製作所について調べてきたことをプレゼンした後、同工場を見学した。

【英語資格試験によるコミュニケーション能力の評価に関する研究】 [p. 28 参照]

- ア SGH指定校とされて以来一貫してSGH対象コース国際コースの英語科目の指導内容を大幅に見直し、改定を繰り返し、IELTSによって評価される生徒の英語コミュニケーション能力向上に努めてきた。その結果次セクションで示す成果を上げた。
- イ SGH対象コースの国際コースで効果をあげた指導法を他コースにも適用するため、特進ADVANCEDコースの英語会話の試験を従来の暗記中心のものから、IELTSのスピーキングテストに擬した、試験官の誘導で、自然な流れの会話の中でコミュニケーション力を測定するものへと変更した。
- ウ 同時に国際コース以外のコースでのCEFR B1以上到達者数を増加させるべく英語科各教科の指導法の改善を進め、次セクションで述べるような成果を上げた。

【Overseas Writing】

1年～2年で実施した課題研究の中から各自が見つけたテーマについて、2年次9月からの7ヶ月間、あるいは10ヶ月間の海外留学中にそれぞれが独自にリサーチを行い、それを留学中の2年次の9月～3月の期間に3つの「エッセイ」としてまとめるOverseas Writingのカリキュラム(評価法、フィードバック法を含む)を確立した。 [p. 19 参照]

【評価法フレームワーク開発】

- ア **コア学I**において各生徒のKGスキルを生徒相互に評価させるPeer Evaluationを導入した。
- イ **コア学I**において、課題研究発表の中間発表後に、課題研究グループ個々に対するフィードバックと、グループ構成メンバー一人ひとりのKGスキル到達度の評価を目的とするグループインタビューを導入した。
- ウ SGH対象コースの国際コースの英語科の各科目のルーブリックを整備した。

7 目標の進捗状況、成果、評価

【評価法フレームワーク開発】

アクティブラーニング実施教員数は昨年度の84%から91%へと増加したがループリック活用教員数は昨年度35%、今年度35%と変わらなかった。この最大の原因としてあげられるのは大学の一般入試対策を求める生徒の存在である。普及という観点からは停滞しているということになるだろうが、反面、英語科を中心にループリックの整備が進んでいることも事実である。来年度は普及と深化の両方を追求したい。 [p. 52 参照]

【SGH 対象国際コース生の英語運用能力】 [p. 28 参照]

ア 高校1年終了時に受検する IELTS (任意受験) の成績は以下の通り明確な向上を示している。以下の表においては、%値は対受験者数、小数点以下第一位を四捨五入したものである。

CEFR	A2	B1	B2 以上	総受験者数
2018 年度入学生		12 人 (52%)	11 人 (48%)	23 人 (100%)
2017 年度入学生		20 人 (80%)	5 人 (20%)	25 人 (100%)
2016 年度入学生		31 人 (86%)	5 人 (14%)	36 人 (100%)
2015 年度入学生		25 人 (96%)	1 人 (4%)	26 人 (100%)
2014 年度入学生	4 人 (8%)	48 人 (91%)	1 人 (2%)	53 人 (100%)

イ 高校2年の4月末の IELTS (全員受験) で見ても同様な傾向が見られる。

CEFR	A2	B1	B2 以上	総受験者数
2017 年度入学生	1 人 (2%)	47 人 (71%)	18 人 (27%)	66 人 (100%)
2016 年度入学生		58 人 (77%)	17 人 (23%)	75 人 (100%)
2015 年度入学生	1 人 (2%)	56 人 (97%)	1 人 (2%)	58 人 (100%)
2014 年度入学生	1 人 (1%)	66 人 (93%)	4 人 (6%)	71 人 (100%)

ウ その他のコースの英語運用能力

卒業時に B1 レベル以上を達成した生徒は 12%と昨年度とほぼ同じであったが、特進 ADVANCED コースで見ると、英検 2 級以上を取得した生徒数は 2017 年度の 18 名 (17%) に対して 2018 年度は 34 名 (30%) と増加傾向にある。来年度は国際コースで開発した指導法を全校に広め、成果をあげたい。

【海外提携校とのネット交流】

SGH 対象の国際コースにおいては高校3年生の **コア学** (GSG) で POVEDA の生徒とポジションペーパー作成に向けて Google hangout や Zoom を利用してリアルタイムでの協働を試みたが、POVEDA 側の参加生徒の決定が 1 2 月以降にずれ込んだことと双方の授業時間帯の異なりから継続的なリアルタイムの協働は今年度も断念せざるを得なかった。生徒たちには、各自でグーグルクラスルームや SNS を活用して情報の共有をはからせた。

その他のコースにおいては、研修前に 4 回取り組んだ。

ザンビアの Crested Crane Academy 及び Hope and Faith Community School と 4 月以降にネット交流を実現する目処がたった。

【社会貢献活動への取り組み状況】

今年度も SGH 対象国際コースの生徒が中心になって運営されているボランティア団体「TFT 京都学園」の呼びかけで、「世界食糧デー・ソーシャルアクション TFT おにぎりプロジェクト」に全校生徒が参加した。また、生徒会の呼びかけに応え、19 クラス 705 名が文化祭

の模擬店の売り上げの一部を京都新聞社の善意の小箱に寄付した。それ以外にも、熱帯地域の開発途上国へ蚊帳を送る運動、エチオピアの少年に教育支援を送る運動に参加している生徒が20名、個人的にボランティア活動をしている者251名と、順調に目標を達成しつつある。

8 次年度以降の課題及び改善点

- ① 大学の一般入試対策を求める生徒のニーズを満たしながらも各教科の指導に課題研究を取り入れる。
- ② ルーブリックを活用した評価法を普及させる。
- ③ 国際コースで成果を出している英語指導法を全コースに普及する。特に特進 ADVANCED コースの指導法の改善を図り、卒業時点での CEFR B1 以上達成者数を 50% 以上にする。
- ④ 今年度、中学校のカナダ研修で導入した引率教員のホームステイ研修を促進し、英語科以外の教員の英語運用能力を高める。
- ⑤ ザンビアの Crested Crane Academy 及び Hope and Faith Community School との提携に関する MOU を締結し、生徒の相互訪問を実現する。

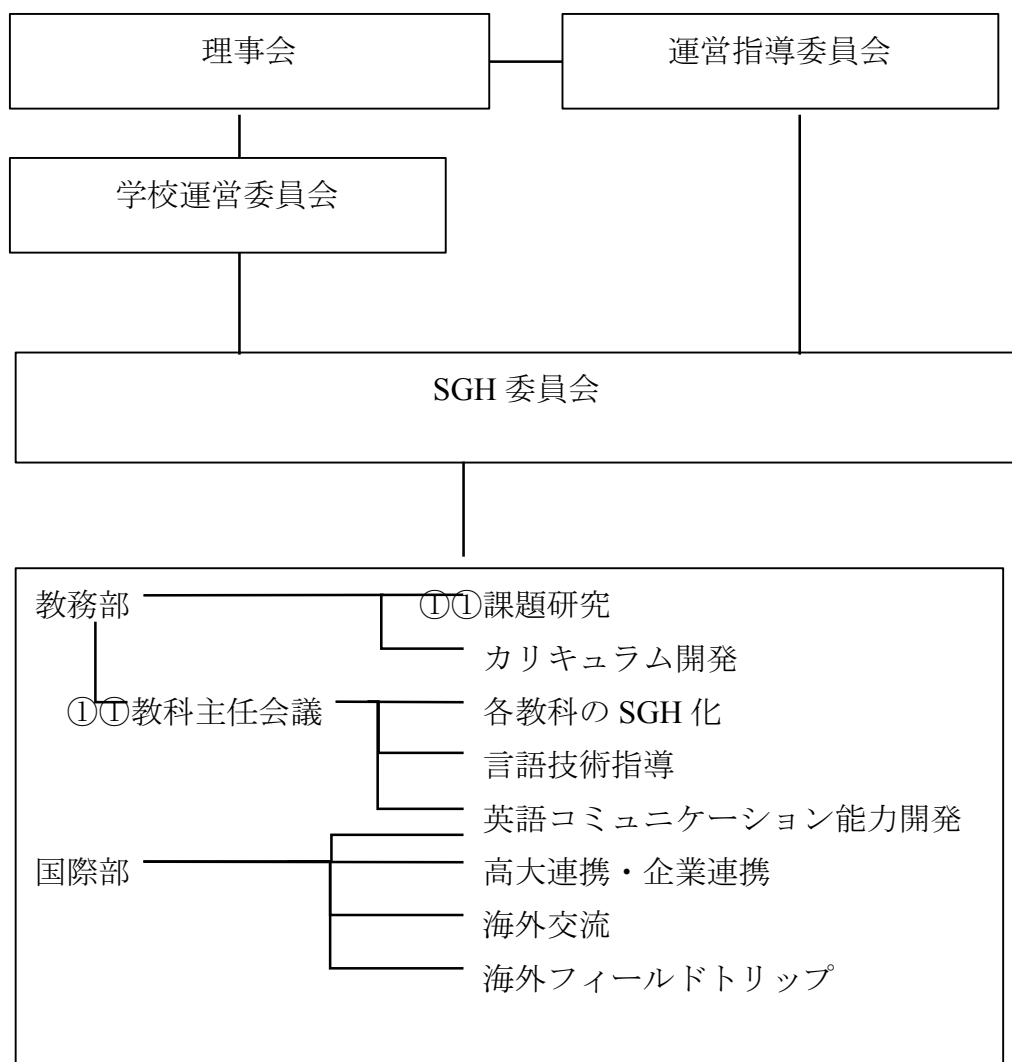
【担当者】

担当課	法人事務局企画調査室	T E L	075-461-5105
氏 名	辻 彰彦	F A X	075-461-5138
職 名	総務部長	e-mail	tsuji-a@kyotogakuen.ed.jp

平成30年度

研究開発の経緯

研究開発組織の概要と



KOA Global Studies 3年間の流れ

学年・時期	テーマ	外部講師
1年 4月～6月	「日本食を通してみる日本の心」 「京野菜からみる農業ビジネス」	山ばな平八茶屋当主 園部 晋吾氏 元全農京都副会長 藤田 正氏 元 UNDP 政策局長 西本 昌二氏 京都外国語大学 准教授 宮口 貴彰氏
1年 7月	「食でつなぐ日本と世界」 「食料問題に関する国際開発協力」 「持続可能なアフリカ農業支援」	Table For Two 小此木 利沙氏 世界食糧計画 (WFP) 上野 きより氏 ザンビア日本大使館 Victor Mumba 氏
1年 8月	「人間の安全保障」 「持続可能な開発目標」	WHO 専門官 藤井 まい氏 元 UNDP 政策局長 西本 昌二氏
1年 9月～1月	「食料問題に関する国際開発協力」 (長期課題研究)	
1年 1月～3月	「食を取り巻く環境とビジネス」 ビジネスモデルキャンパス	(株)堀場製作所 堀井 愛士氏
2年 4月～6月	「食を取り巻く環境とビジネス」 「ベトナムフィールドトリップ」 「フィリピン研究」	(株)堀場製作所 堀井 愛士氏 フエ農林大学学長 Le Van An 氏 Saint Pedro Poveda College Clarissa Gutierrez 氏
2年 6月～8月	「Overseas Writing Project」 「茶事を通してみる日本の心」 「フィリピンフィールドトリップ」	茶道表千家 筒井 優子氏
2年 8月～3月	海外留学	
3年 4月～7月	Global Simulation Gaming Part 1 “Water Security”	京都外国語大学 准教授 宮口 貴彰氏
3年 8月～1月	Global Simulation Gaming Part 2 “Food Security”	京都外国語大学 准教授 宮口 貴彰氏 立命館大学 安高 啓朗氏 Saint Pedro Poveda College Clarissa Gutierrez 氏
3年 1月22日～ 24日	Super Global Congress	「食料安全保障に関する イスタンブールサミット」

開発の経緯

「KOA Global Studies I」授業実施報告書

敬称略

担当者：学内教員：黒宮・橋本千・村上・片山・Friederich・Denes

アドバイザー：西本 昌二（元国連開発計画政策局長）・宮口貴彰（京都外国語大学准教授）

日付	曜日	担当者	課題研究内容
春休み課題			21.3世紀、自分が世界でナンバーワン、オンリーワンの存在になっているとしたらどんな自分であるか？
4月12日	木	宮口・学内教員	KOAの導入・21.3世紀のNO.1、Only 1になるとはどういうことを考える
4月14日	土	学内教員	「地球交響曲」鑑賞・MECE分析
4月19日	木	宮口・学内教員	「問題解決」と「Logical Thinking」とは、MECE分析の方法、ブレインストーミング
4月21日	土	西本・学内教員	KOAの学びとは何か・MECE分析
4月26日	木	学内教員	MECEエクササイズ・「町の豆腐屋さんが減少している理由」
4月28日	土	福原正大	ワークショップ「これからの時代に持つべきスキル」
5月10日	木	園部晋吾	「和食の未来」
5月12日	土	学内教員	「和食の未来」
5月17日	木	学内教員	「和食の未来」
5月26日	土	園部晋吾	「和食の未来」の課題研究発表会
5月31日	木	石崎優	「マッキンゼー的情報分析と起業家精神について学ぶ」
6月1日	土	学内教員	「プロブレムツリーについて」、「なぜ日本の若者は自己肯定感が少ないのか」
6月7日	木	zambia 日本大使館一等書記官 Victor Mumba	ザンビアについて
6月7日	木	宮口	「なぜ日本の若者は自己肯定感が少ないのか」課題研究発表
6月9日	土	藤田正	京野菜の世界ブランド化に関する課題研究・発表
6月21日	木	宮口	より科学的で客観的な主張をするためにOREを学ぶ
6月28日	木	西本昌二	「国家とは」
7月14日～ 7月16日		イマージョンキャンプ	
7月14日	土	上野きより	「アフリカ・アジアにおける緊急人道支援及び持続可能な開発について」
7月15日	日	学内教員・上野きより	同上 課題研究発表
8月25日	土	学内教員	長期課題研究（グループ決め+研究課題の決定）
8月30日	木	学内教員	長期課題研究
9月1日	土	藤井まい・宮口	WHO専門官 「国連の役割について」
9月6日	木	学内教員	長期課題研究
9月20日	木	学内教員	長期課題研究
9月27日	木	学内教員	関学リサーチフェア発表者選考
10月3日	水	学内教員	長期課題研究
10月6日	土	学内教員	長期課題研究
10月10日	水	学内教員	長期課題研究
10月20日	土	学内教員	長期課題研究
10月24日	水	学内教員	長期課題研究
10月27日	土	学内教員	長期課題研究中間発表会
10月31日	水	学内教員	長期課題研究中間発表会
11月7日	水	学内教員	長期課題研究
11月10日	土	学内教員	長期課題研究
11月14日	水	学内教員	長期課題研究
11月16日	金	関西学院大学	関学リサーチフェア
11月28日	水	宮口・学内教員	関学リサーチフェアの振り返り・長期課題研究
12月8日	土	小此木利沙	NPO TFT Internationalの活動について学びながら持続可能な食料支援を考える
12月12日	水	学内教員	長期課題研究
12月17日	月	学内教員	長期課題研究（ポスター作成）
12月18日	火	学内教員	長期課題研究
12月19日	水	学内教員	長期課題研究
12月20日	木	学内教員	長期課題研究
12月21日	金	学内教員	長期課題研究
12月24日	月	ワンワールドフェスティバル	長期課題研究に関するポスター発表
1月5日	土	学内教員	長期課題研究中間発表会（SGH発表会口頭発表者選出）
1月9日	水	学内教員	長期課題研究中間発表会フィードバック
1月12日	土	学内教員	長期課題研究
1月16日	水	宮口・学内教員	長期課題研究
1月23日	水	第2回SGH研究発表会	

1月30日	水	学内教員	ベトナム地域研究
2月2日	土	堀井愛士	堀場チャレンジ
2月6日	水	学内教員	堀場チャレンジ
2月13日	水	学内教員	堀場チャレンジ
2月20日	水	学内教員	堀場チャレンジ
3月9日	土	堀井愛士	堀場チャレンジ
3月16日	土	堀井愛士	堀場チャレンジ発表会
3月18日	月	学内教員	(株)堀場製作所 琵琶湖工場 見学

TKOA Global Studies II」授業実施報告書

敬称略

担当者：学内教員：黒宮・喜多・中西文・Pirez・Wales

アドバイザー：西本 昌二（元国連開発計画政策局長）・宮口貴彰（京都外国語大学准教授）

日付	曜日	担当者	課題研究内容
2018年2月 ～3月		堀場製作所加藤法生氏・堀井愛士氏	堀場チャレンジPhase 1 ビジネスモデルキャンパスを学び、全13班に分かれベトナムで実践可能な「食」にまつわるビジネスモデル研究を行い3月10日に中間発表を行った。
4月12日	木	堀井愛士	(株)堀場製作所琵琶湖工場にて、「食」を題材に大学での研究や社会人として働く際に役立つグローバルレベルでの見識を広げるためのトレーニングを実施
4月14日	土	坪井未来子	ベトナムの社会情勢について・国連の役割
4月19日	木	学内教員	ビジネスモデルキャンパス課題研究
4月26日	木	学内教員	ビジネスモデルキャンパス課題研究
4月28日	土	学内教員	ビジネスモデルキャンパス課題研究
5月6日～ 5月13日		黒宮・村上	ベトナムフィールドトリップ フエ農林大学の教員学生との指導の下ベトナムにおける持続可能な農業支援研究
5月10日	木	堀井愛士	フィリピンが抱える職に関する課題を抽出し、その課題解決の方法をビジネスモデルとして提案する。(PEST分析)
5月12日	土	学内教員	ビジネスモデルキャンパス課題研究
5月17日	木	学内教員	ビジネスモデルキャンパス課題研究
5月25日	金	Clarissa Gutierrez	Poveda Challenge導入 Ms. Gutierrezの指導の下、ベトナムにおける格差問題の課題研究
5月26日	土	Clarissa Gutierrez	Poveda Challenge Ms. Gutierrezの指導の下、ベトナムにおける格差問題の課題研究発表
5月31日	木	学内教員	ビジネスモデルキャンパス課題研究
6月2日	土	学内教員	ビジネスモデルキャンパス課題研究
6月7日	木	zambia 日本大使館一等書記官	ビジネスモデルキャンパス課題研究・ザンビアに関するお話
6月9日	土	堀井愛士	堀場チャレンジビジネスモデルキャンパス課題研究発表会
6月21日	木	Pires・Wales	Overseas Writing Project導入
6月28日	木	Pires・Wales	Overseas Writing Project
7月14日～ 7月16日		イマージョンキャンプ	
7月18日	水	筒井優子	茶の湯
7月19日	木	筒井優子	茶懐石実習
7月30日～ 8月5日		喜多・中西文	フィリピンフィールドトリップ
8月18日	土	第一回SGH発表会（生徒）	
8月21日	火	フィールドトリップ発表会	リトリート大会を兼ねる

「KOA Global Studies III」 授業実施報告書

敬称略

担当者： 前期： 黒宮 後期： 宮口貴彰（京都外国語大学准教授）

通年： 朝守・Lafdal・Denes・Pires・喜多・廣藤・黒宮

日付	曜日	担当者	課題研究内容
4月11日	水	学内担当者	Introduction
4月18日	水	学内担当者	International Negotiation～ Treaties
4月25日	水	学内担当者	State Actors Parliamentary Procedure
5月9日	水	学内担当者	The UN as an actor Parliamentary Procedure
5月16日	水	学内担当者	NGO actors Parliamentary Procedure
5月30日	水	学内担当者	Discussions on Food Security
6月6日	水	学内担当者	Discussions on Food Security
6月13日	水	学内担当者	Discussions on Food Security
6月20日	水	学内担当者	Discussions on Food Security
6月27日	水	学内担当者	GSG Practice for 10-month students
7月11日	水	学内担当者	GSG Practice for 10-month students
8月29日	水	学内担当者	Guidance/Deciding Actors
9月5日	水	宮口・学内	Research on Themes
9月12日	水	宮口・学内	Discussions on Themes and Actors 1
9月19日	水	宮口・学内	Sharing domestic and outside FS issues)
10月3日	水	安高啓朗	Professor Ataka on GSG at Ritsumeikan
10月10日	水	宮口・学内	Sharing domestic priorities and evidence/reasons
10月24日	水	宮口・学内	Brief on Actor presentations The Role of Actors during International Negotiations/ Conferences Assignment: on GSG strategies
10月31日	水	宮口・学内	The Role of Actors during International Negotiations
11月7日	水	宮口・学内	Actor Presentation
11月14日	水	宮口・学内	Explaining Rules and Negotiation Practices
11月21日	水	宮口・学内	Regional/Block Consultation: G8, China+G77, LDCs, Humanitarian Org; UN Formal Debates
11月28日	水	宮口・学内	Finalization and Improvement of actor's strategy (preparation of Draft Resolution)
12月12日	水	宮口・学内	Mini GSG Intro
1月9日	水	宮口・学内	Mini GSG 1
1月16日	水	宮口・学内	Mini GSG 2
1月22日	水	宮口・学内	POVEDAとの顔合わせ
1月23日	水	宮口・学内	GSG本番
1月24日	水	宮口・学内	GSG本番

SGH サーベイ

① 卒業時のサーベイ

この春SGH事業対象コースの国際コースを卒業した生徒たちはSGH指定校としては2期生であった。この2期生の「卒業時のサーベイ」(次ページ参照)の結果を「入学前のサーベイ」と比べて見ると、コアグローバルスキルについての自己評価が大きく向上していることがわかる。アンケート項目6番、8番、10番、12番、14番、16番、18番、20番、22番が「コアグローバルスキルが自分にあるか」と問う問題であるが、22番を除いて、他はいずれも13ポイント以上「卒業時のサーベイ」の方が高くなっている。項目番号8番、9番、10番、20番では30ポイント以上増大している。このことから、コア学は生徒のコアグローバルスキルを向上させていると言えるだろう。

一方、22番「自分に好奇心と想像力があると思いますか？」に対する回答は逆に3ポイント下がっているが、これは母集団の好奇心と想像力のレベルが、入学前に思い描いていたものよりも高かったため相対的に自己評価が下がった結果と言えるのではないだろうか。

SGH指定校1期生の2015年度入学生と比較して見る。2期生の特徴の一つは、高校入学前からコア学があることに対して一定の理解と期待を持っていたことである。アンケート項目24番「京都学園高校ではKOA学をやっているということが、あなたが本校国際コースへの進学を決める上で大きなファクターとしてありましたか？」に対する回答を見ると、1期生では「5. 大いにそう思う」と答えた者が0%、「どちらかと言えばそう思う」と答えた者が13%であったのに対して、2期生は「5. 大いにそう思う」が16%、「4. どちらかと言えばそう思う」が38%、合計54%がコア学を意識して本校に入学している。それが項目番号8番、10番、12番、16番で2015年度入学生よりも、肯定的回答がほぼ20ポイント増加する契機となっているのではないかと思われる。

アンケート項目4番「入試の結果はともかく、国際化に重点をおく国内の大学へ進学しようと思いましたが？」に対する回答は、入学前と「1年目のサーベイ」では1期生(72%、61%)とほぼ同じ74%、63%であったものが卒業時では、1期生73%に対して2期生は61%と12ポイント低い結果になっているが、これは海外の大学に進学をする者が2016年度入学生73名中16%にあたる12名いることの反映であろう。

一方、22番「自分に好奇心と想像力があると思いますか？」に対する回答は逆に3ポイント下がっているが、これは母集団の好奇心と想像力のレベルが、入学前に思い描いていたものよりも高かったため相対的に自己評価が下がった結果と言えるのではないだろうか。

② 入学前のサーベイ・1年目のサーベイ

参考までに1期生(2015年度入学生)から4期生(2018年度入学生)に対する「入学前のサーベイ」と「1年目のサーベイ」の結果を示す。「入学前のサーベイ」の結果で一番興味深いのは、項目番号23番「京都学園高校ではKOA学をやっているということが、あなたが本校国際コースへの進学を決める上で大きなファクターとしてありましたか？」に対する回答である。コア学に対する理解と期待が高まるにつれて入学者数は逆に減少している。もちろんコア学以外の要因も多々あるものとは思われるが、一つにはコア学の充実に伴い、単なる海外への憧れだけで高校選択をする者たちが、課題研究を中心とするカリキュラムを敬遠した結果と言えるかもしれない。

卒業時のサーベイ

	入学年度	2016年			2015年			2014年	
		時期	卒業時	1年目	入学前	卒業時	1年目	入学前	卒業時
		回答数	69人	70人	76人	52人	59人	61人	61人
1	SGHの取組は面白かったですか？	77%	73%	/	60%	46%	/	66%	
2	高校卒業後、海外に留学したり仕事で国際的に活躍したいと思っていますか？	84%	94%	95%	79%	80%	92%	82%	
3	高校卒業後、自主的に社会貢献や自己研鑽活動に取り組みたいと思っていますか？	74%	74%	67%	75%	70%	50%	85%	
4	入試の結果はともかく、国際化に重点をおく国内の大学へ進学しようと思いましたが？	61%	63%	74%	73%	61%	72%	70%	
5	今日の時点で英語力の重要性がわかっていると思いますか？	91%	94%	96%	90%	93%	86%	92%	
6	自分に英語力があると思いますか？	35%	17%	21%	15%	7%	13%	23%	
7	あなたは、問題解決能力の重要性がわかっていると思いますか？	88%	93%	79%	89%	78%	32%	72%	
8	自分に問題解決能力があると思いますか？	55%	53%	18%	29%	19%	5%	31%	
9	コラボレーション力の重要性がわかっていると思いますか？	88%	81%	55%	79%	47%	35%	66%	
10	自分にコラボレーション力があると思いますか？	64%	51%	29%	44%	17%	13%	36%	
11	リーダーシップの重要性がわかっていると思いますか？	93%	91%	83%	87%	86%	70%	84%	
12	自分にリーダーシップがあると思いますか？	42%	39%	29%	23%	19%	26%	39%	
13	俊敏性と適応力の重要性がわかっていると思いますか？	88%	94%	76%	85%	69%	42%	80%	
14	自分に俊敏性と適応力があると思いますか？	48%	56%	28%	44%	20%	13%	31%	
15	起業家精神の重要性がわかっていると思いますか？	81%	80%	53%	65%	61%	30%	56%	
16	自分に起業家精神があると思いますか？	26%	29%	12%	17%	17%	7%	18%	
17	コミュニケーション力の重要性がわかっていると思いますか？	93%	97%	96%	90%	90%	80%	90%	
18	自分にコミュニケーション力があると思いますか？	62%	66%	49%	54%	29%	38%	49%	
19	情報アクセス力と分析力の重要性がわかっていると思いますか？	91%	97%	80%	94%	83%	41%	89%	
20	自分に情報アクセス力と分析力があると思いますか？	57%	63%	22%	58%	42%	44%	46%	
21	好奇心と想像力の重要性がわかっていると思いますか？	91%	99%	91%	90%	83%	63%	84%	
22	自分に好奇心と想像力があると思いますか？	68%	73%	71%	73%	58%	45%	64%	
23	KOA学で、自分に批判的思考力が身についたと思いますか？	80%	/	/	75%	/	/	80%	
24	京都学園高校ではKOA学をやっているということが、あなたが本校国際コースへの進学を決める上で大きなファクターとしてありましたか？	/	/	54%	/	/	13%	/	

※ パーセントの値は、「5. とてもそう思う」と「4. どちらかと言えばそう思う」という回答の合計。小数点以下第1位を四捨五入した。

入学前のサーベイ

		入学年	2018	2017	2016	2015
		回答数	57	68	76	61
1	高校卒業後、海外に留学したり仕事で国際的に活躍したいと思っ ていますか？		98.2%	92.6%	94.7%	92.0%
2	高校卒業後、自主的に社会貢献や自己研鑽活動に取り組みたいと 思っていますか？		66.7%	72.1%	67.1%	50.0%
3	国際化に重点をおく国内の大学へ進学しようと思えますか？		68.4%	61.8%	73.7%	72.0%
4	今日の時点で英語力の重要性がわかっていると思えますか？		94.7%	89.7%	96.1%	86.0%
5	自分に英語力があると思えますか？		24.6%	33.8%	21.1%	13.0%
6	あなたは、問題解決能力の重要性がわかっていると思えますか？		66.7%	69.1%	78.9%	32.0%
7	自分に問題解決能力があると思えますか？		22.8%	30.9%	18.4%	5.0%
8	コラボレーション力の重要性がわかっていると思えますか？		59.6%	54.4%	55.3%	35.0%
9	自分にコラボレーション力があると思えますか？		31.6%	23.5%	28.9%	13.0%
10	リーダーシップの重要性がわかっていると思えますか？		84.2%	70.6%	82.9%	70.0%
11	自分にリーダーシップがあると思えますか？		40.4%	29.4%	28.9%	26.0%
12	俊敏性と適応力の重要性がわかっていると思えますか？		75.4%	63.2%	76.3%	42.0%
13	自分に俊敏性と適応力があると思えますか？		28.1%	22.1%	27.6%	13.0%
14	起業家精神の重要性がわかっていると思えますか？		42.1%	41.2%	52.6%	30.0%
15	自分に起業家精神があると思えますか？		15.8%	20.6%	11.8%	7.0%
16	コミュニケーション力の重要性がわかっていると思えますか？		94.7%	88.2%	96.1%	80.0%
17	自分にコミュニケーション力があると思えますか？		45.6%	48.5%	48.7%	38.0%
18	情報アクセス力と分析力の重要性がわかっていると思えますか？		64.9%	64.7%	80.3%	41.0%
19	自分に情報アクセス力と分析力があると思えますか？		17.5%	33.8%	22.4%	44.0%
20	好奇心と想像力の重要性がわかっていると思えますか？		86.0%	77.9%	90.8%	63.0%
21	自分に好奇心と想像力があると思えますか？		54.4%	70.6%	71.1%	45.0%
23	京都学園高校ではKOA学をやっているということが、あなたが本校 国際コースへの進学を決める上で大きなファクターとしてありまし たか？		65%	59%	54%	13%

※ の値は、「5.とてもそう思う」と「4.どちらかと言えばそう思う」という回答の合計。小数点以下第1位を四捨五入した。

1年目のサーベイ

		入学年	2018	2017	2016	2015
		回答数	52人	67人	70人	59人
1	SGHの取組は面白かったですか？		90%	54%	73%	46%
2	高校卒業後、海外に留学したり仕事で国際的に活躍したいと思っ ていますか？		88%	85%	94%	80%
3	高校卒業後、自主的に社会貢献や自己研鑽活動に取り組みたいと思っ ていますか？		78%	64%	74%	70%
4	国際化に重点をおく国内の大学へ進学しようと思っ ていますか？		73%	66%	63%	61%
5	英語力の重要性がわかっていると思っ ていますか？		98%	93%	94%	93%
6	自分に英語力があると思っ ていますか？		12%	9%	17%	7%
7	あなたは、問題解決能力の重要性がわかっ ていると思っ ていますか？		77%	64%	93%	78%
8	自分に問題解決能力があると思っ ていますか？		31%	16%	53%	19%
9	コラボレーション力の重要性がわかっ ていると思っ ていますか？		71%	60%	81%	47%
10	自分にコラボレーション力があると思っ ていますか？		38%	18%	51%	17%
11	リーダーシップの重要性がわかっ ていると思っ ていますか？		83%	81%	91%	86%
12	自分にリーダーシップがあると思っ ていますか？		37%	24%	39%	19%
13	俊敏性と適応力の重要性がわかっ ていると思っ ていますか？		81%	70%	94%	69%
14	自分に俊敏性と適応力があると思っ ていますか？		40%	21%	56%	20%
15	起業家精神の重要性がわかっ ていると思っ ていますか？		79%	58%	80%	61%
16	自分に起業家精神があると思っ ていますか？		19%	16%	29%	17%
17	コミュニケーション力の重要性がわかっ ていると思っ ていますか？		94%	87%	97%	90%
18	自分にコミュニケーション力があると思っ ていますか？		52%	42%	66%	29%
19	情報アクセス力と分析力の重要性がわかっ ていると思っ ていますか？		92%	75%	97%	83%
20	自分に情報アクセス力と分析力があると思っ ていますか？		42%	39%	63%	42%
21	好奇心と想像力の重要性がわかっ ていると思っ ていますか？		87%	84%	99%	83%
22	自分に好奇心と想像力があると思っ ていますか？		65%	60%	73%	58%
23	KOA学で、自分に批判的思考力が身につ いたと思っ ていますか？		69%	64%	/	/

※ の値は、「5.とてもそう思う」と「4.どちらかと言えばそう思う」という回答の合計。小数点以下第1位を四捨五入した。

問 15. 本校が SGH 指定校であることで、あなたの授業スタイルは変わりましたか？

- ① 変わっていない ② どちらかといえば変わっていない ③ どちらとも言えない
④ どちらかといえば変わった ⑤ 変わった

	1	2	3	4	5
H30 年度	17%	15%	28%	21%	19%
H29 年度	20%	15%	24%	28%	13%
H28 年度	23%	11%	27%	19%	19%

「授業スタイル」という言葉が曖昧なため、「意識変容」をとらえるのにはあまり適切ではないかもしれない。次年度は質問を変えたい。

問 16. 8 月の「リトリート大会」には参加しましたか？

- ① はい ② いいえ

	1	0
H30 年度	85%	15%
H29 年度	84%	16%
H28 年度	89%	11%

問 17. 11 月の「校内研究授業大会」には参加しましたか？

- ① はい ② いいえ

	1	0
H30 年度	85%	15%
H29 年度	87%	13%
H28 年度	91%	9%

問 18. 平成 30 年度においてアクティブラーニングに取り組みましたか。

- ① 取り組んだ ② 取り組まなかった（問 20 へ）

	1	0
H30 年度	91%	9%
H29 年度	84%	16%
H28 年度	88%	12%

アクティブラーニング実施教員数は昨年度の 84% から 91% へと増加したがグループワーク活用教員数は昨年度 35%、今年度 35% と変わらなかった。この最大の原因としてあげられるのは大学の一般入試対策を求める生徒の存在である。

問 19. アクティブラーニングの導入によって生徒の学習に対する取り組みに変化が見られましたか。

- ① 見られなかった ② どちらかといえば見られなかった ③ どちらとも言えない
④ どちらかといえば見られた ⑤ 見られた

	1	2	3	4	5
H30 年度	1%	9%	19%	37%	34%
H29 年度	3%	4%	30%	29%	33%
H28 年度	1%	3%	31%	38%	25%

問20. 本校のSGH事業では、8つのKOA Global Skillsを生徒に習得させることを目標として
 ています。あなたはこのことを知っていましたか？ ① 知っていた② 知らなかった

	1	0
H30年度	97%	3%
H29年度	90%	10%
H28年度	90%	9%

問21. KOA Global Skillsは、「1. 批判的思考力と問題解決能力」、「2. コラボレーションと
 リーダーシップ」、「3. 俊敏性と適応力」、「4. 起業家精神」、「5. コミュニケーション力」、
 「6. 情報アクセス力と分析力」、「7. 好奇心と想像力」、「8. 英語運用能力」の8つです。
 あなたはこれらのスキルの具体的内容を知っていますか？

- ① ひとつも知らない ② 1つ～2つは知っている ③ 3つ～4つは知っている
 ④ 5つ以上知っている ⑤ 全部知っている

	1	2	3	4	5
H30年度	5%	17%	21%	17%	39%
H29年度	4%	21%	21%	26%	29%
H28年度	7%	26%	20%	12%	35%

8つ全部知っていると答えた専任教員が39%しかいないという事実は厳粛に受け止め、次年度
 での周知をはからなければならない。

問22. 「地球学」、「Science Global Studies」、「KOA Global Studies」、「光楠スピリッツス
 タディーズ」で生徒が概略どのようなことに取り組んでいるか知っていますか？

- ① 知らない ② どちらかといえば知らない ③ どちらとも言えない
 ④ どちらかといえば知っている ⑤ 知っている

	1	2	3	4	5
H30年度	8%	3%	11%	48%	31%
H29年度	2%	2%	14%	41%	41%
H28年度	4%	11%	9%	44%	32%

問23. 担当クラスの生徒（グループ）が具体的にどういう内容の研究をしているか知ってい
 ますか？

- ① 知らない ② どちらかといえば知らない ③ どちらとも言えない
 ④ どちらかといえば知っている ⑤ 知っている

	1	2	3	4	5
H30年度	14%	15%	12%	22%	38%
H29年度	11%	12%	5%	34%	38%
H28年度	10%	12%	17%	18%	43%

問24. 担当のクラスの生徒が、KOA Global Skillsを身につけてきたと感じますか？

- ① ない(問26へ) ② どちらかといえばない(問26へ) ③ どちらとも言えない(問25へ)
 ④ どちらかといえばある(問25へ) ⑤ ある(問25へ)

	1	2	3	4	5
H30年度	11%	15%	32%	16%	26%
H29年度	8%	5%	31%	34%	22%
H28年度	7%	10%	27%	39%	17%

問25. 8つのスキルの特にどれについてそのように感じますか。該当するスキルの番号をチェックしてください。(複数回答可)

- ① 批判的思考力と問題解決能力 ⑤ コミュニケーション力
 ② コラボレーションとリーダーシップ ⑥ 情報アクセス力と分析力
 ③ 俊敏性と適応力 ⑦ 好奇心と想像力
 ④ 起業家精神 ⑧ 英語運用能力

	1	2	3	4	5	6	7	8
H30年度	16%	13%	8%	6%	13%	15%	14%	15%

H29年度とH28年度は、問の形式が異なったので割愛する。

問26. KOA学やSGS、地球学、光楠スピリッツスタディーズ以外の自分の教科でKOA Global Skills (問25の選択肢参照)を意識した授業をしていますか？

- ① していない ② どちらかといえばしていない ③ どちらとも言えない
 ④ どちらかといえばしている ⑤ している

	1	2	3	4	5
H30年度	25%	12%	26%	20%	17%
H29年度	14%	15%	28%	25%	18%
H28年度	19%	19%	19%	25%	19%

問21同様、KOA Global Skillsの周知が急務であることを物語っている。

問27. 「ルーブリック」について知っていますか？

- ① 知らない ② どちらかといえば知らない ③ どちらとも言えない
 ④ どちらかといえば知っている ⑤ 知っている

	1	2	3	4	5
H30年度	5%	13%	12%	15%	55%
H29年度	10%	12%	10%	20%	49%
H28年度	17%	13%	10%	20%	40%

「ルーブリック」についての啓蒙活動を継続する必要がある。

問28. 平成30年度中にルーブリックを使って生徒の評価をしたことがありますか？

- ① していなかった ② どちらかといえばしていなかった ③ どちらとも言えない
 ④ どちらかといえばしていた ⑤ していた

	1	2	3	4	5
H30年度	52%	4%	9%	4%	31%
H29年度	47%	9%	10%	10%	25%
H28年度	63%	9%	8%	6%	14%

「ルーブリック」を活用しているのは主としてSGH対象コースの国際コース担当教員に限られている。

Framework of Curriculum

When Kyoto Gakuen High School attained SGH in 2015, it gave us the incentive and opportunity to reform our courses. Our first year Kokusai Course was remodeled to create a solid English foundation, our second year and third year courses were completely transformed to instill the eight skills of a Global Navigator. These three years have emphasized both preparation for the students' university entrance but also to provide them the competencies necessary to succeed in the future on the international stage.

The importance of immersion content classes has been paramount for the students to truly acquire the ability to succeed with the KOA skills. This belief is also strengthened by exposure of the students to a broad range of topics, teaching methods (strong focuses on scaffolded student-centered learning), the adaptability of our teachers (creating robust curriculum that include best teaching methods), and also an acute understanding of skill acquisitions which were one of the components of KOA Global Studies.

In the beginning of SGH we had the daunting task of transforming all our classes from teacher-centered classes to classes which instruct and allow our students to develop the following skills: Research, English, Collaboration, Independence, Initiative, Curiosity, Agility, and Entrepreneurialism. This transition gave us a great opportunity to create a student-centered curriculum that was focused around skill acquisition and not entirely on information acquisition.

With this, we realized that for us to have the greatest success in instilling the skills in the students, we needed to scaffold our course, focusing on English language fundamentals in their first year and then using this foundation to develop the other 7 skills in their second and third years. At the beginning, to further strengthen our focus on the 7 skills, we needed to improve the structure of our classes through the introduction of the following:

1. Diversify Platforms

Utilizing different mediums of instruction is important. By using different forms of instruction you can increase the attention of the students. It also extends the contact time you can have with the student but also the ability to create a portable classroom. Wherever a student has a smart phone or pc they can access information. That is why we began to include online elements and a digitization of the materials needed for our classes. All classes now have Google Classrooms that we use to provide materials and instructional videos to the students. For the teachers, we digitized all teaching materials and syllabi using Evernote to store the information. We also have begun to use Slack, for greater communication between teachers increasing the ability to collaborate.

2. Record Instructions Outside of Class

Although in the past there has been a bizarre amount of opposition to this it is relatively straight forward, you can record your actual instruction outside of class. I understand the opposition stems from the set up time of doing this, in that you have to individually record yourself teaching each component. In essence this could easily take over 100 hours in total. However, in the long term when you see that these instructions can be utilized by any teacher, the combined saving of time far exceeds the initial setting up of this model. Once the videos are made the students can access it from their platform. What we do is upload them to youtube, then create a QR code for the web address so the students scan the QR code and are taken to the video on youtube. The key positive points to emphasize are:

- Tasks can be divided by multiple individuals, thus shortening the amount of time to record this.
- Once done, you have a database of lesson points that can be used by any teacher in any course. As long as you have a sharing platform (i.e Google Classroom).
- Students have access to your instruction from anywhere/anytime.
- Students can review past instruction multiple times, or prepare for future instruction.
- Freeing up time for helping individual students in class, or reinforcing the information that they had already watched prior to class.
- In the long-term, all teachers can save time in each class to help students practice the information and thus save time teaching the material.

3. Teaching Critical Thinking and the Analysis of Data

As analyzing data is a 'skill', it is important that the improvement comes about through practice. Without the proper skills and experience this is challenging for students to do. We start this in first year but it carries throughout their 3 years. Although students see data in different forms be it in statistics, infographics or diagrams, the method of teaching students how to interpret and delineate the information is shared. In order to help students prepare for the IELTS exam, we teach them to analyze data in **Communication Eigo I**. A Task 1 writing question for IELTS is when you are given a graph, table or chart and are required to write 150 words describing the information from the diagram. To do this we scaffold their learning ability by providing example sentences and also sentence structures that they can utilize in their writing.

4. Qualitative Understanding of Quantitative Data

Qualitative understanding of quantitative data is closely connected with being able to make inferences. This instruction is done through content-based instruction, quite often students lack the base knowledge and critical thinking ability to understand the consequences and make connections between data and other sources. In the beginning through content based instruction we try to build a base of information in the target component that the students can use in the class. In so doing the students, although not given the answers, can think about it critically. The complexity of the students' ability is markedly different between when they are writing IELTS Task 2 essays and when they are preparing for university entrance. The two main reasons are that:

- A. They have built a base knowledge of many different areas over the three years through what they study in our courses. Also, the content they have studied in their other classes (especially social studies and history classes).
- B. The amount they actually practice analyzing information and data provides both confidence and ability. By the time students have finished their third year in the Kokusai Course, they have significantly practiced analyzing information in slidedocs and essays. We check their essays and give feedback so that students can target weak points and improve their writing for the next time.

5. Qualitative Grading

It is important to have qualitative understanding of quantitative data, but also transitioning towards more qualitative assessment. We needed to update the way we grade our students. This has been achieved through the use of rubrics in all our classes. The rubrics we have developed are specific to each class we teach, focusing on specific goals and assessment. These rubrics consist of written assignments, classroom participation, presentations, powerpoint slide design, speaking tests, and student peer reviews. We encourage the students to have a strong understanding of the rubrics we use, which allows them to understand what areas they must focus on to improve a specific area where they are lacking in skills or knowledge.

6. Feedback

As mentioned in the previous point, feedback after they complete their work identifies what English skill they are developing, but also identifies the time constraints of both the student and the teacher. Regarding reading and writing, frequency is important but feedback is as important. The more a student is required to produce written work the more they will improve, this is when feedback is important since if a student is unaware of the mistakes they are making, then it is difficult for them to improve their deficiencies. This is where time constraints of the teacher, due to class size or other duties, can restrict the ability of the teacher to support each student equally.

7. Frequency

Once again as mentioned above, frequency is extremely important for the support of the students, but we needed to minimize the impact of time constraints. Flipping our classrooms helped us to do this. Flipping classrooms increase this opportunity for students to maximize class time for either individual feedback with the teacher, supervised writing, or to practice speaking and listening the teacher allocates. Also, the nature of speaking tests is another way for students to receive the necessary support. Quite often speaking tests are done by memorizing a set text which they must repeat verbatim, this really doesn't measure their communicative ability. A speaking test between two students in which questions and answers are given would be a better use of time. This can also be done one-on-one between the student and the teacher.

8. Student Support

In addition to written feedback and feedback given in class, the reservation system we use is a good way for the students that require support to arrange a time to receive support from their teacher. When you have 30 students

in one class it becomes very difficult to give the support to the students even in a “flipped” class. Using the platform ‘youcanbook.me’ it has allowed students to book a time to see the teacher. In this platform the teacher allocates a certain number of time slots that suits their workload and schedule, and the students can select a time slot that is available, this prevents students from being turned away because the teacher has previous engagements to consider.

In summary, with the above changes we have built a well structured curriculum for our students, but also provided the necessary tools for the teachers to be the best educators they can be. The SGH fellowship gave us the impetus needed to transform our school into a 21st-century institution of learning, a place where we can create a Japanese that can succeed in a global environment. In the following pages, we have detailed how we have both adapted the structure of our classes to maximize the delivery of our lessons and instill the KOA global skills in all of them.

Communication Eigo I

In this advanced communication course, we adhere fairly closely to our governing ethos of creating true Japanese that have the ability to act on the global stage. **Communication Eigo I** overlaps with the **Eigo Kaiwa** course, thus allowing for more presentations, discussions and debates in various formats across a range of topics. There is one-on-one feedback with the teacher and collaboration between students.

We have added two new elements to the curriculum: a seminar/workshop format for both courses in Terms 3 and 4. Teachers schedule at least 1 seminar (lecture-based) class per week with all students for content instruction. The remaining classes are used for workshop instruction and discussions with smaller classes of students that one teacher can take and give targeted instruction. This also makes it easier for teachers to collaborate in the course and be able to teach more effectively even if they are unfamiliar with the material.

Research Skills	Students are given homework based around reading news articles or journals. Students are also regularly tasked with producing vocabulary notebooks. In doing so, students learn how to use resources such as dictionaries and thesauruses.
English	Students are taught English academic writing using only English terminology, immersive classes (English only classroom) Classes are delivered entirely in English. Students form strong powers of reasoning and description in the target language.
Collaboration	Collaborative discussions prior to essay writing. External examinations create a strong collaborative atmosphere
Critical Thinking	Self-directed learning Independent essays
Initiative	Work at their own pace with clear deadlines Flexible classroom and after school bookings allowing students to maximize instruction and exposure to in-class materials.
Oral/Written Communication	Academic writing focus. Group discussions
Curiosity and Imagination	Independent writing, Reasoning and supporting their arguments
Agility and Adaptability	Multiple essay questions are used to increase students ability to adapt.

Term 1	Term 2	Term 3	Term 4	Term 5
<ul style="list-style-type: none"> - Building grammar/vocabulary/reading skills - Parts of Speech - Introduction to paragraph writing - Scanning 	<ul style="list-style-type: none"> - Writing Paragraphs - Providing Evidence 	<ul style="list-style-type: none"> - Introduction to Short paragraph writing (using IELTS writing task 1 as a template) - Vocabulary - Inference 	<ul style="list-style-type: none"> - Introduction to Essay writing (using IELTS writing task 2 as a template) - Vocabulary notebooks 	<ul style="list-style-type: none"> - Reading and writing - Introduction to research - PREP for 2nd year - Introduction to research essays

Eigo Kaiwa

The **Eigo Kaiwa** class, as stated earlier, overlaps in many ways with the current **Communication Eigo I** class but with a few differences. The major difference being that it focuses less on writing, and more on speaking and focusing on what we have described as speaking Parts 1, 2, and 3. Part 1 focuses on conversational English, part 2 focuses on anecdotes, and part 3 focuses on the ability to communicate opinions. These 3 parts are important for students wanting to achieve a band score of 6 or more in IELTS. The topics of Part 3 also correlate greatly with the topics covered in IELTS writing Task 2 which are introduced in **Communication Eigo I**.

The use of outside reading material/videos is implemented to give students a broader knowledge of certain topics supplemented by comprehension questions on Google Classroom. These potentially not only assist students with more well-rounded arguments, but also help eliminate the time spent in class on teacher-led instruction and maximize student-speaking time, which is crucial to build fluency.

Speeches and presentations continue to have a place in both classes, though in the case of the **Eigo Kaiwa** class, students are not given predetermined topics but instead given some freedom in their topic choice. The topics themselves have been covered in class, and expanded on through student research giving them some foundation for their second year presentations. Each term scaffolds vocabulary and speaking tasks into more complicated vocabulary and tasks. We could not start on debates on the first day of school; we had to structure a series of classes that gradually increased familiarity with the concepts and skills required to build an argument and freely express ideas in a limited time before applying those practices to actual debates.

Regarding end-of-term assessment, we applied a gradational approach. There is a natural progression from memorizing vocabulary from thematic questions and answers to creative and complex answering to surprise questions. Increasing fluency requires students to express themselves spontaneously to questions they have not been familiarized with before. Agility, creativity, and critical thinking are crucial goals and part of our assessment.

Research Skills	Research done for Presentations
English	Conversational speaking preparation Immersive classes (English only classroom)
Collaboration	Group presentations Workshop classes
Critical Thinking	Self-directed learning Independent presentations Presentation slide design
Initiative	Flexible classroom and after school bookings allowing students to maximize instruction and exposure to in-class materials.
Oral/Written Communication	In-class debates and discussions Assessments focus on interviews and speeches
Curiosity and Imagination	Independent research Reasoning and supporting their arguments

Agility and Adaptability	Topics covered: Each week multiple discussion questions are used to increase students ability to adapt
--------------------------	--

Term 1	Term 2	Term 3	Term 4	Term 5
<ul style="list-style-type: none"> - Speaking Part 1 - Using IELTS Part 1 as a means to build speaking confidence, while transitioning over to Part 3 towards the end of the term. 	<ul style="list-style-type: none"> - Speaking Part 2 - Similar focus as term 1, but with a greater range of topics through possible reading/ viewing materials outside of class. - Incorporating debates 	<ul style="list-style-type: none"> - Speaking Part 3 - Discussing personal/non personal topics at length 	<ul style="list-style-type: none"> - Presentation/ Speaking overview of the three parts 	<ul style="list-style-type: none"> - Presentation/ IELTS - Presentations can cover a variety of topics related to IELTS Speaking Part 3 topics covered throughout the year.

Communication Eigo II

Having students with a strong foundation created in their first year allows us to increase the output of the students. The smaller class sizes allow us to increase the breadth of what we can cover. **Communication Eigo II** has gone through a transformation when we first achieved SGH. We have tried to emphasize all of the global navigator skills in the second year Kokusai Course.

Students prepare for immersive classes that they will take when they study abroad. In addition to the written component, we have introduced more classes to develop their critical thinking ability, especially looking at delineation, classification, mitigation, and categorization which are fundamental skills that allow the students to be more independent and to process information to understand its relevance and importance.

Teachers introduce four of the most common essay styles in academic writing. We look at more research topics than in the past, with a clear research topic for each term to emphasize the focus on academic writing.

Research Skills	Students are given the same topic each term to research and construct essays in order to prepare for their studies abroad, as well as for the Overseas Writing class assigned whilst they study abroad. They find proper sources of factual information to form their own opinion. The purpose of research is to understand something before forming an opinion.
English	Students are required to use English sources for their research and do all work in English. Research and all other assignments are carried out in English.
Collaboration	Because they all share the same research topic, students have the luxury of sharing sources and expressing opinions as a class.
Critical Thinking	Students are required to do their own work and rely solely on themselves. They must be able to effectively use technology to aid their assignments and properly structure written work in English before they study abroad.
Initiative	Students are expected to put as much time in their understanding a topic, structuring and formatting an essay, using proper citations and remembering due dates. Being consistent is crucial.

Oral/Written Communication	Students are required to write for most of the class time. Students complete three research essays. Students complete two written exams.
Curiosity and Imagination	Formulation of opinions can be difficult for students, especially when there is a large gap of knowledge. Research, vocabulary building, communication from teachers, reading, and writing are the primary tools for bridging that gap.
Agility and Adaptability	Students are required to cover two essay types each term for 2 terms in total. Essentially, they will construct two essays each term in order to prepare for their future writing assignments abroad and for their graduation thesis due in their third year of high school.

Term 1		Term 2	
Topic: Education	Topic: Education	Topic: Population Decline	Topic: Population Decline
<ul style="list-style-type: none"> - Pros & Cons - Basic Research Skills - Footnoting - Bibliography - Critical Thinking - Mind Mapping - Academic Language 	<ul style="list-style-type: none"> - Compare & Contrast - Descriptive writing - Research Skills - Referencing - Footnoting 2.0 - Timed essay writing - Exam: Topic TBA 	<ul style="list-style-type: none"> - Causes & Effects - Delineating Causes - Predicting Effects - Critical Thinking - Leading the Discussion 	<ul style="list-style-type: none"> - Mitigation vs Solving - Critical Writing - Review Academic writing structure(s) - Research Essay - Exam: Topic TBA

Presentation

The key focus of **Presentation** class is to develop the students' interpersonal skills (collaboration), presentation skills, and independent studying skills. An important component of the class is the "controlled freedom" enjoyed by the student. The structure of the class being provided by the use of a Gantt chart, the students must work together to complete the goals set out in the Gantt chart, with weekly after school progress meetings with the teacher to identify what the students need to work on. This scaffolded approach to the project allows students to develop their independence in a controlled manner in which students benefit from the guidance of a teacher while being able to enjoy the benefits of a student-centered class.

Research Skills	Students are given topics to research and make google slides for future presentations.
English	Students are required to use English sources for their research and do all work in English.
Collaboration	Students are put into groups of 3-4 to research, share sources, and provide feedback for their google slides for future presentations.
Critical Thinking	Each group of students are in charge of their own topics. No other groups in the same classroom will do the same topic.
Initiative	Students are required to do research and slide design outside of the classroom whilst utilizing efficient work hours in class when the teacher is present.
Oral/Written Communication	All students must present their slides to the class. Each team must make the information clear and concise. The final exam consists of all topics.
Curiosity and Imagination	Students have the freedom to customize their slides using templates and working on the same assignment as a team.

Agility and Adaptability	Students must learn various topics in a relatively short amount of time in order to explain it to others and be tested on the knowledge. They are also tested on their opinions formed based on factual evidence.
--------------------------	---

Term 1	Term 2
Research Topic: Society - Research - SlideDoc - Presentation Slides - Lecture - Final Exam (Interview)	Research Topic: Crime - Research - SlideDoc - Presentation Slides - Lecture - Final Exam (Interview)

Overseas Writing & Graduation Thesis

Students begin their graduation thesis while studying abroad. This is extremely independent work, with most of the teacher input occurring prior to their departure in August. With their difficult and demanding schedule during their time abroad, the students have until their return to submit a finalized version of their thesis. We start this as early as possible to alleviate the burden placed on the students while overseas.

Research Skills	Students research about a topic they selected and construct essays in order to compile into a final graduation thesis. They find proper sources of factual information to form their own opinions. The purpose of research is to understand something before forming an opinion about it.
English	Students are required to use English sources for their research and do all work in English.
Collaboration	Students submit their sources, write three essays, and combine all their essays into a thesis paper all whilst their teacher provides feedback and probing questions online.
Critical Thinking	Students are required to do their own work and rely solely on themselves. They must be able to effectively use technology to aid their assignments and properly structure written work in English whilst studying abroad.
Initiative	Students are expected to put as much time as possible in their topic, structuring and formatting an essay, using proper citations and remembering due dates. Being consistent is crucial.
Oral/Written Communication	They produce three separate essays that are combined into a thesis.
Curiosity and Imagination	Formulation of opinions can be difficult for students, especially when there is a large gap of knowledge. Research, vocabulary building, communication from teachers, reading, writing, and living abroad are the primary tools for bridging that gap.
Agility and Adaptability	Students are required to write 3 essays about their research topic over a 5 month plan, then combine and edit those essays into a conclusive thesis with clear reasoning and well-supported opinions. This course creates the senior thesis due in their third year of high school.

Pre-departure	Term 3	Term 4	Term 5 —> 3rd Year
<ul style="list-style-type: none"> - Research - Abstract - Preamble - Data Collection 	<ul style="list-style-type: none"> - Chapter 1 - Research skills - Media Review - Writing an abstract - Journal/Critical Thinking Exercises 	<ul style="list-style-type: none"> - Chapter 2 & 3 - Bibliography - Journal/Critical Thinking Exercises 	<ul style="list-style-type: none"> - Focus on compiling and finishing a completed thesis - Journal/Critical Thinking Exercises

Eigo Hyogen 2 & Presentation

Third year classes are based on two important ideas: Knowledge and Skills. With most of the English language instruction occurring in their first two years, coupled with the exposure to English language and foreign culture during their time abroad, we needed to maximize this opportunity to further develop their English ability in an immersive environment. Capitalizing on their experience of western classroom methodology, we have developed a system that emphasizes competency skills as well as a deepening of knowledge that students sorely lack.

Once again, as is the case with the second year **Presentation** topics, we have divided the topics into a wide range of areas to stimulate the students' adaptability and curiosity. These topics allow us to develop competencies, and in return develop the skills necessary for students to move beyond a superficial understanding of topics. These skills include:

- **Observation:** Research gathering
- **Analysis:** Making connections looking at direct and indirect consequences
- **Interpretation:** Delineating the causes and underlying definitions
- **Reflection:** Inference and creating objectivity
- **Evaluation:** Explanation and decision making

Through developing these competencies, we prepare students for both their future and the challenging university entrance examinations.

Furthermore the structure of the group project has 6 key stages:

- **Research:** Each group is given a different topic that will require guided research in which students are provided prompts that they will have to use the internet to research.
- **Writing:** After completing the research stage, they need to plan the content to write an academic essay.
- **SlideDocs:** This blends visual elements with information that has proven to improve the ability to digest and retain information.
- **Presentation Slides:** Students convert their SlideDocs into aesthetically pleasing slides in order to give presentations.
- **Lecture:** Students will give lectures on their research topic to the other groups in the class, while listening to the lectures the groups will study the groups' SlideDocs.
- **Final Exam (Timed Writing):** Students are given a prompt and write an essay. The prompt is general to the research topic. This emphasizes the importance of quality in their own work and encourages participation with other groups (collaboration).
- **Final Exam (Interview):** Teachers interview each student based on the material covered in the class. This is to emphasize the need to develop the students' adaptability as well as their communicative ability. Students need to be able to display their understanding of the subject material in an academic setting.

Research Skills	<p>Students are given topics to research and make google slides for future presentations.</p> <p>Students must research their topic to provide sufficient information to write an academic essay, a SlideDoc and to give a presentation.</p>
-----------------	--

English	Communication between students are carried out in English
Collaboration	Students are placed in research groups of 3-5 students. Students must work closely with other students in order to complete the required components of the research projects.
Critical Thinking	Students determine what role they will take in their group. Students' progress is attained through a gantt chart that charts their progress, thus once they have completed a task they can continue onto a different phase of the project. Minimal teacher centered classes.
Initiative	Students have the freedom to design their own presentations. Students must determine what aspects of the research topic they will research. After being given rubrics students must determine what are the necessary elements to attain the best possible score.
Oral/Written Communication	Students must write an essay on their research topic. Students must design a SlideDoc presenting their research to the class. Students must give a lecture to the class based on their research. Students take an interview exam defending their research.
Curiosity and Imagination	Students are 100% in control of what they research. Students can choose the topic they find most interesting.
Agility and Adaptability	Each term the topic changes, culminating in the final term where students have 100% control over all aspects of the research and topic. Throughout the year the students' roles change, thus allowing students to experience different roles in their research groups that require different skill sets.

Term 1	Term 2	Summer	Term 3	Term 4
<ul style="list-style-type: none"> - Research Topic: Environment - Complete Research - Write Essay - Write Bibliography 	<ul style="list-style-type: none"> - Research Topic: Science and Technology - Complete SlideDoc - Presentation - Interview Test 	<ul style="list-style-type: none"> - Summer writing project - Essay exercises - Skill development - Critical thinking workshop 	<ul style="list-style-type: none"> - Research Topic: Politics - Complete Research - Write Essay - Write Bibliography - Complete SlideDoc - Election - Interview Test 	<ul style="list-style-type: none"> - Research Topic: Self Assigned - Complete Research - Write Essay - Write Bibliography - Complete SlideDoc - Presentation - Interview Test

英語資格試験によるコミュニケーション能力の評価

SGH 対象コースである国際コースの英語カリキュラムは、SGH 指定を受けて以来、それまでの英語指導法をさらに改善し、高校2年生の4月末までには、ほぼ全員が4技能全領域においてIELTS 4.0バンド以上を取得することができるようになった。

高校2年4月時点 IELTS ベストバンド (人)

CEFR	A2		B1		B2		C1	
IELTS バンド	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0
2017年度入学生	1	1	17	29	17	1		
2016年度入学生		2	14	42	11	4	1	1
2015年度入学生	1	6	27	23	1			
2014年度入学生	1	12	40	14	3	1		

高校2年4月時点 IELTS ベストバンド (% 対在籍者数)

CEFR	A2		B1		B2		C1	
IELTS バンド	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0
2017年度入学生	2%	2%	26%	44%	26%	2%		
2016年度入学生		3%	19%	56%	15%	5%	1%	1%
2015年度入学生	2%	10%	44%	38%	2%			
2014年度入学生	1%	17%	56%	19%	4%	1%		

この2年間は、国際コース生全員が高校3年次にはIELTS Overall で4.5バンド以上を取得して卒業している。

高校卒業時点 IELTS ベストバンド (人)

CEFR	A2	B1		B2			C1		
IELTS バンド	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0	7.5
2016年度入学生			2	23	25	12	7	2	2
2015年度入学生			11	20	14	8	4		
2014年度入学生	2	7	12	16	18	13	2	1	
2013年度入学生		7	10	17	9	8	3	1	

高校卒業時点 IELTS ベストバンド (% 対在籍者数)

CEFR	A2	B1		B2			C1		
IELTS バンド	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0	7.5
2016年度入学生			3%	32%	34%	16%	10%	3%	3%
2015年度入学生			17%	35%	26%	15%	7%		
2014年度入学生	3%	10%	17%	21%	26%	19%	3%	1%	
2013年度入学生		13%	18%	31%	16%	15%	5%	2%	

一方、SGH 対象ではないコースの英語運用能力を見てみると、卒業時に B1 レベル以上を達成した生徒は 12%と極めて低い水準である。この状況を改善するために、外国語科では教科会において、2019 年度の指導方針の見直しを行ない、2019 年度においては評定に占める平常点の比率を高めること、生徒のパフォーマンスを客観的に公平に評価できるようにするためにルーブリックをさらに整備することが確認された。

2018年度 高校1年国際コース「体育」授業実践報告

保健体育科 佐藤 樹

1. はじめに

本校における保健体育科の教科指導方針は文部科学省の定める「心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的、計画的な実践を通して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力育成と体力向上を図り、明るく豊かで活力のある生活を営む態度を育てる」ことを念頭に授業運営を行っている。その中でも特に「生きる力」という理念を共有し、基礎力・基本的な知識、技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成、学習意欲(挑戦する心)の向上を図ることを目的として各コースのカリキュラムを設定している。

本校国際コースは2年次の長期留学により、1年次と2年次の留学前の3か月、そして3年次の帰国後の4か月しか体育授業を実践することができない。つまり、留学までの1年半でいかに上記のことを踏まえた効果的なアプローチが可能なカリキュラムを設定できるかが鍵となってくる。国際コースにおけるALに取り組んで今年で4年目。今年度の取り組みを振り返りながら次年度に向けた改善点を検討していきたいと思う。

2. 重点項目

上記の理念に加え、以下の5つの柱を軸にカリキュラム編成を行った。

①考える力(創造性)の向上を念頭に置いた授業立案・運営

→1) 生徒自身が授業者としての授業運営

→2) ニュースポーツ実践から学ぶ創造性とコラボレーション力

②アクティブラーニングの確立

→1) 実技ノートを活用した体育授業の実践

2) 生徒自身が指導案を作成し、授業者としての授業運営

③本校における武道(柔道)の位置づけと武道履修から考える国際化

→国際コース2年時における武道履修による柔道「投げの形」習得

④心を育む体育授業の確立

→1) 集団行動を通じた規律の習得

2) 技術偏重型の体育評価を行わない、「伸び」を評価するループリックの提示

⑤教科を横断した(特に社会・道徳)保健授業の確立

3. カリキュラム

今年度、高校国際コースでの実施カリキュラムは以下の通り。

学期	前期												中期								後期														
	4			5			6			7			9				10				11				12				1		2		3		
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
1年	OR	集団行動												バスケットボール								ニュースポーツ													
2年	OR	柔道												8月末より留学																					
3年	OR	6月末まで留学												バドミントン/バレーボール/サッカー/卓球より選択																					

※高1高2は体育2単位、保健1単位、高3は体育3単位で実施

4. 具体的な取り組み事例①「集団行動」

集団行動に取り組む最大の目的は、社会は集団で成り立っており人は一人では生きていけないことを知ることにある。集団をつくることで助け合ったり、目標を成し遂げることができ、良い環境の中から本当の仲間意識が芽生え、集団の力を発揮できるようになる。つまり集団行動とは共生の時代を生き抜く現代人にとって必要な素養を学ぶことができる大変貴重な教材と言えるだろう。

本単元の成果発表を高校体育祭で披露することと設定し、以下の単元計画で授業を展開した。

導入	① オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・集団行動とは(動画を用いて説明) ・練習計画と注意点の説明 ・号令係の選出 ・評価について ・基本姿勢(気をつけ、休め) 	1時間
	② 基本動作の続き	<ul style="list-style-type: none"> ・気をつけ、やすめ、腰を下ろして休め ・右(左)向け、右(左)、礼 	1時間
基本技術の習得	③ 行進と注目隊形	<ul style="list-style-type: none"> ・行進と行進中の方向転換 ・注目隊形の各列の動き 	2時間
	④ 行進と列の分割	<ul style="list-style-type: none"> ・前回までを通して復習 ・行進と行進中の方向転換 ・列の分割と合流 	4時間
	⑤ 腰を下ろして休め	<ul style="list-style-type: none"> ・前回までを通して復習 ・前方から腰を下ろして休め 	2時間
	⑥ 四角形への変換	<ul style="list-style-type: none"> ・前回までを通して復習 ・四角形を描く 	2時間
	⑦ 集合と開列、方向転換	<ul style="list-style-type: none"> ・前回までを通して復習 ・緊急時避難隊形と両手間隔の開列 ・4種類の回れ右と半ば右向け右 	4時間
	⑧ 列の交差	<ul style="list-style-type: none"> ・前回までを通して復習 ・列の交差 	6時間
	⑨ 通し練習	<ul style="list-style-type: none"> ・入場から退場まで 	4時間
授業の発展	⑩ 成果発表	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生への披露(授業時間内) ・体育祭本番での披露(授業時間外) 	1時間
	⑪ 振り返り		1時間

最初のオリエンテーションで集団行動の意義や到達目標などを説明した際は、これから取り組む内容のイメージがなかなか持てない様子であったが、動画を見本として活用したことで一定の理解を得られたように思う。その後、今単元のカギとなる号令係の選出に移り、生徒間の話し合いを経て立候補での決定となった。

具体的な授業の進め方としては、まずインプットとしてその日に取り組む基本技術やフォーメーションを、見本となる動画を用いて確認したのち、教員主導で行った。その後、号令係が号令をかけながらの練習に移行し、その都度、号令係から改善点や評価点を声掛けしながら反復するという流れで取り組んだ。また、授業の際には毎回、動画撮影を行い、授業時間のはじめや途中などに自分たちが取り組んでいるフォーメーションをモニターで立体的に確認しながら、相互で指摘し合う時間なども多く取り入れた。生徒主体での授業の実施形態に戸惑いを見せる生徒も最初は多くいたが、時間の経過とともに徐々に会話も増え、お互いで教え合う場面が増えてきたことは単元のねらいが達成されている点として評価できるだろう。週に2時間の授業も行事などで練習時間を奪われてしまう限られた状況の中でも、9月末に実施される体育祭本番に向けて懸命に取り組み続けた。

その結果、迎えた本番ではグラウンドに集まった生徒、教員、保護者総数約2000名の前で一糸乱れぬパフォーマンスを堂々と披露することができた。パフォーマンス終了と同時にグラウンドに響き渡る大きな拍手は生徒一人ひとりに大きな達成感と自信をもたらしたことだろう。そしてまた今単元は、本校が掲げるグローバルナビゲーターとしての資質8スキルズの中の【スキルズ2】コラボレーションとリーダーシップ、【スキルズ5】コミュニケーション力、【スキルズ6】情報アクセス力と分析力の3スキルズにおいて大きな成長を実感する取り組みとなった。



5. 具体的な取り組み事例②「バスケットボール」

バスケットボールは経験者、未経験者でパフォーマンスに乖離が生まれやすい種目である。また、未経験者で運動を不得意とする生徒はシュートを入れることが難しく、興味が薄れてしまい運動能力優位者の種目になりがちである。そこで今授業ではその乖離を生じさせないようにするため、ドリブルを一切禁止したうえで、以下の単元計画に基づいて授業を展開した。

導入	① オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・バスケットボールの歴史 ・班分け ・係決め ・評価について ・ノートの書き方、提出方法 ・体ほぐし ・技能チェック(ゲーム) 	1時間
	② シュート率調査	<ul style="list-style-type: none"> ・シュート成功率の最も高い場所を探す 	1時間
基本技術の習得	③ シュート成功率向上練習	<ul style="list-style-type: none"> ・②で得られた場所からの反復練習 ・セットシュートのフォーム確認 	1時間
	④ ランニングシュート練習	<ul style="list-style-type: none"> ・レイアップシュートのフォーム確認 	1時間
	⑤ ドリブル	<ul style="list-style-type: none"> ・正確なドリブル技術の習得 	1時間
	⑥ パスワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・正確なパスワークと技術習得 	1時間
	⑦ ランニングパスワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・動きの中でスムーズなパスワークを習得 	1時間
	⑧ オフェンスの基本練習A	<ul style="list-style-type: none"> ・ポストプレー ・カットインプレー 	1時間
	⑨ オフェンスの基本練習B	<ul style="list-style-type: none"> ・速攻練習 	1時間
	⑩ ディフェンスの基本練習	<ul style="list-style-type: none"> ・ゾーンディフェンス ・マンツーマンディフェンス ・2種類のミックス練習 	1時間
	⑪ パスワーク&ノードリブルゲーム	<ul style="list-style-type: none"> ・パスワークの反復練習 ・ノードリブルによるゲーム 	1時間
	⑫ ゲーム練習	<ul style="list-style-type: none"> ・ハーフコート 3on3(ドリブルなし) ・オールコート 4on4(ドリブルなし) 	1時間
授業の発展	⑬ プランニングと実践	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム分析による練習メニュー作成、実践 ・相互評価による反省とメニューの再構築 ・授業の指導案作成 ・授業運営 	6時間
	⑭ 公式リーグ戦(ゲーム分析実施)と反省。		3時間

まず、チーム構成に関しては技能調査(経験の有無、ドリブル、レイアップ、セットシュート)を行ったうえで、その結果を参考に全チームの技能レベルを平均化し進めることとした。そのうえで、シュート成功率を高めさせることに重点を置き、全ての生徒に「7割地点」の意味と成功率の向上に向けて練習する時間を多く与えた。また、ドリブルを禁止することからパスの有効性を活用した集団的技能を重視し、「パスをもらう者の空間への走り込み」や「パスを出す際の状況判断」、「パスを出した後の動き」に重点を置いた「空間認識能力」と「高い運動量」を獲得できるよう指導の軸を置いた。前述してきたバスケットボールの技能においては単元計画前半においてワークノートを用いながら練習方法や技能のポイント解説をインプット型の授業で展開していった。また、単元計画後半では、チームの技術力を分析した上でチーム力向上メニューを自らで作成することによって、【スキルズ3】俊敏性と適応力、【スキルズ5】コミュニケーション力、【スキルズ6】情報アクセス力と分析力を育てていけるよう指導した。特に自らが考えた練習計画によってチーム力や個人の技術力が向上する喜びを感じることは、運動を不得意と感じる生徒にとって大変意義のあるものであったと確信している。

しかし、残念であったのは単元計画後半で取り組むはずだった単元計画⑬「指導案作成と授業実践」に行事や模試の関係で辿り着けなかった点である。指導案を作成し、模擬授業を実践することは経験者、未経験者が各々の特性を活かしながらチーム内で役割分担を果たすという点で【スキルズ2】コラボレーションとリーダーシップを大いに伸ばさせることができるため、今単元の最も重要な場面であった。大いなる反省点として次年度に活かし、学校行事や模試等の年間計画と慎重に照らし合わせ、単元計画を立てなければならない。

バスケットボール技術習得向上サーキット
()班・()月()日実施

- (班別サーキットの作り方)
- 試合後のゲーム分析、ミーティングの反省を生かし、班の技術的課題を発見する。
 - 課題を解決するための具体的な練習方法を、学習スキルより選ぶ。
 - 練習内容別に(基本パターン、速攻、ディフェンス等)練習の順番を考える。
 - サーキットは、全体で合計20分で終了するように時間配分を決める。
 - 練習種目は最高5種類まで。
 - ゲームで練習を生かせるように意識、協力、工夫する。
 - 練習方法は班別のオリジナル(学習スキルにのっていない)でもよい。

(ゲーム分析から分かるチームの課題)

- .
- .
- .
- .

(班別技術向上サーキット)

練習内容	練習時間(分単位で)
①	
②	
③	
④	
⑤	
(予定合計時間)	(実際にかかった時間)

班	月	日	曜日	天気	回目
記録者				欠席	
本時の目標					
遅れ	学習内容		注意すべきこと		
0					
10					
20					
30					
40					
50					
遅延					

6. 具体的な取り組み事例③「ニュースポーツの創造」

ニュースポーツ (New sports) とは、アメリカにおいて 20 世紀後半以降に新しく考案・紹介されたスポーツ群のことを呼び、一般的に、勝敗にはこだわらずレクリエーションの一環として気軽に楽しむことを主とした身体運動を指す。しかし、その種類は多岐にわたり、ハンググライダーのように技術革新によって誕生したものや、セパタクローのように、伝統的な民族スポーツとして親しまれてきたもの、ゴルフをアレンジしたグラウンドゴルフのように既存のスポーツを改変したものといった、世界中にはさまざまな種類があふれている。都市化・少子化によって外遊びの機会が減少し、体力が低下している乳幼児・児童から、高齢化社会における生きがいを求める高齢者まで、幅広い年代層を対象として「生涯スポーツ」(Lifelong Sports)の考え方が必要であり、この考え方は障害者スポーツもこの中に含まれている。既存のスポーツに加えて、体力に過剰な負荷をかけることなく気軽に行える、さまざまなニュースポーツはこの生涯スポーツの普及に不可欠な要素である。

今単元では 1 年間の体育授業の総まとめとして、以下の単元計画に基づきニュースポーツを個人、グループで考案し、中学 1 年生に授業実践を行う形で展開した。

導入	① オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースポーツとは ・班分け ・係決め ・評価について ・ノートの書き方、提出方法 ・体ほぐし 	1 時間
	② ニュースポーツを調べる	<ul style="list-style-type: none"> ・各自ニュースポーツ2種目を調査 ・ノートにまとめ提出 	冬期休暇
展開	③ ニュースポーツを創り出す(1)	<ul style="list-style-type: none"> ・自身で新たなスポーツを考案する(2種目) ・ノートにまとめ提出 	冬期休暇
	④ 共有する	<ul style="list-style-type: none"> ・各自が考案したニュースポーツを班内で共有する 	1 時間
	⑤ ニュースポーツを知る(1)	<ul style="list-style-type: none"> ・インディアカの歴史やルール ・ラリー練習 ・リーグ戦 	1 時間
	⑥ ニュースポーツを知る(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・アルティメットの歴史やルール ・パス練習 ・リーグ戦 	1 時間
	⑦ ニュースポーツを創り出す(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・各班で種目の決定 ・ルール整備、必要器具の確認 ・授業実践準備(指導案作成) 	4 時間
	授業の発展	⑧ 模擬授業実施	<ul style="list-style-type: none"> ・他の班に対して模擬授業実施 ・ルール修正
⑨ 授業実践		<ul style="list-style-type: none"> ・指導案確認 ・各班での役割分担確認 ・ルールブック作成 ・授業運営 	2 時間
⑩ 授業実施後の分析と反省			2 時間

まず、オリエンテーションにおいてニュースポーツの定義を理解させた上で、冬期休暇の課題として既存のニュースポーツを2種目調査するとともに、新しいスポーツを2種目考案し、学習ノートで提出させることとした。

冬期休暇明けからはそれぞれの考案したスポーツをグループ内でプレゼンし共有したうえで、グループとして採用する種目の決定を行った。ルール整備に関しては、考案したスポーツを実際に自分たち、または他グループに体験してもらうことでルール設定の不備を見つけ出し、より厳格なルール整備を行うこととした。また、考案した種目自体のオリジナル性や面白さはもちろん、達成感や公平性、そして何より安全面に最大限配慮する形でルール整備を行っていった。添削に関してはgoogle classroomを活用し、ルールブックのフォーマットをclassroom上で配布し、入力し提出されたものを受け取ることによっていつでも添削指導を受けることができる状態で進めていった。また、考案した種目に必要な備品はなるべく学校体育施設の中で準備できるものとした一方、不足しているものはすべて自分たちで手作りし備品をそろえる作業も行った。また実際の授業運営を想定し、学習指導案を作成させ、同級生に対しての模擬授業も実施した。

全てのルール整備とルールブックを完成させ、この単元としての到達目標である中学1年生への授業は以下のような割り振りで行った。

時間割

日 時：2019年2月26日(火) 1~2限

場 所：第1体育館、スポーツアリーナ(SA)

対 象 者：中学1年生50名(男子35名、女子15名)

時間割	場所	第1体育館-North	第1体育館-South	SA-North	SA-South
1限	担当班	F班	H班	G班	A班
	種目名	「サークルバウンダー」	「エリミネーションサッカー」	「アクアイズ」	「ジャポニカ」
	受講人数	6名	12名	16名	15名(16名)
2限	担当班	C班	D班	B班	E班
	種目名	「ボンボンボール」	「バスロー」	「イケイケゴーゴーフリスビー」	「やよい」
	受講人数	12名	10名	16名	12名

中学1年生と高校1年生国際コースの2時間連続の合同授業を設定したうえで、2つの体育館を4か所に区切り、各グループ1時間の持ち時間の中で模擬授業に挑んだ。自らが考案したニュースポーツを分かりやすく、安全に、かつ楽しく運営することは決して容易なことではないが、各グループが作成した学習指導案に従いながら、時に想定外の事態にも臨機応変に対応しながら授業運営を行った。

また、模擬授業実践時には保健体育科教員が次ページの評価表を用いて授業運営全体の評価を行った。と同時に、受講した中学1年生にも同様の評価表を配布し、授業評価を行ってもらった。評価の結果は次ページのフィードバックシートに教員評価と受講者評価をそれぞれ入力して示した。

8 スキルズ		判定方法	評価				
スキル1	批判的思考	「実施した種目にオリジナリティを感じましたか」 ・ これまでに経験したことのないような種目であったか。 ・ 経験したことのあるような種目であっても工夫がなされていることによって、新たな発見があり楽しめるものであったか。	1	2	3	4	5
スキル7	好奇心と創造力						
スキル4	起業家精神						
スキル6	情報アクセス力と分析力						
スキル2	コラボレーションとリーダーシップ	「正確な指示によりルールを理解できましたか」 ・ 説明やお手本によってルールを正しく理解することができたか。	1	2	3	4	5
スキル5	コミュニケーション力						
スキル2	コラボレーションとリーダーシップ	「安全に運動することができましたか」 ・ 運動実施中に危険を感じる事がなかったか。 また、危険を予測し未然に防ぐことができていたか。	1	2	3	4	5
スキル3	俊敏性と適応力						
スキル3	俊敏性と適応力	「段取り良く運営され、時間通りに授業は進みましたか」 ・ 授業に必要な準備が事前に行っているか。	1	2	3	4	5
スキル3	俊敏性と適応力						
スキル5	コミュニケーション力	「授業中の説明や補助は分かりやすく丁寧でしたか」 ・ 運動実施中に適度な補助があったか。 ・ 運動を通して先輩たちと良い関係が築けたか。	1	2	3	4	5
スキル6	情報アクセス力と分析力						
スキル6	情報アクセス力と分析力	「ルールが公平であり、楽しめるものでしたか」 ・ ルールが正確で、種目として成立していたか。 ・ 先輩たち自身が楽しめていたか。	1	2	3	4	5
スキル7	好奇心と創造力						
総合得点			/ 30				
コメント							

高1国際 New Sports フィードバックシート



班	月	日	曜日	限
メンバー				
スポーツ名				
指導者評価(30点中)	実施した種目にオリジナリティを感じましたか		段取り良く運営され、時間通りに授業は進みましたか	
	正確な指示によりルールを理解できましたか		授業中の説明や補助は分かりやすく丁寧でしたか	
	安全に運動することができましたか		ルールが公平であり、楽しめるものでしたか	
指導者コメント				
受講者評価(30点中)	実施した種目にオリジナリティを感じましたか		段取り良く運営され、時間通りに授業は進みましたか	
	正確な指示によりルールを理解できましたか		授業中の説明や補助は分かりやすく丁寧でしたか	
	安全に運動することができましたか		ルールが公平であり、楽しめるものでしたか	
受講者コメント				

以下に示すのが、各グループに対する教員評価と受講者評価のまとめである。

8スキルズ	判定方法	Group A		Group B		Group C		Group D	
		指導者	受講者	指導者	受講者	指導者	受講者	指導者	受講者
スキル1 批判的思考	「実施した種目にオリジナリティを感じましたか」	4	4.6	4	4.4	5	4.2	5	4.8
スキル7 好奇心と創造力									
スキル4 起業家精神									
スキル6 情報アクセス力と分析力									
スキル2 コラボレーションとリーダーシップ	「正確な指示によりルールを理解できましたか」	2	4.2	4	4.9	3	4.3	5	4.6
スキル5 コミュニケーション力									
スキル2 コラボレーションとリーダーシップ	「安全に運動することができましたか」	3	4.4	2	4.7	4	4.2	5	4.6
スキル3 俊敏性と適応力									
スキル3 俊敏性と適応力	「段取り良く運営され、時間通りに授業は進みましたか」	3	4.8	3	4.8	4	4.5	5	4.8
スキル5 コミュニケーション力									
スキル6 情報アクセス力と分析力	「授業中の説明や補助は分かりやすく丁寧でしたか」	3	4.8	4	4.9	3	4.5	5	4.8
スキル7 好奇心と創造力									
スキル6 情報アクセス力と分析力	「ルールが公平であり、楽しめるものでしたか」	3	4.7	3	4.8	5	4.3	5	4.8
スキル7 好奇心と創造力									
合計		18	27.1	20	28.6	24	26.1	30	28.3

8スキルズ	判定方法	Group E		Group F		Group G		Group H	
		指導者	受講者	指導者	受講者	指導者	受講者	指導者	受講者
スキル1 批判的思考	「実施した種目にオリジナリティを感じましたか」	4	4.8	3	4.5	4	4.3	4	4.5
スキル7 好奇心と創造力									
スキル4 起業家精神									
スキル6 情報アクセス力と分析力									
スキル2 コラボレーションとリーダーシップ	「正確な指示によりルールを理解できましたか」	4	4.3	4	4.2	3	4.3	3	4.1
スキル5 コミュニケーション力									
スキル2 コラボレーションとリーダーシップ	「安全に運動することができましたか」	4	4.1	5	3.8	4	4.5	3	3.9
スキル3 俊敏性と適応力									
スキル3 俊敏性と適応力	「段取り良く運営され、時間通りに授業は進みましたか」	4	4.8	5	5.0	2	4.5	5	4.8
スキル5 コミュニケーション力									
スキル6 情報アクセス力と分析力	「授業中の説明や補助は分かりやすく丁寧でしたか」	4	4.8	4	4.8	4	4.3	5	4.6
スキル7 好奇心と創造力									
スキル6 情報アクセス力と分析力	「ルールが公平であり、楽しめるものでしたか」	4	4.6	3	5.0	5	4.4	4	4.5
スキル7 好奇心と創造力									
合計		24	26.8	24	27.2	22	26.3	24	26.5

模擬授業に取り組んだ生徒たちは、種目を創造する苦勞もさることながら、「人を喜ばせ、楽しませる」ことに対してどれだけの準備と労力が必要かを強く感じてくれていたようである。特に今単元では「いかに楽しませるか」という観点において、授業実践の際に受講者たちに懸命に話しかけ、介入し、アプローチしようとしている姿が非常に印象的であった。その点も含めて、項目別に見ていけば到達レベルの差異はあるものの、8スキルズ全ての項目(英語を除く)を含んだ今単元を履修したことにより、入学当初から比較しても個人としても集団としても成長を感じることができたのは大きな喜びであった。

7. まとめ

5年目を迎えるにあたっての課題は、より精度の高いルーブリックを完成させることにある。それはコンピテンシーと8スキルズを確実に連動させ、入学段階と留学前、そして卒業段階で科学的根拠に基づいた成長曲線を提示することで生徒自身が自己の成長を実感し、自信を持って人生を歩んでいける材料になるからである。更なる教材研究と多方面からのご助言をいただき、次年度の準備を進めていきたいと思う。

SGS(Science Global Studies)の取り組みについて

理科 百田 洋

1. 概要

SGS(Science Global Studies) は、京都学園大学バイオ環境学部との高大連携プログラムとして始まった。大学教員による講義・実験、間伐体験など経験型授業として取り組んできた。2012年度より「課題研究」を行うようになった。それに伴い、指導法を再考する必要がある、2015年度より抜本的に授業の見直しを行った。前期には「科学的思考力」「批判的思考力」を鍛える取り組みを中心とし、後期には「課題研究」を行ってきた。京都学園大学の教員にもご協力いただき、課題研究の指導している。

2018年度は、学内講義、研究計画報告会、SGS合宿、大学での集中講義、グループ研究、中間発表、SGSリサーチフェア、論文作成などの内容に取り組んだ。

2. 学内講義

学内講義においては、以下の内容で実施した。

- 課題研究とは何か。マシュマロチャレンジで学ぶ「何度も試してみること」の重要性。
- 課題研究を始めよう。「幽霊は存在するのか？」を科学する。
- 「質問づくり」を学ぶ。質問の種類と分類。
- リサーチクエストの作り方。マインドマップ、マンダラートの使い方。

これらの学内講義、グループワークを通して、生徒は「答えのわからない問」を自ら立て、それに対する答えを「科学的思考」を用いて答えを出していくことが研究であることを理解することができたと考える。講義後にはその時間の振り返りを行い、その授業で何を学んだのかを記録に残した。

学内講義に対する生徒の感想を抽出して以下に示す。

①課題研究を始めよう。「幽霊は存在するのか？」を科学する。

- 定義がはっきりしてなければ考えることが難しい。
- 仮説によって研究する内容や、やり方が変わってくる。また、一つのテーマでもたくさん仮定、証明方法がでてきるとわかった。
- 自分の考えの足りないところを人の意見を聞くことで補えること。自分と反対の意見でも聞いたら納得できる部分が多かった。

- 幽霊がいる・いないを自分の知識だけで根拠を言うには学力や知識が足りないと思いました。今日やったような意見が分かれる疑問は意見が色々出てくるので結果だけでなく、話し合うことも楽しいところだと感じました。
- 課題研究についての定義や何を測るかを定めるのが一番大事だと思った。
- 曖昧なものほど証明するのが難しいことが分かった。
- 傾聴の大切さ 他人の考えと自分の考えを比べる力を知った。
- 定義がないものを調べるのは難しいということがわかった。
- 定義を決めることで、どうやって測定するかが決められるので計画が進みやすくなる
- 『課題』『研究』今までなんとなく行ってきたけどしっかり意味を理解することが大切だと 思いました。

②「質問づくり」を学ぶ。質問の種類と分類。

- 相手の意見に反応しなかったら意見がでやすかった
- とりあえず質問を作ってみることで、細かなことまで質問をする習慣がつくと思うし、どんなことでもまず質問してみるのが大事だと思った。
- 質問づくりは小学生や幼いときの方が上手く今となってはとても難しいということが分かりました
- とりあえず傾聴することと、人の意見を聞いたうえで納得して受け入れることがわかった
- 質問の質は気にせずたくさんだすのはむずかった。 質問の○を△にするのが難しくくて3つぐらいしかできなかった。
- 質問をすることによってその文が具体的になっていった
- 質問を作ることが案外難しいことに改めて気づいた
- とりあえず意見を言うことで、さらに良い意見が出ること
- あの短い文のなかでもあんなに質問が出ると思ってなかった。
- 人によって考え方や視点が違うこと
- 誰かに意見を引き出す役割を任せるのではなく、自分から積極的に引き出す役割を担うことが大切だと感じた。
- アイデアを数重視でだすことは初めてで新鮮でした
- とりあえず質問を出してみることでそれまで気づかなかったことや発見があった。
- グループワークのときに自分の意見も大事だが、人の意見も聞いて合わせるのが難しいと感じた。
- 不完全な答えを出すことに違和感を覚えた自分に驚いた。入試が子供たちに与える影響の大きさを知った。もし、SGS のような授業をしなければどんどん頭が固くなっていただろう。一年間の間でそういった柔軟な頭を養っていきたい。そう思った。

3. 年間計画

日程			内容	備考
4月	21日	土	ガイダンス	科学的思考力トレーニング テーマの決め方 質問の仕方 文献学習 テーマ決め、予備実験
	28日	土	学内講義	
5月	12日	土		
6月	9日	土		
7月	7日	土		
	14日	土		
	21日	土	研究計画報告会	京都学園大学 太秦キャンパス
8月	1日	水	SGS 合宿	テーマ：統計学学習
	2日	木		
	3日	金		
			集中講義 事前指導	夏休み期間中に実施
	6日	月	集中講義	京都学園大学 亀岡キャンパス
	7日	火	集中講義	京都学園大学 亀岡キャンパス
	25日	土	研究	指定した日に放課後も実験室 解放
9月	1日	土		
10月	6日	土		
	20日	土		
	27日	土	中間発表会	京都学園大学 太秦キャンパス
11月	10日	土	研究	指定した日に放課後も実験室 解放
12月	8日	土		
12月	17日 ～ 20日		SGS リサーチフェア発表準備	冬期講座終了後
1月	12日	土	SGS リサーチフェア	
			以降、論文作成	1人1つの論文を作成
2月			論文提出	合格点で単位認定

4. SGS 合宿

ペットボトルロケットを題材として、研究の意義、科学的手法を学ぶ 2 泊 3 日の合宿を行った。内容は「ロケットの個人作製、発射」「各班によるテーマ研究」「ポスター発表会」「最終機による記録会」である。

- ① ロケットの個人作製、発射
同じ材料、同じ作成方法でロケットを作り、ロケットには個体差があることを確認する。
- ② 各班によるテーマ研究
「ロケットの先端の形状」「羽の形」「水の量」「内部気圧」など、各班に 1 つ研究テーマを与え、比較対象実験により、最適なものが何かを調査する。
- ③ ポスター発表会
それぞれの班の研究結果をポスターで発表する。発表は 2 回、異なるメンバーで行う。発表しないときは、他の班の発表を分担して聴きに行き、質疑応答をする。発表内容をメモし、自身の班のメンバーに内容を伝える。
- ④ 最終機による記録会
班のメンバーが持ち寄った他の班の研究成果を共有し、最も飛距離の伸びるロケットを製作する。

合宿のスケジュール

8月1日(水)

- 10:20 京都駅集合
- 10:45 京都駅発
- 11:50 マキノ駅着
- 12:00 マキノパークホテル到着、諸注意
- 12:20 昼食
- 13:00 講義 1『ペットボトルロケットについて』
- 14:00 ロケット作製
- 15:30 ロケット発射
- 16:30 測定結果のまとめ(グラフ作成)、考察
- 17:30 入浴
- 19:00 夕食
- 20:00 講義 2『実験方法について』
- 21:00 ロケット作製(改良)

8月2日（木）

- 7:30 朝食
- 8:30 ロケット作製（改良）
- 9:00 ロケット発射 30分×4セット
- 11:00 結果のまとめ（グラフ作成）、考察、次の実験計画
- 12:00 昼食
- 13:00 ロケット発射 30分×4セット
- 15:00 結果のまとめ、考察
- 16:00 講義3『ポスター発表について』
- 17:30 入浴
- 19:00 夕食
- 20:00 発表用ポスター作成
- 21:30 ポスター提出、発表練習

8月3日（金）

- 7:30 朝食
- 8:30 ポスター発表の注意点、発表内容の最終確認
- 9:00 ポスター発表
- 10:00 ロケット作製（最終機）
- 11:00 最終打ち上げ

SGS 合宿の振り返り

- やり遂げる力の大切さを学んだ。
- 研究をすることの意義や楽しさを、3日間を通して1つのことに集中することで学べた。
- みんなの知恵やアイデアを出し合ったら結果が出ること
- 話さないとだにも始まらないということを、班でロケットを作っていくなかでおもった
- さまざまな視点で見ることで自分の考えだけでなく他人の意見も取り入れることで、今後の社会に役立つと思う。
- 最初はなんでロケットを飛ばすためだけに三日も必要なのか分からなかったけど、三日を終えてみて、SGS合宿では、ロケットを飛ばすことも大事だけど、ひとつのことに対して、それぞれが専門分野を持ち、それを合わせることですごいものができるというのが学んだ点です。
- 1人だと膨大な時間がかかるが、複数人のチームで取り組むとたくさんのことを深く学ぶことができ、協力して取り組む重要性をわかった
- ペットボトルロケットの構造について、実際に作成して、飛ばすことにより理解出来た。

- 研究をすることで得た結果から 資料などと照らし合わせて考察すること
- どのようにして世界が良くなっているか 便利になるには沢山の努力と時間があること 研究の大変さ 協力のすごさ
- 飛ぶ時の空気の流れなどロケットの仕組みを先生や実際に改良したりロケットの飛び方を観察したりして学んだ
- 研究の面白さを友達との討論から学びました。
- 班のみんなで取り組むことの大切さ
- 一つの事に熱中することの大変さ、大切さを学ぶことができた。
- 班の人と協力して何かをやるのは大変だと思った。
- 失敗をしてしまっても その後のリカバリーが大事ということ
- 失敗をいっぱいした方が 成功しやすい
- 他の班をライバル視するのも大切だが、意見を共有する大切さも知った。
- 「研究」の「意義」と「楽しさ」を学んだ
- 出されたテーマに対して班で話し合うことを大切に自分の意見も出すということ
- 人と協力することの大切さです。1人では絶対できないけど、たくさんの人と協力することで達成できることの大切さを 学ぶことができたと思います。
- ペットボトルロケットの仕組みを知ることができた。(水が空気に押し出されて飛ぶ)
- SGS 合宿を通して課題研究というものは物事を様々な視点から論理的に考えて研究するものだと学びました。
- ペットボトルロケットの実験のテーマでそれぞれが調べたことを共有し、ペットボトルロケットの飛距離が向上したので、共有することで学べるということがたくさんあるということ。
- 研究に対する心構えについてです。研究は、幾度の失敗を重ねた上で最終的な答えを見つけていく難しさ、面白さを学びました。
- 一人では思いつかなかった事などが他の人と協力することで、いろんなアイデアがでてそれをまとめて、答えを出すことの楽しさや大切さ。
- 研究することの苦手意識が薄れ、楽しさを学べた。研究が楽しめたのは、班全員できちんと協力できたからだと思う。

5. SGS リサーチフェア

グループ研究では、6人でグループを組み、生徒たちでテーマを決め研究を行った。研究方法についても自分達で決め、そこから得られてデータをもとに、結果を整理し、考察を行った。ここでは、新しい知見を得ることを条件とした。

発表は京都学園大学バイオ環境学部の鈴木玲治先生、井口博之先生に審査員を務めていただき、各班へのご講評をいただいた。発表の機会は、研究計画発表会、中間発表会、SGS リサーチフェアの3回である。

積極的にインターネットや本を用いて調べたり、実験では失敗しながら、何度も繰り返し調査したり、研究者としての基本的な能力は養われたように思われる。

以下、研究テーマの一覧である。

1. 外部刺激が種子の生育に与える影響について
運動以外の外的要因が種子に与える影響について調べた。
2. メントスコーラの原理
メントスをコーラに入れることによって泡が一気に数mの高さまで噴き上がる現象の原理の解明を試みた。
3. 色の違いを利用した物の大きさの見え方の変化
背景色の違いが見た目の大きさにどのような影響を与えるのか調べた。
4. なぜ人は写真を撮り、それを見るのか
スマホが普及した現在、写真に対しての撮る手軽さや目的が親世代と比べてどのように変わってきたのかを調べた。
5. 豆苗の発育と音の高さの関係
音の高さを変え、植物の育ち方に変化があるのかについて調べた。
6. 紙飛行機 ～滞空時間でギネス記録を超えろ～
ギネス記録を出した紙飛行機を超えるものをつくり、その条件を考察した。
7. 色素を分解する微生物の存在の有無について
色素を分解するという微生物を発見し、その特徴を調べた。

8. 服の色の組み合わせについてのバリアフリー
色盲の人達に色を認識してもらうために、服の色の組み合わせ方のデータベースの開発を行った。
9. ガウス加速器について
加速度の大きいガウス加速器の開発を試みた。
10. ダイラタンシーの衝撃緩和性
ダイラタンシーの性質について調査した。
11. ホットケーキの膨らみ方～マヨネーズによる変化～
マヨネーズの添加によるホットケーキの膨らみ方の違いを調べた。
12. 溶けにくいアイスの作り方
溶けにくいアイスを作り、溶けにくくなる原理を考察した。
13. 食品廃棄物で代替品
果物皮の吸水性、耐熱性、保温性を調査した。
14. 発根と音の関係
ツルナシインゲンに一定の周波数の音を一定期間聞かせ、その発根を観察した。
15. 光は根の成長に関係があるのか
光の方向と根の成長方向の関係性を調べた。
16. 誤飲しても安全な消しゴムの開発研究
多孔質である食べ物を使用した消しゴムの開発を試みた。

半年間の研究を終えた感想

- この研究を通して、プロジェクトにおける様々な要素を分析したり、必要だと考えた情報を集めたり、論理的に考えたりすることを学んだ。また、結果を導く過程がいかんにして成り立っているかも知ることができたと思う。
- ホントに最初は土曜日潰れるし嫌だったけど 合宿があったり、大学を使って研究発表をしたり 勉強になることがいっぱいあって自分自身も楽しいと思えました。来年は1年生に教えたりもしたいです。

- 一人ではなくチームのみんなでやると色々な目線で物事を見ることができる。
- 自分がやらないといけないな、と思ったら 誰かが言うのを待たずに自分から言っていた方がいいと思った。
- 実験をして、結果が出て、また試行錯誤する作業が面白いと分かった。分析力が上がったと思う。
- 意識の高さの違う人同士を1つにまとめるのはとても難しいと思った。実験をするときは何回も考察→実験を繰り返すことが大切だと思った。
- 個人の取り組みだと、自分の意見を示すだけになりますが、グループで取り組むことによって自分の意見だけではなく、他の人の意見を取り入れることもでき、またまとめる力もつけることができたように思います。
- 中学の時に、個人研究はしていました。しかし、今回はグループ研究でした。班をどのように動かせば良いか、常に考えてきました。もちろん、自分のせいで班員に迷惑をかけたこともありました。しかしそれも、リーダーとしての役割を精一杯果たした証拠だと思っています。これからも、常に人々に影響を与える存在でありたいと思いました。また、自分の科学的思考を、身につけられたと思っています。
- 実験方法を1から考えたり、結果の表し方を見やすいようにするのに工夫したりするのが難しかったけど、それを乗り越えたから、その力がついたと思う。

6. 総括

1年間のプログラムを通して、生徒はグループ研究を経験し、自ら問をたて、その答えを科学的に探究していく姿勢を身に付けることができた。また、グループで一つのプロジェクトに取り組むことの難しさや、面白さを実感することができた。高校1年生の知識では研究として不十分な点はあるが、研究の醍醐味を多少なりとも経験できるプログラムになったと考えている。これらのプログラムを通じて、教師も「答えのない問」に対して、生徒と同じ目線で探究することの魅力を改めて実感することができた。

概要

アジア、アフリカ地域の国際開発モデルとビジネスモデルの開発は京都学園高校の SGH における中心的課題である。フィリピンフィールドトリップは 2015 年度に第一回を実施し、本年度は四度目となる。ベトナムフィールドトリップは本年度が三度目の実施となった。

ベトナムフィールドトリップの計画に当たっては、昨年逝去された本校 SGH 事業特別顧問の西本昌二先生にユニセフ ベトナム支部やアジア開発銀行を紹介していただき、同じく特別顧問の宮口貴彰先生にはフエ農林大学を紹介していただき、それは本校のフィールドトリップの根幹となっている。

昨年度のベトナムフィールドトリップからの改善点を述べると、まず昨年度はハノイ市においてアジア開発銀行訪問とハノイで営業する料亭「京清水」を訪問して、アジア経済や、本校の SGH のテーマである「食」に関係し、海外での和食ビジネスについて学習した。今年度は料亭に変えて、ベトナム法人のエースコック社 ハノイ工場を訪問し、日本のインスタントラーメンを如何にベトナムで普及させたかについて学習をすることにした。

フエ市においての変更点は学校交流である。今年度は新たに Quoc Hoc 高校との交流会を実施した。またベトナム戦争について学習するため新たに激戦地の洞窟 DMZ を訪問した。

フエ市における主たる目的は、これまでと同様にフエ農林大学における農業についてのフィールドワーク及び、成果発表のプレゼンテーションである。

1. 参加生徒

参加生徒は本校国際コース 2 年生在籍者の 10 名である。

参加生徒の選考については 1 年時の 2 月より「KOA Global Studies 1」において堀場製作所の指導を受けて始めた「堀場プロジェクト」の評価を元にした。このプロジェクトでは、「ベトナムにおけるビジネスモデルの開発」をテーマにグループでリサーチをしたものである。

2. ベトナムフィールドトリップの行程

5 月 6 日 (日)

6:00 京都駅集合

10:31 関西国際空港より VN331 便にてハノイへ

13:10 ハノイ着

Rosaliza Hotel に宿泊、近辺を観光後、休養をとった。

5 月 7 日 (月)

午前 エースコック社を訪問

午後 アジア開発銀行を訪問

Rosaliza Hotel 泊

5月8日（火）

13:55 ハノイ空港より VN 1547 便にてフエへ

15:10 フエ着

Railway hotel に宿泊

5月9日（水）

午前 ドンバマーケットという昔ながらの市を訪れ、農作物の販売形態などを観察。ティエンムー寺を訪問。

午後 フエ農林大学を訪問。担当者との会議の後、Quoc Hoc 高校と学校交流会。夜は大学主催の歓迎会。

Railway hotel 泊

5月10日（木）

終日 DMZ を訪問。ベトナム戦争について学習、農村地域を視察。

Railway hotel 泊

5月11日（金）

午前 ラグーン地域への農業研修。ボートでラグーンを訪れ講義を受けた。

午後 フエ農林大学に戻り今回のフィールドトリップについてのプレゼンテーション準備、及びフエ農林大学教員、大学生の前での英語プレゼンテーション。夜はお別れ会。

Railway hotel 泊。

5月12日（土）

午前 フエ農林大学生との交流 チェックアウト

午後 フエ空港へ

18:05 VN1375 便でホーチミンへ

5月13日（日）

0:25 VN320 便にて関西国際空港へ

7:20 関西国際空港帰着。

3. エースコック社

前述のようにエースコック社ハノイ工場を訪問するのは初めてである。到着するとステージのあるホールに通していただき、エースコック広報による英語によるプレゼンを聞いた。まず日清の安藤百福から始まるインスタントラーメンの歴史をたどり、その後エースコック社が試行錯誤の後にベトナムにおけるインスタントラーメンのトップシェアに至

るまでのレクチャーであった。このプレゼンで学んだことは、日本のフードビジネスが外国に進出するにあたって、現地の嗜好、現地で調達した材料にこだわることによって、シェアを伸ばしていったことである。また、ベトナム法人のエスコックは「社員の幸福」を社訓にしており、年



に一回会社が費用負担して社員旅行を実施し、社員の誕生日には社長からプレゼントが届き、残業ゼロを徹底していることにも驚いた。これはベトナムに進出したどの海外資本の企業も実施していないことだ。事実、プレゼンをしていた40代の女性は愛社精神が強く、絶対辞めたくないと述べていた。先進国の海外への工場進出というと搾取しているイメージもないではないが、エスコック社はその反対を実行することにより、結果としてはベトナム人に愛される企業となり、トップシェアを達成していることを生徒たちは学んだ。

その後、生徒たちは工場見学をした。衛生管理は徹底されており、偶数日と奇数日でユニフォームの色を変えること、見学者もヘルメット被り、靴カバーをしてエアシャワーを浴びて工場に入ることが要求された。またかなりオートメーション化されており、予想以上に先進的な工場であることがわかった。

工場見学後はインスタントラーメン、及びフォーの試食会があり、一人2杯ずつのカップ麺をいただいた。一つは売れ筋のラーメン、もう一つはフォーであった。生徒たちは日本の味付けとは全く違い、ベトナムの材料のみを使った本格的な味を知った。また製品によっては売り上げの一部が孤児などの育英金に充てられていることも知った。

4. アジア開発銀行

ハノイのアジア開発銀行は Deputy Country Director の齋藤法雄氏よりレクチャーを受けた。生徒たちは予めアジア開発銀行について日本で学習し、アジア開発銀行の会議室を訪れた。齋藤氏にはアジア開発銀行の概要、ハノイで果たしてきた役割、現状について説明していただいた。過去においては例えば、ハノイ国際空港、ハノイにかかる400mの橋、幹線道路などが日本のODAや日本のゼネコンにより実施されており、日本のプレゼンスが高かったが、現在は大韓民国によるインフラ整備が主流であり、サムソンの工場建設などによる雇用なども含めて、韓

国の経済援助が主流であることを学んだ。生徒は齋藤氏に対し、現状の背景などについて活発に質問し、積極的に多くを吸収した。

「どうすればアジア開発銀行で働けるのか？」と質問する生徒もあり、国際機関に足を踏み入れ、そこで働く日本人に直接会うことによって、「将来は齋藤さんのようになりたい。」という強い憧れと刺激を受けていた。



5. フェ農林大学でのフィールドワーク

フェ農林大学は国立でフェ大学の傘下であり、2017年度には創立50周年を迎えた。さまざまな企業とも共同で研究を行い、最近日本の企業と共にラグーンにおける水の浄化などの環境問題にも取り組んでいる。京都市とフェ市は姉妹都市であり、京都大学との関係が深く、フェ農林大学



の多くの教授や学生達は京都大学で学んでいる。今回京都学園生を世話してくれた学生達の一人が2019年2月に京都大学にて短期研修をしており、2月23日(土)の京都学園高校SGHの授業「KOA Global Studies 1」にも講師として訪れてくれた。

フィールドワークではフェの農業を学ぶために田畑やラグーンを訪れた。ベトナムは日本と同じく主食が米であるため、いたるところで稲作が行われている。フェのあるベトナム中部は二期作、南部のメコンデルタでは三期作である。稲作は機械化されておらず、農家には牛がおり、牛が田畑を耕している様子がみられた。

ラグーンではエビや貝やカニの養殖が行われており、生徒たちは実際に農家が所有する木製のボートに乗り込み、水上でフェ農林大学のミン

教授の講義を受けた。
また実際に仕掛けにか
かったカニやエビを収
穫した。ラグーン的面
積は広大で生徒たちは
圧倒されていた。

またマングローブの
森を訪れた。ミン教授
とともに森に分け入
り、マングローブが果
たす役割について学ん
だ。マングローブがラ
グーンにあることによ



って、魚介類の産卵場所を提供することになり、生産性が上がり、水質の浄化にもつながる。また台風などの災害による被害を最小限にする役割さえ果たしている。そういうわけで、大学が主導してマングローブを植林しており、現在その面積は増加傾向にあることを学んだ。このようにフエ農林大学は地元の農業の生産性を高める研究を進めており、現実に生産性や環境問題において素晴らしい成果を上げていることを学んだ。

フエ農林大学での最終日には、京都学園の生徒と大学生徒が共同でグループを作り、基本的に前述した「掘場プロジェクト」テーマをベースに今回のフィールドトリップで学んだことを加え、プレゼンテーションを英語で実施した。

プレゼンテーションはフエ農林大学の会議室で実施され、アン・ルバン学長、指導していただいたミン教授を始め 10名の大学教授陣、滞在中本校生徒を指導し、プレゼンテーションにも協力していただいた大学生 30名の出席の元実施された。



以下に本校生徒が発表したプレゼンテーションのテーマを記す。

1. ベトナムの食糧について
2. ベトナムにおける和食弁当の販売
3. レモングラスを日本で販売するビジネスモデル

生徒たちはプレゼンの後、教授や学生から様々な質問を受けたが、それらにも解答することができた。アン・ルバン学長から最後に講評をいただいたが、プレゼンテーションの内容及び、生徒のパフォーマンスに最大限の賛辞をいただいた。

6. Quoc Hoc 高校との交流

Quoc Hoc 高校はフエ市にあり、何より建国者ホーチミンが卒業した高校として別格の扱いを受けている。ベトナムにおけるホーチミンの威光は絶大で、9種類ある紙幣はすべてホーチミンの顔が印刷されているし、あらゆるところにホーチミンの胸像がある。



ベトナムには名門高校御三家がハノイ、フエ、ホーチミンにあり、Quoc Hoc 高校はその一つである。この3つの高校には才能のある生徒のみが入学可能である。

学校のホールに私たちが到着するとすでに相手校の生徒が100人程度着席しており、まず生徒によるQuoc Hoc 高校についてのプレゼンテーションを拝聴した。それによると数学や理科などの国際オリンピック決勝で毎年メダルを取っていることなどが発表され、天才児のための学校であることが強調されていた。ちなみにこのプレゼンは日本語で行われた。

その後、Quoc Hoc 生によるキロロやアンジェラアキの曲の合唱があった。その後京都学園生による挨拶のあと、京都学園高校を紹介するプレゼンテーションを実施した。歓迎会の最後には「ソーラン節ダンス」をステージで披露し場を盛り上げた。

歓迎会の後はQuoc Hocの生徒と学園生でグループを作り、学校ツアーを行い、すべてクラシックなフランス風の校舎や学生寮やプールやグラウンドを見せていただいた。同世代の生徒たちはすぐに打ち解け、短時間の内に大変仲良くなり、予想以上に深い交流となった。京都学園の生徒達に聞いてもみんな、もっとあの学校にいたかったと感想を述べていた。

7. DMZ 訪問 ベトナム戦争を学ぶ

DMZ (DeMilitarized Zone) とはベトナム戦争時の南北境界の非武装地帯のことだが、意味に矛盾して激戦地である。今も多くの戦争の遺跡が保存されており、今回のフィールドトリップでは大学学長の勧めもあり、ベトナム戦争についても学ばせていただいた。



多数の戦死者が出た Quang Tri 王宮では京都学園を代表して生徒が献花し、国境にかかる橋 Hien Luong Bridge を見学、Truong Son Martyrs 墓地ではどこまでも広がる兵士の墓地を歩いた。特に Vin Moc Tunnel は印象に残るものであった。これは戦時中に村全体が地下に移住したもので、現在でも地下3階の地下村が完全に保存されている。地下には住居、医院、会議室、井戸、トイレなどがあり、どんどん深く潜っていく感覚に生徒達は恐怖を覚えていた。地表には B52 による爆撃でできたクレーターが多数残っており、ベトナム戦争の恐怖を実体験することができた。

また戦地を巡る道筋は農村にあり、それぞれの地域での農業を見学することもできた。

8. 終わりに

三回目を終えたベトナムフィールドトリップであるが、回を重ねるごとに改良を加え、さらに学びの多い研修となった。

言うまでもないが、ベトナムは社会主義の国である。環境が人を作るとしたら、日本と違う環境で育った人々がそこにいる。それは純粋な人々だ。毎年同じ感想を持つ



が、大学の先生方、大学生、高校生、みなさんがピュアな心で私たちを迎えてくれる。本校の生徒たちはそれに答えようとして、純粋にがんば

ろうとする。ベトナムの食や農業を通じて学ぶものの先にその美しさが常にある。京都学園の生徒たちは大切なものを学んでいると思います。

フィリピン フィールドトリップ報告

国際部副部長 喜多雄哉

1 研修の概要について

(1) スケジュール 平成 30 年 7 月 30 日(月)～8 月 5 日(日)

Days	Date	Place	Time	Schedule
1	July 30 th (Monday)	京都駅 関西空港 マニラ空港	5:45 6:21 9:55 14:20	中央改札口前集合 JR はるかにて関西空港へ(7:41 着) PR407 にてマニラへ向け出発(13:30 着) 専用車にてホテルへ。 チェックイン後、現地オリエンテーション (15:30～ / 制服) 夕食は POVEDA で歓迎夕食会
2	July 31 st (Tuesday)	マニラ	8:25 午後	アジア開発銀行(ADB)訪問(~13:00 / 制服) マニラ旧市街研修(20:00 ホテル着予定) 昼食：ADB 食堂 夕食：フィリピン料理
3	August 1 st (Wednesday)	マニラ	午前 午後	Visit to Lualhati ng Maynila 老人ホーム訪問 女子孤児院訪問 昼食：孤児院 夕食：モールでフリー
4	August 2 nd (Thursday)	マニラ	午前 昼 午後	学校交流(制服) Grade12(高3)授業体験 調理室にて日本食の準備(13:00~15:00) Exchange Program(15:30~17:30) ・ 学園生 / POVEDA 生によるプレゼン ・ Cultural Presentation 昼食：学校食堂 夕食：フィリピン料理
5	August 3 rd (Friday)	マニラ	終日	Talaban with Grade12 昼食：学校食堂 夕食：モールでフリー
6	August 4 th (Saturday)	マニラ	終日	スモーキーマウンテン地区研修 タガイタイ観光(タール湖・タール火山など) (20:30 ホテル着予定) 昼食：フリー 夕食：スペイン料理
7	August 5 th (Sunday)	マニラ マニラ空港 関西空港 京都駅	10:00 14:25 19:15 20:46	ホテル出発(11:30 着予定) PR408 にて関西空港へ向け出発 到着(入国手続きへ) JR はるかにて京都駅へ(22:03 着予定) 到着後解散

(2)参加生徒数 20 名(国際コース 2 年生)

(3)引率教員 喜多雄哉(国際コース 2 年 1 組担任) / 中西文恵(国際コース 2 年 2 組担任)

2 研修までの流れ

(1) コアグローバルスタディーズ

1年次より、総合的な学習の時間(コアグローバルスタディーズ)において、トニーワグナー氏が提唱する7つのサバイバルスキルに加え、CFER C1程度以上の英語運用能力を身につけさせている【KOA Global Skills】。その中で、1年次の夏休み以降SDGs(Sustainable Developing Goals)に焦点を当て、グループでのリサーチに加え、解決可能な提案を長期課題として、最終的に1月に実施されるSGH課題研究発表会でのポスター発表まで、継続して調査・研究を重ねた。1月末より堀場製作所 総務部部長である堀井愛士氏を講師に招き、「HORIBA チャレンジ」というプロジェクト名でビジネスについての調査・研究を行なった。そこでは、フィリピンにてビジネスを起業することを目的に、マクロ環境分析(PEST分析)を行い、実現可能なビジネスを提案するというものである。生徒たちはグループを作り、ビジネスモデルキャンバスを元にプレゼンテーションを行なった。ループブックを元に、担任やコアグローバルスタディーズ教科担当者だけでなく、堀井氏にも評価を行なっていただき、その中から選抜した生徒20名が今回フィリピンへのフィールドトリップに参加した。

また、2年次の5月には、フィリピンの提携校である Saint Pedro POVEDA College の Ms. Clarissa Gutierrez に来校していただき、提携校の歴史や研修内容などのレクチャーをコース全体にしていただいた。



(2)参加者への事前指導

全6回実施。

Date	
6月22日(金)	<ul style="list-style-type: none"> フィリピン MDGs Country Report 課題の提示 POVEDA での発表内容検討(プレゼン / ダンス / 合唱 / 食文化紹介)
7月5日(木)	<ul style="list-style-type: none"> フィリピン MDGs Country Report 課題の発表 フィリピンのホームレス事情研究 POVEDA での発表内容進捗状況報告①
7月7日(土)	<ul style="list-style-type: none"> フィリピンのホームレス事情研究レポート提出 Talaban 研究導入 POVEDA での発表内容進捗状況報告②

7月12日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・ Talaban 研究 ・ POVEDA での発表内容進捗状況報告③
7月18日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・ Talaban 研究 ・ POVEDA での発表内容進捗状況報告④
7月26日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各発表最終確認

* 各種研究や課題については Google Classroom を使用
また、研修中も毎日の振り返りとして Google Classroom を活用

3 研修内容

(1) St. Pedro POVEDA College

St. Pedro POVEDA College(以下 POVEDA と略す)は、いわゆる K-12(幼稚園から日本でいう高校3年生まで)の女子校であり、ローマ・カトリック系のミッションスクールである。年間授業料は、フィリピンの平均的なサラリーマンの年収半年分に相当する金額で、そのような授業料を負担できる家庭の子女が通う学校で、生徒の大半が専属の運転する自家用車で通学している。

フィリピンは全国民の83%がローマ・カトリック、その他のキリスト教が10%(平成30年3月30日付外務省ホームページフィリピン共和国基礎データ)というキリスト教国で、POVEDAの生徒もほぼ100%がローマ・カトリック信者である。毎日の日課も、毎時の授業も教員と生徒の真摯なお祈りで始まる。

2日目・6日目・最終日を除き、POVEDAの生徒(Grade7【中学1年】~12【高校3年】)が本校生徒のバディとして行動を共にした。

4日目には、Grade12の授業にグループに分かれて参加したが、授業内の言語は英語で、同じ英語を第2言語として運用している我々よりも運用するという点において秀でていた。そのことは、3年次のコアグローバルスタディーズにおける、GSG(Global Simulation Gaming)実施時(毎年1月実施)にも模擬国連部のメンバーが来校して参加した際も痛感した。また、いわゆる5教科にとどまらず、Entrepreneurship や Business Math など実用的な授業もあり、見学させていただいて興味深かった。

同日午後には食文化紹介にて、本校生徒も調理室をお借りし、一汁一菜を現地生徒に披露した。材料は米以外全て現地で調達したが、何不自由なく揃えることができた。本校のSGHテーマが「食」であることから、事前に日本とフィリピンでの材料となる食品の値段の違いなどをリサーチさせ、また現地生徒の見ているところで実際に調理させ、調理や下準備の仕方の違いなど、生徒同士がディスカッションしている様子が窺えた。その後、本校生徒はHORIBAチャレンジでのプレゼンテーション、POVEDAの生徒からはTalaban(後述)に関する報告があり、それぞれ意見交換が行えた。生徒のフィードバックを見てみると、リサーチ力の程度には現地の方々も賞賛されていたが、実際にHORIBAチャレンジでの提案が実現可能かという点と難しいことを痛感したなど、「現実」を知る機会となったようである。

最後に日本の歌を合唱し、よさこいを踊り学校交流は無事に終了した。



(2) アジア開発銀行(ADB)訪問

今回の訪問は大きく分けて3つのカテゴリーに分けられる。

① ADB Overview, Mission, and Operation

元国土交通省勤務で現 Principal Portfolio Management Specialist(PPFD)である Ono Yuji 様に ADB の働き、また起源や世界銀行との違いについてお話しいただき、ADB=お金を貸す機関だけではない役割、事業の貸付に対する優先順位などをお話しされ、生徒のフィードバックにおいても、今まで草の根的な活動での国際協力を将来の仕事として考えていたものの、プロジェクトや方針を考える中枢で働くことへの興味をもつきっかけとなったようである。

② Agriculture and National Resources

Natural Resources and Agriculture Specialist(SDCC-AR)である Abul Basher 氏による 食の安全保障や農業の現状、これからの農業とそれが及ぼす影響などを講義してくださり、その内容はまさに1年次のコアグローバルスタディーズで研究した内容であり、また先述の3年次の GSG にもつながるものであった。本校生徒にもっと英語力と度胸があればより白熱した議論ができたと思う。

③ ADB Facilities Briefing and Tour

雨季を利用した灌漑設備や、屋上には太陽光パネルが多数設置されており、環境にも配慮した取り組みがなされており、銀行としての役割だけでなく一面が見られた。



(3) Lualhati ng Maynila 訪問

Marikina エリアにあるこの施設は、老人ホームのみならず、男子・女子孤児院などが1つの集落に集まっている。今回は午前中に老人ホーム、そして午後からは女子孤児院を訪問させていただいた。

POVEDA の生徒は、中学2年生になると、ここの女子孤児院を訪問する。収容されている子供達は孤児ばかりではなく、親から捨てられたり、虐待を受けたりした子供達で、生徒たちは彼らとの交流を通じて、子供には虐待や放置から保護され、教育を受け、安らぎと楽しみを享受する権利があることを学んだ。

また、中学3年生になると、貧しき者、弱きものを助けよというキリスト教の教えを深く理解し実践する場として、身寄りのない、あるいは家族から捨てられたために路上生活を余儀なくされた老人たちの収容施設であるこちらを訪問する。

今回の訪問の際、しきりに引率教員から聞かれた言葉は「Aware “気づき”」であった。前述のように、POVEDA の生徒は比較的裕福な家庭で育っている環境のため、このような境遇は想像し難い。そこで、その施設に行く際も冷房設備のないバスに乗り、暑さや臭いなど、「空気」を感じる経験を通じて“気づき”をしていく。

本校生徒も、事前指導等でこれらの施設については予備知識をつけていった“つもり”ではあったが、実際に交流してみると驚くほど明るい表情で接してくれ、一緒にダンスや歌を歌うなど明るい一面が垣間見られた。一方、生徒のフィードバックを見てみると、我々との交流の間は明るい表情でも、一歩その場をはなれると死んだ目をするような女の子や、一緒に昼食をとったが、後で食べるからと手をつけない(すでに食べているのにまたもらおうとする)など、想像していたよりも過酷な現場も目の当たりにした。そういう意味では本校生徒たちも、「気づき」は大いにあったと思う。



(4) Talaban 研修

社会奉仕活動である Talaban は、Barranguy Highway Hills というコミュニティ(いわゆるスラム街)を POVEDA の生徒と訪問した。POVEDA の参加生徒は高校 3 年生が対象で、毎月コミュニティを訪問し、そのコミュニティの抱える問題を発見し、その住民や管轄する区役所と協働してその問題を解決する政策を提案し続けている点では、施設訪問とは目的が違う。我々も前日の学校交流の際に、問題解決の政策に関するプレゼンを POVEDA の生徒から聞かせていただいたが、我々の「HORIBA チャレンジ」のプレゼンとは現実性(実現可能度合い)において大変優れている点に感銘を受けた。それは毎月訪問していることから、より現実味のある提案ができていく証拠である。

当日は朝から激しい雨が降り、交通も混乱して一時は実施が危ぶまれる事態となったが、警察の協力もあり、無事に実施することができた。実際、この研修は当該コミュニティ

を管轄する教区教会のボランティア、区役所、そして警察の協力があった実施である。Talab とはタガログ語で「強い衝撃」という意味で、POVEDA の生徒でさえも「生涯で一度の経験」や「死ぬまで忘れることがない経験」という表現を使うほど、この Talaban 研修がいかにより一人ひとりに大きな“衝撃”を与え、人間としての成長を促しているかわかる。

実際、本校生徒たちも前日に行った勉強会ではコミュニティの印象について、“危険” “汚い” “暗い” など否定的な意見がほとんどだったが、研修後のフィードバックでは、「生きる力を感じた」「優しさというものについて考えさせられた」「人と人をつなぐ人になりたい」など、決して悲観的な印象だけでなく、そこに生きる人々の強さについても子供達は考えさせられたのだと思われる。



(5) スモーキーマウンテン研修

前日にもコミュニティを訪問しているので、ひどい現状を見る耐性はあったつもりであったが、実際に車窓に広がる風景はよりひどいものであった。本校生徒たちもスモーキーマウンテンまでの道中は元気だったが、近づくにつれて広がる光景を写真に取りながら絶句し、何よりも川の上で少年が手作りのボートで、浮かんでいるゴミの中から金目のものを漁っているのを見た時、一同が深いため息をついていたことを覚えている。振り返りの際に、「本当に屈託のない笑顔で我々に手を振るスカベンジャー(ゴミを漁る人たち)をバスから見ると、色々な感情が入り混じった。泣けば彼らを見下しているように受け止められるかもしれないから、私も笑顔でいた。」という生徒の言葉は、その生活が当たり前(もしくは慣れきってしまっている)の人々にとっては、哀れられるものではなく、我々が彼らよりも恵まれているからこのような感情になるということを再認識させられる言葉であった。



(6) 各国料理

本校のSGHのテーマは「食」であり、この研修中も実に様々な食を体験した。フィリピン料理に始まり、スペイン・アメリカ(ファーストフード含)、そして和食など、多種多様な食文化も同時に学び、料理ごとの味付けや色合いなども触れることができた。また道端で果物の叩き売りも新鮮で、その場で食するもの日本ではなかなか経験できるものではなかった。現在留学中のイギリスやカナダでの食文化との比較など、帰国後にまとめるのも面白い。



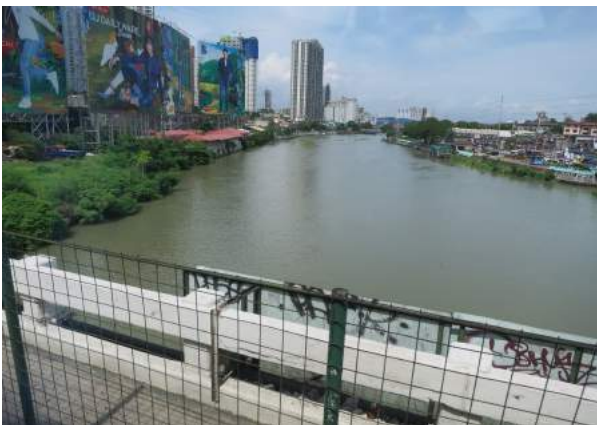
4 研修後の変容

“Welcome to the country of Smile!” これは我々が空港に到着し、バスに乗った際のガイドの第一声だった。一方で、スモークーマウンテンを車窓から見学した際には “It’s the other side of Philippine. We can’t escape from it and must keep it.” と話していた。この両極端のイメージがフィリピンの象徴であることは、我々も研修を通じて感じたことである。空港からホテルに向かう際、川をはさんで大都市で今時の服に身を包み談笑している一方で、路上で生活している人々、そしてスモークーマウンテンと大カジノ街の建設が目と鼻の先にある光景は、まさに異様であった。

コアグローバルスタディーズでの「HORIBA チャレンジ」や事前研修などで、フィリピンについての十分なリサーチや研究を進めてきたつもりではあったが、現実とのギャップは大きく、まさに子供達も我々も Talab であった。ただ、POVEDA のバディやそれぞれの研修先で出会う人々の笑顔に触れ、フィリピンの様々な顔をみたことは、今までどこか「別の世界」(3人称)として捉えてきた国々を少し自分の感覚(1人称)で捉えることができたのではないか。また、1年次より有志による Table for Two やルワンダへの教育支援などのボランティア活動を進めてきているが、どこか「かわいそうだから」という自分の生活は保障されている立場から支援を訴えるという気持ちも、よりリアルに体験した「貧困」またはそこに暮らす人々の決して心の貧しさは失われていないことも伝えられるのではないか。

そしてこの経験は2年次の9月から始まったイギリス・カナダでの留学にも影響を与え、留学先でも現地のホームレスの実態調査を実施し、NPO 団体にボランティアする生徒もいる。

また、この経験は来年度コアグローバルスタディーズ内の GSG においても批判的な思考や問題解決にも充分役に立つと考えられる。またその際には、POVEDA の教員・生徒を招聘するので、継続的な協働プロジェクトが可能となる。





INTERNATIONAL VISITORS PROGRAM

Asian Development Bank International Visitors Program

ADB Headquarters, Manila

Address: 6 ADB Avenue, Mandaluyong City 1550, Metro Manila, Philippines

ADB- International Visitors Program (IVP): Study Visit of Kyoto Gakuen Senior High School

31 July 2018 | 9:00 am – 12:00 pm

Venue: 71018NW Meeting Room

9:00AM - 9:10AM	Group Registration at the ADB Visitors Reception Center, ADB Avenue
9:10AM – 9:15AM	Opening Remarks and ADB Corporate Video By: Julie Ann V. Salles, Events Management, Office of the Administrative Services, ADB
9:15AM – 9:50AM	ADB Overview, Mission, and Operations By: Mr. Yuji Ono, Principal Portfolio Management Specialist, Procurement, Portfolio and Financial Management Department (PPFD)
9:50AM – 10:15AM	Group Photo at the Courtyard / Coffee Break
10:15AM – 11:00AM	Agriculture and Natural Resources By: Mr. Abul Basher, Natural Resources and Agriculture Specialist, SDCC-AR
11:00AM – 12:00PM	ADB Facilities Briefing and Tour By: Mr. Erwin Casclang, Facilities Planning and Management Specialist
12:00PM – 1:00PM	Luncheon Venue: PDR 2-3a

フィンランドフィールドトリップ 報告書

国際部 中西文恵

- 1 実施期間 2019年2月17日(日)～22日(金)
- 2 目的 学校交流と食文化交流
- 3 参加生徒 12名(女子10名 男子2名) 引率教員 2名
- 4 交流校 Sedu (Rastaantaival 2, 60200 Seinajoki, Finland)
- 5 行程

2/17	午後	<ul style="list-style-type: none"> ・各カレッジより Leonardo Hotel London Heathrow Airport に集合 ・日本文化交流のための研修会
2/18	午前 午後	<ul style="list-style-type: none"> ・AY1340 Helsinki に向けて出発 (12:25 着) ・入国手続き後、鉄道で Seinajoki へ (14:21 発 Tikkurila 経由 17:17 着) ・夕食 (Seinajoki) ・Huoneistohotelli Simpsionkullas へ車で移動 Ylakalliontaival 12 (Mastontie), Lapua 62100, Finland (Lapua)
2/19	午前 午後	<ul style="list-style-type: none"> ・Sedu の新キャンパス訪問 (Kurikka) 校舎見学およびアートとグラフィックデザインの実習 ・昼食 「JAPANILAINEN RAVINTOLA」 ・ the Aalto culture center および Library 訪問(Seinajoki) ・夕食 Finnish “Kota”
2/20	午前 午後	<ul style="list-style-type: none"> ・ Sedu キャンパスで調理実習(Lapua) ・昼食 Sedu キャンパス内の食堂 ・ Lapua 高校 訪問(Lapua) ・ Lapua Culture Center(Vanha paukku) ・夕食 Sedu の学生との交流 日本文化紹介
2/21	午前 午後	<ul style="list-style-type: none"> ・ Ahtari Zoo 訪問 ・ 昼食 トナカイ牧場 ・トナカイ牧場にてソリに乗る (Ahtari) ・大型ショッピングモール見学 the largest village shop in Finland 夕食やお土産を購入
2/22	午前 午後	<ul style="list-style-type: none"> ・鉄道でヘルシンキへ移動 (Tikkurila 経由 13:33 着) ・ AY1337 ロンドンに向けて出発 (17:10 着) ・入国手続き後、解散 (タクシーにてホームステイ先へ帰宅)

6 学校交流
① Sedu 新
キャンパス訪
問
Kurikka
に今年度新設

されたキャンパスの見学をした。Sedu はもともと医療と芸術が中心のカレッジである。新校舎でも最新の看護・医療施設が設置されていたり、空港でのセキュリティーを学ぶ講座や栄養学、芸術、建築学などいずれも実践的な学びができる施設が揃っていた。

また、いたるところに学生同士がディスカッションできるような広いスペース何箇所もあった。これらのスペースにはソファやテーブル、椅子があり、ディスカッションの用途に合わせて使用できるようになっている。加



えて、共有スペースにあり

ながら個人作業できるような周りの雑音を遮断するような椅子があったり、体幹を鍛える椅子や道具があったりと面白いものも多かった。また、卓球台やビリヤード台、ミニバスケットのゴールなどが設置されていた。

本校の生徒たちは新校舎見学を経て、フィンランドの実践型教育に感銘を受けた様子であった。これは、生徒たちのフィンランドに対するイメージの中で教育力が高いというものがあり、それを裏付ける結果となった。また、「もの」が設置されている場所や空間の使い方など日本ではみられない光景が数多くあったことも教育水準の高さを感じさせる一要因となったようだ。学生たちがディスカッションをする場所は常にゆったりと



したスペースが取られており、リラックスした状態での話し合いができる場所が多く設けられていた。

左 学生たちがディスカッションをしていた

右 最新の看護設備



左右 建築の実習(プレイルームの作製)

右 共有スペース(色々な形の机や椅子、ソファーなど)

中 共有スペースに設置された、個人用の椅子(周りの音などを遮断できる構造)

左 アートの実習室の床に描かれたトリックアート、角度によってサメが浮かび上がる

② アートとグラフィックデザインの実習

アートの実習では、石膏作りを経験した。まず、鋳型に石膏を流し込むための石膏を水で研ぐところから始めた。溶かす石膏、水の量は目分量で行った。石膏を溶かした時の感覚でちょうど良い硬さを決める。こういったものは、その時の気温や湿度によって微妙に変化するので実際、溶かしてかき混ぜた時の感覚を重視しているようであった。こちらも担当の先生に確認してもらいながら、生徒たちはおそるおそる石膏を溶かしていた。次に溶かした石膏は鋳型へと流し込む。流し込んだ石膏が泡立つのでこれをナイフやパテのようなものを利用し潰していく。これも先生が実践したのを見よう見まねで行った。石膏が固まるのには少なくとも1時間以上かかるので、以前に作成された石膏の完成物を頂いた。頂いた完成品は、すでにブロンズ色に塗られており、ブロンズが錆びた感じを出すような工夫もされていた。かなり実践的な経験をさせてもらえた。

続いて、グラフィックデザインの研究室にお邪魔した。ここでは、研究室の学生と交流しながらの実習であった。ここでは自分で描いた絵や写真を加工して缶バッジを作成した。缶バッジの作成などは基本的に日本でもできるものであるが、学生と直接触れ合うことができたのは大きな成果であった。特に「日本のアニメ」について本校生徒と Sedu の学生の中でやり取りがあった。それまでは何かとお互い必要以上は喋らなかつた生徒と学生が「日本のアニメ」を中心に大いに盛り上がっていた。このことは生徒の中でも大きな成果だったようだ。自分たちの国の文化を認めてもらったことで、生徒は自分自身に少し自信がついたところがあったようだ。

左 石膏を流し込む様子(アート実習)

中央 出来上がった石膏(アート実習)

右 缶バッジ作製(グラフィックデザイン)



③ Sedu キャンパスでの調理実習

Lapua にある Sedu のキャンパスで調理実習を行った。ここではカレリアパイとムーミンクッキーを作った。実習が始まる前に簡単なフィンランド語講座を受けた。フィンランド

語は一つのアルファベットに対して一つの読みしかない。例えば「a」は常に「あ」と発音する。この構造は日本語の構造とよく似ている。そのため、Sedu の先生方が私たちの名前を呼ぶときは本当にびっくりするぐらい発音が日本語そのままであった。

調理自習では、ムーミンクッキーとカレリアパイを作った。

カレリアパイはフィンランドの伝統料理でミルク粥をライ麦の皮で包んでオーブンで焼いたものである。スーパーマーケットにも様々に味付けされたカレリアパイが並んでいた。私たちが実際作ったのはライ麦と小麦と水、塩少々を混ぜた生地を薄く引き伸ばし、すでにできているミルク粥をその上にのせ、独特の形に仕上げていくことだった。ここで本校生徒たちは、前回のグラフィックデザインの学生たちとあまり会話できなかったことから、今回は積極的に学生と話し(もちろん共通言語の英語であるが)、みるみるうちにいくつものカレリアパイを作り上げていた。作ったものは最終オーブンで焼き、仕上げとなる。ここで Sedu の学生が言っていた言葉が印象的だった。「実は、私たちもカレリアパイを作ったのは昨日が初めてなの。」どの国も伝統料理とはそんなものなのかもしれない。

左 まずはフィンランド語の簡単な講義



右 実習のための衛生管理

左 真剣にムーミンクッキーの型の取り方を聞いている。



中央 カレリアパイ作製

右 オーブンに入る前の大量のカレリアパイ

④ Lapua 高校 訪問

Sedu のキャンパスのすぐ近くにある Lapua 高校を訪問した。今まではあくまでカレッジとの交流であった。他の国の高校教育を見たのは初めてだった。ここでは、英語の先生が校舎内を案内してくださった。高校教育の現場は、日本と同じ形式であった。本校生徒たちは、フィンランドといえば、高い教育水準を誇る国だという意識があり、その国がまさか日本と同じ教育形式をとっているとは考えていなかったようであり、衝撃を受けた生徒たちも少なくなかったようだ。また、教室の形状も日本と類似していたが、圧倒的に違ったのは机の数であった。一教室やく 20 台ほどであった。また、数学の授業を少し見学させてもらったとき、日本と同じ座

学形式でありながら、単純に知識を享受するだけでなく、生徒たちが能動的に取り組んでいる姿勢を感じたことだった。こういったものは、もともとあるものではなく、獲得する形質である。そこに日本との大きな差を感じる生徒もいた。また、共有スペースには Sedu のキャンパスと同じように生徒が自由にディスカッションできる大きなスペースと、ゆったりとしたソファが置いてあった。ちょうどそこには、高校 2 年生の生徒が何人か座っており、話を聞くことができた。いわく、とても貴重なスペースだが、3 年生が来れば場所を空けるのだそう。こういった文化も日本と似ていて面白かったようである。

現地の高校を訪問することにより、知識をよりよく享受するためには能動的に学ぶことが大切なことを改めて感じさせられた。

これは今後の課題として、できれば同い年の生徒たちと一緒にフィンランドの高校の授業を受けたり、文化交流、もちろん「食」を含めてであるが、を行っていきたい。そうすることにより、よりフィンランドの教育、文化に直接触れることができ、今の自分たちや日本の学びのあり方や食文化などを振り返ることもできると考える。

左 Lapua 高校で自己紹介 なぜか Sedu の学生も自己紹介をした



右 Lapua 高校の共有スペース この時は高校 2 年の生徒たちがいた かなりリラックスした様子

⑤ Sedu の学生と日本文化交流

- ・お箸の使い方
- ・折り紙
- ・習字

上記 3 点をグループごとに分けて行った。時間は約 20 分程度であった。Sedu の学生たちはほとんど日本文化に触れたことがなかったらしく、どのブースでも大賑わいだった。今回は 3 つのグループとも実戦形式を取り入れていた。このフィンランドフィールドトリップで習得したことだ。正確に物事を伝えるためには、間違いのない情報と実践が大切である。一緒になって行うことだ。さらにできたことに対して、素直に褒めることも大切だと言っている生徒もいた。そうすれば、調子に乗って、どんどんと難易度の高いことにも挑戦しやすくなったようだ。最終的には、折り紙を教えている生徒の中には 2 人の学生と 1 人の教員を相手に「つる」の折り方を教えていた。最後に羽を開き、一気に「つる」らしくなった時に、歓声が起きていた。

左 習字 ひらがなの書き方を教えている



右 お箸の使い方と豆の握り方を教えている



左 折り紙の折り方を一気に3人に教えている。

右 みんなで折った「つる」など

7 食文化

本校生徒たちがフィンランドに持つ「食」のイメージは魚が新鮮で、サーモンの消費量がかなり多いというものが多かった。

①「JAPANILAINEN RAVINTOLA」ビュフェスタイルの日本食レストラン

ここでは寿司がビュフェスタイルで提供されていた。その他の惣菜はほとんどが中華料理であった。寿司のネタはエビ、サーモン、炙りサーモン、タコ、イカ、玉子、いなり寿司であった。フィンランドでは新鮮な魚が獲れるといったリサーチ通り、生魚を食べる日本の食文化も比較的受け入れやすいところもあるのかもしれない。また、巻き寿司はきゅうりとパプリカと一緒に巻いたカップに近いもの、サーモン巻き、サーモンとエビ巻きなどがあったが、いずれも海苔は内側に巻かれ、外面にはゴマ、青海苔などがまぶされたものとなっていた。全ての寿司でわさび抜きであったが、別途わさびが用意され、寿司の時に使用する醤油も用意されていた。生徒たちの感想からも、非常に美味しかった、といったものが多かった。その反面、寿司の多くに初めからタレなどがかかっているものもあり、濃い目の味付けになっているものもいくつかあった。これに関しては、タレなどがかかってない方がより、日本の寿司らしくなるという意見と、食文化もグローバル化の時代なので多様化すると考えれば、ありだという意見もあった。実際のところすでに巻き寿司は全て海苔が内側に巻かれていたことから、海外における日本食の多様性を感じた生徒も多かった。

また、内装は木造を中心としており、かくテーブルの仕切りなども木造の衝立のようなものだった。木の椅子の上にはマリメッコのクッションが置いてあるなど、日本とフィンランドの文化をうまく融合させていた。落ち着いた雰囲気、海外の日本食レストランに来ているというよりも、日本のレストランに来ている感覚になった。



左 日本食レストランの外観

中央 ビュッフェ形式の寿司

右 色々な寿司ネタ
炙りサーモンにはすでに甘辛いタレとマヨネーズがかかっていた

② フィンランド料理

カレリアパイ(ピーラッカ)など伝統料理はもちろん、いくつかフィンランド料理をいただいた。サーモンのスープはクリーム系のスープ(ロヒケット)とそうでないスープの両方を別々の機会で食べる事ができた。いずれもサーモンが非常に美味しく、生徒たちのスプーンもよく動いていた。また、Seduの食堂ではトナカイの肉を食べることができた。トナカイは私たちにとっては、身近な存在ではないため参加者全員が初めて食べた。味は日本の鹿肉に近いものだったが、鹿肉よりもあっさりしたものであった。

特に生徒たちの中でも印象的だったのが、「Kota」と呼ばれるフィンランド式の木造の小屋の中で焚き火を囲んで食べたマッシュルームのスープと野菜のスープ、その焚き火で焼いたソーセージやマシュマロ、いくつかのベリーで作ったスムージーであった。ここではフィンランドの野趣あふれる食文化に触れ、多くの生徒たちが感銘を受けた様子であった。

フィンランドの食事には比較的多くサーモンが使われることから、日本の「食」に近いと感じる生徒も多く、フィンランドの食材を利用して日本食を紹介できればといった意見もあった。また、日本食との違いにやはり「出汁」を挙げている生徒もいた。出汁を取ることで「うまみ」を引き出すことができ、フィンランドにおける日本食の多様性にも幅が広がると考えたようだ。

今後は、フィンランドの食材を利用して日本食を振る舞うことができると、より良い文化交流になると思われる。



左 焚き火で専用の串に刺したソーセージとマシュマロを焼く

右 野菜のスープとマッシュルームのスープ



左 女子はマシュマロを焼く

右 男子はソーセージを焼く

8 フィンランド 施設見学

① the Aalto culture center および Library 訪問

Seinajokiのカルチャーセンターを訪れ、カルチャーセンターはもちろん、この付近一帯の建造物が一人の建築家によって設計され、一連の統一した構造になっていることを知った。

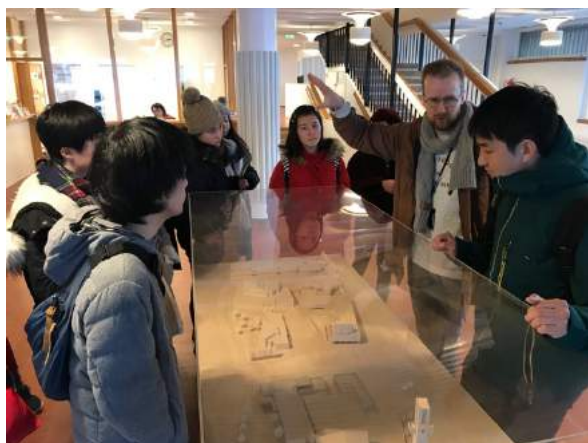
特に図書館は面白かった。館内は広く、場所によって様々な構造をしており、用途によってユニークな設

計がされていた。平日の昼間であるにも関わらず、老若男女を問わず多くの人たちが訪れていた。その中でも子供達が学べるスペースは特に充実していたように感じた。大きな壁を様々な形にくり抜き、そこに絨毯のようなラグのようなものを一体に敷き詰める。この空間で子供達は、自由な格好で本を読んだり、モバイル機器を利用したりしていた。また、階段には緑色のソファが設置されており、ここでも自由に本を読んだりすることができる。この階段を上ると絵本がたくさん置かれた幼児用のスペースになる。このスペースには四角の木の枠で囲まれたスペースがいくつもあり、それぞれにお花畑をイメージしたものや、川の中などをイメージしたもの、土の中をイメージしたものなどがいくつも設置されており、自分が読みたい本のイメージに合った場所に座り読書することで、本の世界に入り込むことができる仕掛けになっていた。また、奥にはゆったりとしたラグが敷かれたスペースもあり、ここでは赤ちゃんとお母さんが絵本を読んでいた。子供達はこの図書館で大騒ぎをしない限り、どんな姿勢で本を読もうが友達とおしゃべりしようが構わないようだ。

日本の図書館との大きな違いは、「ここに来たい」と思わせる空間作りにあると言える。これはフィンランドと日本の大きな違いではないだろうか。地下のスペースでは小学生たちが壁穴ソファでくつろぎながら読書やおしゃべりに夢中である、その2階のスペースでは大学生や大人たちが静かに本を読んだり、レポートをしたりしている、1階に上がる階段には緑のソファが敷かれ、ここでも読書をしたり、休憩をする人たちもいる、1階奥には小さな子供たちが空想に夢を膨らませ、お母さんと一緒に絵本を読むスペースもある、表に近い場所には赤色のモダンで簡易なロッキンチェアがいくつも並べられ、高校生たちが和やかに談笑している。この Seinajoki の図書館では日常の中に存在する学びを自由に誰でもが享受できる空間になっていた。

こういった空間を体験することにより、本校生徒たちはフィンランドの教育水準が高いと言われる所以に思い当たったようであった。また、木造建築といった観点から、日本との共通性を見出し、自分たちが落ち着く理由を見出した生徒もいた。

the Aalto culture center の一階に設置されていた周辺一帯の統一された建造物の模型





左 地下の上が2階となることで地下の空間をより広く取ることができる、1階へ上がる階段へ置かれた緑のソファ

中央 地下から1階へ上がる階段と並べられた緑のソファ 1階フロアは吹き抜けとなり開放感がある。

右 地下の壁に開けられた壁穴ソファ 好きな体勢でリラックスすることができる



絵本がたくさん置いてあるスペースの四角い区切り、子供達はこの中で色々なことを想像しながら本の世界に没頭する。

左 川の中 魚が全てマス系だったため淡水である

中央 冬の夜 空からは雪が降ってくる

右 雲の上 さらにその上を飛ぶ鳥たち

② Ahtari Zoo

Ahtari Zoo では今年1月に来たばかりのパンダを見ることができた。フィンランドの人にとっては初めてのパンダであり、パンダ舎はとても広く2頭のパンダが室内と屋外を行ったり来たりしていた。また、すでに子パンダのための保育施設まで整っていたことに驚いた。動物園は日本の動物園とは大きく違い、1種の動物に対しかなり広いスペースをとっていた。日本の動物園よりもサファリパークに近い感じであった。そのため、郊外に設置されていた。自然の森林をうまく利用し、動物の習性に合わせた工夫がなされており、ここでも空間の使い方に感心した。ヘラジカやユキヒョウ、オオカミなど様々な動物がいたが、冬クマは冬眠していた。ヘラジカはおとなしく、柵の近くまで接近してきて、触ることもできた。つこの形を見ることでしかの種類を見分

けることもできる。



上段

左 来たばかりのパンダ

中央 オオカミ

右 ユキヒョウ

下段

左 間近に迫ったヘラジカ

右 シカたちのツノの形状と分布

③ トナカイ牧場

このトナカイ牧場ではトナカイの引くソリに乗ることができた。生徒たちがある意味一番楽しみにしていた企画でもあった。

牧場に到着したとき、サンタさんがトナカイを引いて私たちの訪問を歓迎してくれた。トナカイが引くソリは木製でありシート部分にはクマの毛皮が引かれていた。私たちが日本にいる限りすることのできない貴重な経験であった。生徒たちもやや興奮気味にソリに乗った。生徒たちも満足した様子だった。

最後には全員がトナカイライドの証明書をもらった。



左 中央 トナカイのソリに乗る

右 トナカイライドの証明書

④ 大型ショッピングモール見学 the largest village shop in Finland

フィンランドで一番大きなショッピングモールを見学した。多くの生徒が日本の大型ショッピングモールや大型ホームセンターと類似しているといった感想を持ったようだ。実際、食料も豊富で過不足なくものが揃う。やはり、鮮魚や魚を加工した商品が非常に多かったことがフィンランドらしさを醸し出していた。飴のコーナーではミントやキシリトールを使ったものが多いように感じた。生徒たちもイギリスのホストファミリーへのお土産選びに余念がない様子であった。

フィンランドフィールドトリップを通して、フィンランドの食文化や教育、人となり、空間利用など多くを学んだ。特に、教育水準の高さと空間利用が大きく関係していることを示唆する生徒も多かった。

また、「食」に関しては、魚食など日本と共通するところも多く、今後交流校と「食」を通じた交流も可能である。

KSS（光楠スピリッツ・スタディーズ）における今後の展望

外国語科 教諭 佃 裕介

【はじめに】

本レポートでは KSS（光楠スピリッツ・スタディーズ）におけるアメリカ研修旅行、事前指導の内容や現地での生徒の気づき、そして帰国後、事後指導としての SGH 研究発表会でのプレゼンテーションに至るまでの過程・指導の様子について論じる。

【アメリカ研修旅行概要】

京都学園高校においてアメリカ研修旅行は伝統ある研修旅行であり、建学の精神「世界のどの舞台に立っても堂々と自分の意志で行動できる人材の育成」を実現するために、どのコースに在籍していても生徒全員が海外を経験するという理念の下、本校が現在の校名に変更された平成 2 年以來、ずっと続けられており、近年では日米野球交流など年々進化している。

また今年度からは、アメリカ現地での研修の学習効果をより高めるために、現地フィールドワークを含む、事前指導から事後指導までの KSS（光楠スピリッツ・スタディーズ）が開始された。KSS とは明治時代にわずか 15 歳の若さでアメリカに渡り、当時の日本人の世界における立ち位置を目の当たりにした、本校の設立者である辻本 光楠先生の名前に由来している。辻本先生は当時のカリフォルニアの葡萄畑で働き、夜は夜間学校で英語を学んだ。渡米前、日本人は欧米人と対等にわたりあっていると聞き、その姿を楽しみにしていた辻本先生であったが、実際目の当たりにした日本人の大人たちの姿はそうではなかった。その姿を見て海外でも通用する人材を育成するために辻本先生は京都学園高校の前身である京都商業学校を創立した。その辻本先生の足跡をたどり、京都学園の建学の精神並びにルーツを辿る学問が KSS なのである。

アメリカ研修旅行の期間は 1 週間で、今年度は特進 BASIC コースと進学コースの総勢約 330 名がカリフォルニア州モデストでホームステイを経験した。ホームステイ期間中には、モデスト周辺の現地の高校との学校交流やカリフォルニア州の大規模農業の視察、ホストファミリーと過ごす休日等、4 日間という短い期間ではあったが、それを感じさせない濃密な時間を生徒たちは過ごした。

そしてホストファミリーとの出会いから 4 日後、別れの日がやってくると生徒たちは涙し、ホストファミリーとハグを交わし、言葉や文化の壁をも超越した人の繋がり、温かさを実感した。感動の別れの後、一行はサンフランシスコ観光へ。現地ホテルで一泊し、帰国という非常に充実した研修旅行であった。

【研修旅行に出発するまでの指導】

研修旅行の成功の鍵を握っているのは、間違いなく事前指導の充実さである。出発まで 1

年以上の期間、綿密な準備を重ねてきた。本年度は本校教員で長年アメリカ研修旅行に尽力されてきた雑賀 巖教諭監修によるアメリカ研修旅行しおりの改訂や社会科 齋藤 忠和教諭、栗岩 秀教諭監修の下、アメリカ研修旅行テキストが発行され、事前指導での視覚教材や資料が大変充実した。また佐々井 宏平理事長による地理の講義や社会科 堂 統教諭の沢村英二投手に関する講義、齋藤 忠和教諭のアメリカ大規模農業に関する講義もあり、生徒たちは多方面への背景知識を持つことができ、現地では様々な角度から物事を考えられるようになった。

また講義形式で行う事前指導だけでなく、学校交流の準備やアルバムや名刺、扇子の作成、オンラインでの英会話レッスン等、入念な準備を重ねた。夏休みが明けてからは SHR の時間を使って、しおりを毎日読み進めていった。しおりには旅行の行程や注意事項はもちろん、文化的な内容や現地でのアドバイス、英会話の内容等、現地で役立つ知識ばかりであった。

【現地での気づき】

事前指導をしっかりと行ったことで、生徒たちは一定の背景知識を獲得した状態で現地へ赴くことができた。そしてその背景知識があったが故に気づくことができたこと、感じることもできたことが多々あった。その中から SGH のプレゼンテーションを行った生徒たちの気づきを紹介する。

現地でのフィールドワークとして、プランテーションを訪れていたときのことである。ここでは広大な敷地にアーモンドや葡萄を中心に様々な作物が栽培されていた。その中をバスに乗って移動していた。現地ガイドの方が地平線の向こうにそびえる山々を指さして、「あれが海岸山脈です。」と話してくださった。その際、一人の生徒が「じゃあシェラ・ネバダ山脈はどこ!？」と驚きの声を上げた。なぜなら生徒たちは事前指導でサンフランシスコに展開されている大規模農場は海岸山脈とシェラ・ネバダ山脈の間にあると聞いていたため、海岸山脈が見えれば同時にシェラ・ネバダ山脈も見えると考えていたのである。しかしそこはアメリカ。遙か先まで地平線が続き、シェラ・ネバダ山脈は目視することができなかったのである。そこで生徒たちはアメリカの大規模農場の規模を改めて知ることとなったのである。

また事前指導の中で、年間降水量の少ないカリフォルニアでプランテーションを営むにあたり生命線になっているのが、灌漑用水路であるということも既習であったため、生徒たちは道路の脇を流れる小さな水路を見て、「これがカリフォルニアの大規模農場を支えるライフラインなのか。」と口々に話していた。加えて、その水路はシェラ・ネバダ山脈の雪解け水を引いている。地平線の遙か彼方から引いてきている雪解け水を見て、生徒たちはその壮大さに驚きを隠しきれなかった。

実際に現地へ赴き、得た気づきはこれだけではない。トラクターミュージアムを訪れた時のことである。そこは数々の貴重な年代物のアメリカントラクターが展示されていて、時代

の変遷とそれに関わるトラクターの変遷がわかる場所となっていた。展示されているトラクターを見て、一人の生徒があることに気づいた。クボタやヤンマー等、日本を代表するトラクターが一台もなく、展示されていたのはどれもジョン・ディア製のトラクターだったのだ。この気づきが帰国後のプレゼンテーションに大きな影響を与えることとなるのである。

【帰国後からプレゼンテーションのテーマ決定に至るまで】

帰国後は、SGH 研究発表会でのプレゼンテーションのために特進 BASIC コース各 4 クラスから 1 名ずつ選出し、計 4 名のグループを結成した。グループの統括・指導を務めた私が彼らに求めたことは以下の 2 点であった。

① オールイングリッシュで行うこと

SGH 校として、オールイングリッシュでプレゼンテーションを行うことは必須であると生徒たちに伝えた。またプレゼンテーションで用いるスライドにはできるだけ文字を詰め込まず、写真を入れながらシンプルで見やすく、あくまでプレゼンターの話す内容を補足するツールであり、メインではないということを強調した。同時にメインはプレゼンターの話りであるという観点から、プレゼンターが話す際に用いる表現は、聞いている側にとってわかりやすく、より自然であるべきであり、そのためによりシンプルで、より口語的な表現に努めることを指導した。

② プレゼンテーションの終盤に必ず自分たちからの「考察」と「提言」を盛り込むこと

今回のプレゼンテーションはアメリカ研修旅行の帰国報告という位置づけであったが、帰国報告が単なる旅行記になることは避けたかった。そのため前半部分は、研修旅行の行程や思い出を発表すること。そして後半部分は自分たちの調べ学習の内容。そしてクライマックスにはそれを踏まえての考察・提言で締めることが望ましいであろうと一定のモデルを生徒たちに示した。

特にアメリカで経験したことや感じたことを基に、帰国後に学びを深め、考察、そして提言を行うという流れを確立したかったので、まずはブレインストーミングでアメリカ研修旅行での経験や気づきを整理することから始めた。最初はぎこちなかったが、徐々に慣れはじめ、様々な意見が出た。その中でも代表的な意見であったのが、現地での生徒の気づきにあった「プランテーションでの灌漑用水路について」と「トラクターミュージアムでジョン・ディア製のトラクターばかりで日本製のトラクターがなかったこと」であった。そして同じく特進 BASIC コース担任である社会科 斎藤 忠和教諭にお力添えを賜り、これらの気づきをアメリカの大規模農業と絡めながら進めていけないかということで可能性を模索していった。

【テーマ決定からプレゼンテーションの完成に至るまで】

斎藤教諭の指導と導きにより、ブレインストーミングで出た意見を取捨選択し、プレゼン

テーションの流れは前半が研修旅行の振り返り、そして後半は農業とトラクターを絡めて「ジョン・ディアのような大型トラクターは日本に不向きか」という考察と「日本のトラクターは、アメリカでの市場を拡大できるか」という考察に繋げることとなった。またこれまで社会科の授業で学んだ内容を生かしながら、「貿易摩擦を避けながら、互いの農業にプラスとなる製品を作り、日米二国の農業がともによくなることが大切だ」という提言を行うという一定の流れが決定したのである。

プレゼンテーションの流れが決まった後は中身を詰める作業に徹した。生徒たちは齋藤教諭の指導の下、参考文献を読んだり、インターネットのホームページを閲覧したりしながら内容をまとめた。そして原稿作りに着手したのである。原稿はまず日本語で作成させ、その後、英語に翻訳させた。英文のチェックは私が行い、わかりやすい単語や表現を使用し、プレゼンターにとっては話しやすい英文に、そして聴衆にとっては聞き取りやすい英文になることを意識させた。そして英文が完成するとプレゼンテーションの持ち時間を考慮しながら、適切な量で且つわかりやすいシンプルなスライドを作成した。そして、ようやくプレゼンテーションが完成したのである。

【プレゼンテーション指導から SGH 研究発表会に至るまで】

大舞台でのプレゼンテーションの経験がほとんどなかった生徒たちであったので、まず内容をしっかりと頭に入れさせ、原稿を「読む」のではなく、自分の言葉として「話す」ことの指導から始めた。原稿の内容を自分の言葉として話せるようになると、次に目線や立ち方、身振り手振り等のノン・バーバルコミュニケーションに関する部分も指導した。はじめは緊張から身振り手振りの動きもなく、単に突っ立って原稿を「読む」だけという感じであったが、練習を重ねるごとに改善され、生徒たちも自信を持って発表できるようになった。

そして本番当日。まだまだ拙い発表であったが、それでも練習の成果をしっかりと生かし、オールイングリッシュで堂々と発表し切ったのである。

【おわりに】

今回の SGH 研究発表会に特進 BASIC コースからプレゼンターとして、アメリカ研修旅行帰国報告をする機会を賜り、研修旅行における事前指導から事後指導に至る、KSS の一つの学習モデルを示すことができたのではないかと考えている。特に今回プレゼンターを務めた 4 名の生徒は、大舞台でオールイングリッシュのプレゼンテーションをやり切ったという大きな自信と達成感を得たことと思う。私は、これを 1 つのモデルとして、時数の確保等の問題はあがあるが、今後のアメリカ研修旅行の事後指導に、現地でのフィールドワークを通して行った考察と提言をプレゼンテーションで発表するという流れが作ることができれば、KSS が更に発展し、京都学園オリジナルのアクティブラーニングになると確信してい

Global College Network Conference 2018 報告書

国際部 部長 橋本 千佳

期間：October 31st - November 2nd

開催場所：XaBec in Valencia, Spain

今年度の開催校である XaBec（スペイン・バレンシア）は、小規模ながら、時流に合った先進的な技術者を育成する職業訓練校である。15歳～18歳の若い世代に加え、すでに就職している大人がさらに技術を学び・磨くために、さらには社会復帰を目指す人々が技術を習得するために通っている。様々な企業・工場と連携したプログラムが構築されているため、インターンシップが盛んであり、ほぼ全員が卒業前に就職先が決まる。2018年には、The Bertelsmann Foundation and Cercle D' Economia より、スペインで最高の教育機関に贈られる賞を受けている。

参加者：

1. 主催校 XaBec（スペイン）：Antonio Mir 他スタッフ4名、生徒3名
2. Panzini Istituto Di Istruzione Superiore（イタリア）：Maria Caroli, Susana Angeletti、生徒2名
3. Roc West-Brabant（オランダ）：Andre van Veen, Frank Kerstens、生徒2名
4. Chichester College（イギリス）：Mark Bloodworth、生徒4名
5. SEDU（フィンランド）：Yuha Rippi、生徒2名
6. Central Taiwan University of Science and Technology（台湾）
Yi-Ching Huang
7. ECC 外語学院（日本）：Akihiko Nagato, Bryan Dyk, Hirokazu Kaname、生徒2名
8. 長崎短期大学（日本）：Luc Roberge、生徒2名
9. 長崎国際大学（日本）：Brendan Van Deusen、生徒3名
10. 京都学園高等学校（日本）：Kohei Sasai, Chika Hashimoto、生徒6名

I. Professional Development Forum（教員総会）

Tuesday, October 30th Official Reception & Gala Dinner offered by
President of Professional Development Forum

DAY 1: Wednesday, October 31st

- 9:00 Registration
- 9:10 Opening Ceremony
- 9:15 Introduction of the Participants
- 9:30 Conference Orientation

前回の GCN 総会のおさらいと今年のスケジュールと目標の確認。

今回の会議の目標は、大きく分けて以下の3点にある。

1. GCNの意義・目標を明確化し、ウェブサイト、パンフレット等を充実させることで、さらなる加盟校を募る。
2. Multi-Destination Projectの来年度実施に向け運営体制を整える。
3. 各加盟校がGCNに対して提供できることの明確化を図る。プログラム内容、奨学金、教員交流など。

10:15 Multi-destination Project (Mechanism for Implementation)

これまでは、年に1回、各学校の選抜生徒数名のみが総会に参加していたが、来年度よりMulti-destination Projectを設けることにより、より多くの生徒が自分で行き先を決定し、目的に合わせた研修が可能になる。

実施期間：2019年10月26日～11月2日

参加表明〆切：2019年7月1日

- 2019年度研修先候補校：1. Panzini (イタリア)
2. Roc West (オランダ)
3. Sedu (フィンランド)
4. XaBec (スペイン)

- ※ 1 week program と 2 week program を設置
1週目は今までの総会のように Language & Culture Related Programを実施する。2週目も残る生徒は、専門的な Vocational Techniquesを学んだり、提携企業でインターンシップを行う。
- ※ 少なくとも1名の教員引率が必須

12:30 School tour, cultural activity: Preparing Valencian Paella

学校校舎案内の後、参加生徒たちが現地教員の指導の下、調理したパレンシアの郷土料理パエリアを昼食にいただく。

14:30 Partner's Presentations

新しい共有情報がある学校による報告発表。

1. Sedu(フィンランド) 新校舎建設、プログラム内容について
2. Chichester (イギリス) チチェスターグループ新規加盟校 Worthing College について
3. 京都学園 (日本) 学校方針、新しい海外交流校について
4. Central Taiwan University of Science and Technology (台湾) 学校紹介

16:00 End of the first day

17:30 Visit Tour to the City Centre

19:30 Halloween Dinner with GCN Student Ambassadors

DAY 2: Thursday, November 1st

9:00 Annual General Meeting (1)

各加盟校がGCNの取り組み・活動に対して貢献できること(生徒・教員研修、生徒・教員交換留学、奨学金制度、広報など)を明確化する。合意されたものに関しては、後日ウェブサイトにて公表する。本校は、短期生徒・教員研修、短期教員交換留学、長期生徒留学の受け入れを表明(生徒

の授業料は全額免除とする)。

11:30 Visit to the City of Science and Arts

16:30 End of the second day

21:00 Dinner meetin

DAY 3 : Friday, November 2nd

9:00 Annual General Meeting (2)

1. Three year conference plan

総会開催予定国の決定

2019: イギリス Chichester and possibly co-hosted with East Sussex College

2020: 日本 長崎短期大学、長崎国際大学主催 (pre-and post conference support from ECC and 京都学園)

2021: オランダ Roc West-Brabant 主催

2025: 日本 大阪万博に合わせて関西で開催

※ 生徒は各学校 4 人まで参加可能

2. Teacher Exchange

January 2019: confirm each institutions ability to send/host

Spring 2019: match teachers

Fall-Winter 2019: begin exchange

教員交換研修も来年度より開始する。期間や研修内容、宿泊先 (ホームステイ可) においては、研修先の教育機関と相談の上決定する。

3. Video - recording

今回の総会の様子や参加者のメッセージビデオ撮り。プロモーションビデオとして、ウェブサイトにも掲載予定。

11:30 Annual General Meeting (3)

Awareness raising

今後、さらに広範囲に活動を知らせ、加盟教育機関の拡大を図るため、GCN の目的を再度明確にし、取り組みや総会の様子、今後生徒・教員間で行われる研修や奨学金制度等をウェブサイトに掲載する。その準備における役割分担。

12:30 Ambassadors International Show

それぞれの学校の生徒たちが、出し物を披露する。伝統文化 (ダンスや歌)、個人的に特技や芸術作品などを披露してもよい。本校の生徒は、NPO 法人 Table For Two International の「おにぎりアクション 2018」を参加者全員と共に開催した。

14:30 Ambassadors Presentations

各国の代表生徒はチームに分かれ (多国籍チーム)、3 日間を通し Poverty, Peace, Environment の 3 つの視点からワークショップを受講し、今回の生徒総会の主題「International Responsibility」について討議してきた。その成果を GCN 教員代表に発表し評価を受ける。

15:30 Closing Ceremony

16:00 End of the third day

II. Ambassadors Conference 2018(生徒総会)実施内容

1. AMBASSAFORS PRESENTATIONS

各参加者たちが、事前に準備した出身高校とその地域の紹介プレゼンテーションを行う。

2. PROJECT WORK

各国の代表生徒はチームに分かれ（多国籍チーム）、3日間を通し Poverty, Peace, Environment の3つの視点からワークショップを受講する。そして今回の生徒総会の主題である「International Responsibility」について、国家や政府、国民等様々な立場が抱える課題を調査し、そしてその解決へ向けグループごとに討議する。最終日に、その成果を GCN 教員代表に発表し、評価を受ける。

3. CINEFORUM: The Circle

「The Circle」という、ネット監視社会の恐怖感や息苦しさを描いた映画を鑑賞後、その映画に対する感想や意見を共有するためのディスカッションを行う。参加者それぞれの環境や価値観の違いによって、映画の受け取り方が異なることも学びの1つである。

4. DEBATE: Bitcoin Yes or No

世界の通貨システムを変革してきた仮想通貨のひとつである「ビットコイン」について、事前学習を通して得た知識をもとに、国ごとにチームを組み、ディベートを行う。

5. GYMKHANA

各国の参加者たちがチームに分かれ（多国籍チーム）、ゲームなどの様々なアクティビティーを通して、開催校である Xabec とその周辺地域について知るためのプログラム。チーム対抗戦で商品も用意され、参加者同士の親交がさらに深まる企画であった。

6. COOKING LEARNING: PAELLA

開催地であるスペイン・バレンシアの食文化を学ぶプログラム。参加生徒たちが現地教員の指導の下、郷土料理パエリアの歴史や様々なレシピを学び、実際に作り、試食する。

7. INTERNATIONAL SHOW

参加者たちが、それぞれの国の特色を生かした出し物を披露する。伝統文化（ダンスや歌）、個人的に特技や芸術作品などを披露してもよい。本校の生徒は、NPO 法人 Table For Two International のイベントである発展途上国の学校へ給食を届ける「おにぎりアクション 2018」に参加者全員と共に開催した。

III. まとめ

Global College Network (GCN) とは、イギリスのチチェスターカレッジを幹事校として発足した加盟校間の国際交流ネットワークである。本校は発足以来のメンバーで、2012年には主催校として総会を開催している。現在8か国、13の教育機関が加盟しており、加盟校内であれば、どの国の学校でも自由に留学ができ、それぞれの学生の受け入れや派遣を活発に行っている。さらには、受け入れ先・派遣先の学校同士で短期～1年間の相互授業料免除や単位互換制度を取り入れているので、在学中海外留学を目指す学生にとって大きな励みとなっている。

今年度の年次総会での議題は、以下の3点であった。

- ① GCNの意義・目標の明確化、活動の拡大を図り、ウェブサイト、パンフレット等を充実させることで、さらなる加盟校を募る。
- ② 新規企画である Multi-Destination Project の来年度実施に向け運営体制を整える。
- ③ 各加盟校が GCN に対して提供・支援（奨学金や教員研修など）できることの明確化を図る。

昨年度より、教員の年次総会と並行して、各加盟校の代表生徒によるアンバサダー会議を開催している。この会議は、世界が抱える諸問題について、多様な価値観を認め合いながら共に考え、発信することで、国際理解・知識の拡大、国境を越えた人的ネットワークの形成を可能にしている。今年度は、6カ国26名の生徒代表が、3日間にわたるプログラムに参加した。本校からは、事前に課した課題論文、並びに志望理由書による選考を通過した高校第2学年国際コースの6名が参加権を得た。

京都学園国際コースの生徒たちは、1年次のSGH課題研究授業 KOA Global Studies I において、国連が定める持続可能な開発目標 (SDGs) や課題図書「人間の安全保障」(アマルティア・セン) 等を通して、国際開発協力についての理解・知識を深めてきた。よって、今回の会議のテーマである Poverty, Peace, Environment の3つの視点から見る「International Responsibility」については、彼らにとって馴染み深いものであったため、チームでの議論をリードする生徒もいた。しかし、振り返りにおいて、参加者6名全員が、様々なバックグラウンドを持った同世代の仲間との議論を通して、自己の課題に対する見方・考え方が大きく変容し、問題意識が高まったと答えている。それぞれの国が抱える課題やその取り組み、経験談を共有することで、世界の現状を知ると同時に、自国に対する理解を深め、国際社会において日本が担うべき責任について熟考するきっかけとなったようである。

来年度より、この意義ある国際交流の機会の拡大を図るため、「Multi-destination Project」を設ける。実施期間は、2019年10月26日～11月2日。初年度の研修先として、Panzini (イタリア)、Roc West (オランダ)、Sedu (フィンランド)、XaBec (スペイン) の4校が名乗りを上げている。

生徒は1週間または2週間の研修期間を選択することができる。1週目は文化交流や世界の諸問題を討議しあう Language & Culture Related Program への参加、2週目は、専門的な職業訓練・技術を学んだり、提携企業でインターンシップを行うことを目的とする。このプログラムを設けることで、より多くの生徒が自分で行き先を選定し、目的に合わせた研修が可能になる。本校からは、来年度5月に第1、2学年全てのコースに候補者を募り、事前課題、志望理由書、面接による選考を通過した生徒の派遣を予定している。

さらに、本校は加盟校として、短期生徒・教員研修受け入れ、長期生徒留学（1年～2年）の受け入れを表明した（生徒の授業料は全額免除とする）。10代という言語習得や異文化への適応が早い時期に世界を経験することは、卓越したコミュニケーション力、多様な価値観、そしていかなる状況においても柔軟に対応できる人間性を養うことを可能にする。さらには、自己に対す深い理解と自信を身に付け、育った環境に感謝し、社会貢献や学習意欲も高まる。結果、広い視野を持って進路選択ができるようになることも大きなメリットである。今後は、2020年、2025年の日本主催の総会に向け、他の日本の加盟校と共に、時流に沿ったテーマや企画を練り、次世代のリーダー育成に貢献していきたい。今年度は、XabecのAntonio Mir Montes先生の指揮の下、4人のスタッフが中心となって、教員総会・生徒会議を運営されていた。きめ細かく、あたたかいおもてなしに感動し、多くを学ばせていただいた。今後本校が主催校になる際の参考としたい。

INNOVACIÓ EN LES AULES



Estudiants internacionals d'FP a la seua arribada a València per a participar en la trobada que acull Xabec esta setmana.

AULA VALÈNCIA

El Centre de Formació Professional Xabec de València acull al llarg d'esta setmana la trobada anual de la xarxa Global College Network que reuneix a representants i alumnes de centres d'FP de països com Canadà, Taiwan, Itàlia, Estats Units d'Amèrica, Japó o Xina. L'*Ambassadors Conference* de la xarxa Global College Network convertix a la ciutat de València en centre de referència de l'FP internacional per uns dies. L'última edició va tenir lloc en Senigallia (Itàlia) ara fa un any.

La xarxa Global College Network és una organització sense ànim de lucre que agrupa Colleges, Universitats i Centres de Formació Professional a nivell internacional. Les aules i tallers del centre d'estudis Xabec s'han omplert d'alumnes, professors i directors procedents de diferents països per portar a terme una completa agenda d'activitats formatives i lúdiques.

L'objectiu d'esta trobada és oferir als estudiants noves oportunitats i recolzar amb iniciatives com esta,

SECUNDÀRIA. La xarxa Global College Network celebra esta setmana la seua trobada anual al Centre de Formació Professional Xabec, al barri d'Orriols de València. Estudiants i docents de Canadà, Taiwan, EUA, Itàlia, Japó o Xina aborden els reptes de futur de la internacionalització de l'FP.

Xabec, epicentre internacional de l'FP

► EL CENTRE DE FORMACIÓ PROFESSIONAL **PORTA A VALÈNCIA LA TROBADA DE LA XARXA GLOBAL NETWORK** QUÈ REUNIX A ESTUDIANTS I DOCENTS DE CANADÀ, EUA, ITÀLIA, JAPÓ O XINA

noves experiències internacionals tant per a l'aprenentatge d'idiomes com per a descobrir altres cultures i altres mentalitats. A més, també s'aborden l'intercanvi d'experiències, coneixements i bones pràctiques i es treballa de forma conjunta pel futur de l'FP.

Treball per projectes, debats, conferències, cine-fòrums completen una agenda de treball on també hi haurà temps de visitar i conèixer els llocs més emblemàtics del *Cap i Casal*.

El director de Xabec, Antonio Mir, destaca que la xarxa Global Co-

llege Network té com a principal missió «promoure la mobilitat d'estudiants i professors en un món molt globalitzat en el qual cada vegada és més necessari preparar a tota la comunitat educativa per tindre una visió el més global possible». Mir subratlla que la Formació

Professional «s'està internacionalitzant molt perquè cada vegada s'acosta més al món empresarial». «Les empreses actualment són molt internacionals i, per tant, l'alumnat que estudia FP també ha d'adquirir eixa visió globalitzada», apunta.

Centre privat d'iniciativa social
Xabec és una institució educativa d'iniciativa social situada al barri d'Orriols de València, en la qual s'impartixen ensenyaments tècnics relacionats amb el manteniment industrial i les instal·lacions d'edificis. Este centre educatiu respon a una concepció moderna de l'FP, una «escola per a tota la vida», en constant adaptació als requeriments del món empresarial. «El nostre principal objectiu és aconseguir que tots els alumnes aconseguisquen una bona ocupació en finalitzar els seus estudis», indiquen des de Xabec, a qui l'Aliança per l'FP DUAL ha premiat com a millor centre educatiu. Xabec va posar en pràctica l'ensenyament dual a l'any 2013.

Docents de l'institut públic de Benicalap fan «job shadowing» a Finlàndia i França

► L'ERASMUS+ PERMET AL PROFESSORAT OBSERVAR BONES PRÀCTIQUES A LES AULES D'ALTRES PAÏSOS

AULA VALÈNCIA

Dues professores de l'Institut públic d'Educació Secundària (IES) Benicalap de València han fet dues mobilitats de *job shadowing* (observació de pràctica docent) en instituts públics de Finlàndia i de França respectivament, dins del projecte Erasmus+ KA1.

La professora del departament de Castellà de l'IES Benicalap, María Jesús Sebastián, ha estat una setmana en Kempel Lukio, un institut públic finlandès d'ESO i Batxillerat, pròxim a la ciutat d'Oulu, per a observar l'ensenyament i aprenentatge de l'anglès com a llengua estrangera i del finès com a llengua mater-

na. Així mateix tingué l'oportunitat de visitar una escola de Primària i d'assistir a classes per a un alumnat immigrant. La professora va poder constatar el silenci imperant en les classes i la quantitat de recursos materials i humans de que disposen els centres públics, atés que el govern finlandès invertix en Edu-



Estada a Finlàndia. IES BENICALAP

cació tres vegades més del seu PIB que Espanya.

Així mateix, la professora de francès, Estrella Gregori, va fer la seua mobilitat a la Section Internationale Espagnole de Marseilleveyre dirigida per la professora Ana de Miguel. En el Collège-Lycée Internationale de Marseilleveyre coexisteixen amb l'ensenyament públic francès quatre seccions internacionals: l'àrab, l'italiana, l'espanyola i l'europea, en un clar exemple de foment del plurilingüisme. Finalment, esta experiència docent mostra la viabilitat d'obrir en un futur una secció francesa a l'IES Benicalap.

ザンビア訪問報告書

国際部副部長 村上和弘

1. 概要

アジア、アフリカ地域の国際開発モデルとビジネスモデルの開発は京都学園高校のSGHにおける中心的課題であり、SGH校に指定していただいた当初からエチオピアでのフィールドトリップの道を探ってきた。ところが隣国のソマリア内戦などの影響で、外務省の地域安全情報によると大半のエリアがレベル2～3であり、安全性に問題があった。

一方ザンビアはアフリカの中で最も政治的に安定した国の一つであり、全土が安全情報のレベル1（十分注意してください）であり、また本校芸術家教諭の米田実がザンビアで絵を描いていた経験で、ザンビアの駐日大使や国連大使とのコネクションがあったことから、今回京都学園高校の交流先としてザンビアの高校を開拓する運びとなった。

今年度の訪問は前述の本校教諭米田実と村上和弘が行った。目的はザンビアの交流校の開拓及び教育プログラムの策定である。

日程

- 7月4日（水）午後11時45分 EK317便 関西空港発
- 7月5日（木）午前4時50分 ドバイ着
午前9時25分発 EK713便 ドバイ発
午後2時35分 ザンビア ルサカ着
- 7月6日（金）午前 Hope and Faith Community School 訪問 授業見学
午後 3時から4時30分 日本国大使館 側嶋大使表敬訪問
- 7月7日（土）ルサカからリビングストーンへ移動
ビクトリアフォール
- 7月8日（日）Mosi-oa-Tunya National Park
リビングストーンミュージアム
リビングストーンからルサカへ移動
- 7月9日（月）Hope and Faith Community College 訪問
チェムニカロッジ
- 7月10日（火）Crested Crane Academy 訪問
- 7月11日（水）Crested Crane Academy 訪問 日本文化ワークショップ
ルサカ EK714便 21:25発
- 7月12日（木）ドバイ着 午前6時30分 午前8時 EK312便ドバイ発
午後10時25分 羽田着

2. 交流予定校 Hope and Faith Community School について

教育の現状

Hope and Faith Community School (以下“Hope and Faith”)は首都ルサカの貧困地域にある小学生から高校生が学ぶコミュニティスクールである。ザンビアの初等教育及び中等教育の学校形態としては国立学校、コミュニティスクール、私学の3つがある。コミュニティスクールの存在価値は国立より良い教育を安価または無料で行うということである。ルサカの国立小学校は3部制の授業を実施している。つまり、7時半から10時半、10時半から13時半、13時半から16時半の三部に分け、それぞれ別の生徒が来ることによって一つの学校で通常の3倍の生徒を受け入れている。給食はない。言葉を換えれば、生徒は一日3時間程度しか授業を受けていない。こういった現状を踏まえて、より良い教育を受けさせたいが、高い授業料の負担ができない生徒はコミュニティスクールに通い、高額な授業料を払える生徒は私学に通うという状態になっている。

歴史と特徴

Hope and Faithは2003年に未就学生を救済するためにローズマリー・ムンビ先生によって創立された。ムンビ先生は小学校の教員を経て、ザンビアでは女性として初めて教育省の役人をされた方だったが、夫が癌を患い退職された。

その後さまざまな苦難を経験され、何もかも失った彼女は途方に暮れる状況であった。そんな折

り、神の啓示を受けCommunity Schoolを開校したというのが学校の始まりであった。生徒2人で始めた小さな一部屋だけの学校は、5人、10人と徐々に増えていき、現在は3歳児から18歳まで200名ほどが学ぶ学校になった。孤児は制服も含めて無料である。親がいる場合でも授業料は4ヶ月で6000円、これには給食を含むので一般的な家庭でも十分払える額である。学校運営の資金源はアングリカンチャーチであるが、カトリック教会からも援助を受けており、キリスト教に教派は関係ないという彼女のスタンスがそこにある。70歳を超えた彼女の自宅は学校であり、自分の寝室の隣にはストリートチルドレンを3人住ませ我が子として育てている。近くの孤児院で職員による児童へのレイプ事件があり、孤児院が閉鎖された時も、子供達を引き受けたのは彼女であ



った。子供だけではない。学校の近所に住む、身寄りのない無職の女性を学校で雇い給食や雑用の仕事で雇用して生活の面倒をみている。

日本の教員による授業体験

Hope and Faithの要望により現地で授業を実施した。美術教員である本校米田実による授業であった。テーマはヘアスタイル。自由でクリエイティブなヘアスタイルを描こうという授業だ。

実験道具が一つも揃っていない理科室では40名の6thグレードの生徒が待っていた。年齢は11歳から13歳の男女、A4サイズのコピー用紙と鉛筆を用意してくれた。なぜ理科室かというとHR教室以外で生徒が大勢入れる部屋は理科室しかないからだ。米田が前に立つと生徒は声を揃えて挨拶をする。着席すると授業が始まった。米田が英語で説明し、時々村上が通訳するというスタイルで行った。まずは顔の描き方、バランスよく描くために6分割して描く方法を教えた。また日本の髪型を紹介した。舞妓や、関取、侍の髪型だ。この学校では美術の授業はあるが、美術を学んだ先生はいない。生徒達は真剣に取り組み、とりあえず顔を完成した。もちろん米田が狙ったバランス通りには描かない。次にその上に自由に自分でデザインしたカッコいい髪型を描く。ザンビアの鉛筆は固く、全く濃淡が表現できないので、米田が自分用に持ってきた2Bや3Bの鉛筆を貸した。みんなが描き終わると、作品を集めみんなの前で紹介した。生徒達は大喜びで作品を見ながら笑っていた。最後は声を揃えてザンビアの言葉でアクション付きのお礼をしてくれた。というわけで初めての取り組みではあったが、とても楽しい授業となった。

今後の学校交流について

ムンビ先生の主張は1年に1回来るとか2年に1回来るだけというのは交流ではない、普段から通じ合うべきだということだった。例えば京都学園の生徒とザンビアの生徒が共通の現代社会の問題について考え、その意見交換をメールでするといようなことだ。そのことにより、学校が常につながり、お互いの生徒が学べ、コミュニティの発展につながると力説された。そして、国際交流の目的は「人はみな同じだ」ということを両方の生徒に学ばせることだと訴えられた。また若い先生方からは日本のテクノロジーを伝えて欲しいという意見があった。そもそも米田の美術の授業でも「ミスター米田はトヨタの国日本から来たのよ」であった。また日本の教育システムを学びたいという声もあった。

将来的には生徒がお互いに訪問することができれば素晴らしいということで、ファーストステップは共通のトピックについて話し合うということだと意見をいただいた。さらにHope and Faithはどういうものを京都学園に期待するかということのを伺うと、授業をしてほしいということであった。Hope and Faithはスコットランドの学校とは教員の交換をしていて、2週間スコットランドの教員がザンビアで授業をして、2週間Hope and Faithの教員がスコットランドで教える、ということを実施している。また日本語の基礎会話を教え

てやってほしいという話もあった。京都学園の生徒たちが日本語や、日本文化や、日本地理や日本史を伝えるのも良いと思われる。

3. 交流予定校 Crested Crane Academy について

概要

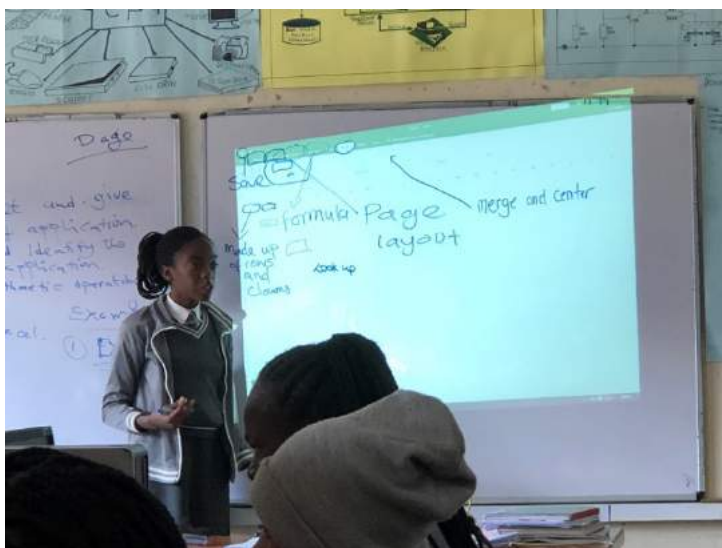
ザンビアの教育実情については前述したが、Crested Crane Academy（以下“Crested Crane”）は私学である。幼稚園から高校までが一つのキャンパスにあり、スラムにある Hope and Faith とは打って変わって、外見的には何ら日本の私立学校と変わらない豪華な学校である。2009年創立で生徒数は500人である。サブサハラ地域で最も高い経済成長をしているのはウガンダ共和国であるが、この学校のオーナーであるオクワレ理事長はウガンダ人である。ちなみに校名の Crested Crane はウガンダ共和国の国鳥「カンムリ鶴」に由来している。

ザンビアでは日本でいうところの定期テストは国が実施する共通テストとなるが、Crested Crane の平均点は全国3位だそうだ。

Crested Crane の授業

シトンド校長は Crested Crane で教鞭をとる教員のメンターであり、すべての教員が2週間に一度、教授法に関するレクチャーを校長から受ける。私は物理、音楽、IT、美術の授業を見学したが、どの教員もすべて同じ手順で授業が行われていた。

まず、授業の最初に前回の授業の復習、次に今日の授業のテーマとゴールを示す。そして今日の授業で必要な新しい言葉をすべて先に学習させてから本題に入る。常に生徒に考えさせ、生徒に推測させ、発言させる。最後にまとめをして、課題を示す。という具合である。このステップが判を押したようにどの科目でも実施されていた。



日本の教員による授業体験

Hope and Faith で実施したような授業体験を Crested Crane でも行った。今回は米田が美術の授業で墨を水面に垂らした模様を転写するアートを、村上が書道の授業として生徒の名前を漢字で表現する授業を行った。

今後の学校交流について

村上、米田と Crested Crane のシトンド校長とオクワレ理事長と今後の交流の可能性について話し合った。京都学園高校とザンビア大使館との関係や、本校の図書サークルが図書館で取り組んだザンビアフェアの写真などを見せることによって、本校との交流に興味を持っていた。

その結果、Crested Crane サイドから交流は是非したい、ホームステイの受け入れもする、将来ザンビアの生徒も送りたい、という答えが得られた。学校のあるルサカ近辺の見学地としては、サトウキビ工場、水力発電所、サファリ、鉄道施設、酪農農場、飲料水工場、製粉会社など本校の SGH のテーマである「食」に関する施設が多いということであった。また教員のエクスチェンジを希望されていた。さらに近い未来に実現可能なこととして、スカイプ等を通じた生徒ディスカッションなどがあげられた。



4. ザンビア日本国大使館訪問

本校の美術教員である米田実はザンビアの野生動物を描くためにザンビアを訪問していた経験があり、その関係で京都学園高校はザンビア国連大使カパンブエ氏に来校していただいたり、駐日ザンビア大使館一等書記官ムンバ氏に講演会をしていただくなど、ザンビア政府と友好的な関係がある。

今回、村上と米田がルサカを訪れるに際して、在ザンビア日本国大使館側嶋秀展特命全権大使を表敬訪問することができた。側嶋大使は1時間に渡って、ザンビアの政治情勢、経済情勢、日本との関係についてレクチャーいただき、相馬南洋書記官からはザンビアの学校と交流する際に注意すべきことについてご教授いただいた。こちらからは本校の SGH の取り組みについて説明し、その中でベトナムフィールドトリップについてお伝えすると側嶋大使が日本政府の地域活性化特別予算で JICA が実施している「丸森町の在来技術を活用した小規模農家の食料の安定利用強化プロジェクト — ザンビア国ルサカ州 売る農業・食べる農業・明るい農村プロジェクト」の内容を教えていただいた。これは本校のベトナムフィールドトリップと類似点が多く、今後の開発教育を推し進める上で大変参考になる案件であった。ちなみに大使によると、かつて日本の高校がザンビアの高校と交流したことは一度もないそうで、実現すれば京都

学園が初めてということになる、ということであった。今後の展開に向けて大使からの応援もいただき有意義な訪問となった。

5. クラブザンビア

帰国後、米田、村上、社会科教員 廣藤啓二を中心として京都学園中学高等学校内に「クラブザンビア」という生徒組織を立ち上げた。現在部員は11名で、このクラブを中心としてザンビアの学校との交流を始めるものとする。

まず、手始めに平成30年の京都学園中学の美術の冬休みの課題を日本や京都を紹介する絵画とし、良い作品を前述した交流校に送った。また学校を紹介する動画を収めたDVDを同封した。Hope and Faith校はスラムの学校であり、画材等が十分でなかったため、画材もプレゼントすることにした。

今後はクラブザンビアの生徒達の意見を聞きながら活動を進めていくものとする。現在週に一度ミーティングをしており、ザンビアについて班ごとにテーマを決めリサーチし、発表している。今後は上記の学校交流プランを踏まえて活動していくものとする。

またCrested Crane Academyにおいても「日本クラブ」が新たに発足し、メンバーを募っているとの連絡をいただいた。これにより今後は、ザンビアの生徒を主体とした活動も期待できる。



る。

最後に今回のアメリカ研修旅行に関わっていただいた全ての方々にこの場をかりて感謝の意を表したい。

Viktor Rydbergs Skola との交流

平成 30 年 10 月 25 日～27 日、学校長佐々井宏平がスウェーデンの Viktor Rydbergs Skola (以下「VRS」) を訪問し、2019 年度からの交流について以下の合意を取り付けた。

【両校の教育連携に基本的に合意】

- VRS- DJURSHOLM 校は積極的に海外研修を実施。ドイツ、ベルギー、イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国。6 年前にはタンザニアの Boarding School と Partnership 締結。相互交流を始めた。タンザニアの生徒もこちらの学校の保護者がホームステイ先として受け入れた。
- 北欧の生徒がアジア、特に極東に当たる日本を訪問することの意義は大きい。距離が離れた国の人々との交流を通して、文化の違いを体感し自国の独自性を知ることと同時に多様性を知り受け入れる姿勢を育てるためにもアジアの日本との交流に期待。
- KG にとっても同様である。” ゆりかごから墓場まで ” という言葉で社会保障の進んだ北欧を訪問することは、これから少子高齢化社会を迎える日本をこれから牽引する生徒にとって体感することは多い。北緯 60° の高緯度の自然と歴史、そこから生まれた人々の暮らしを学ぶ。ヨーロッパ大陸で第二外国語として英語があたりまえのように中高生が必須として学習する意義に触れる絶好の機会となる。また、大陸で国境を越えれば、ドイツ語、フランス語、スペイン語も第 1 言語として話されていたり、飛行機を乗り換える際にサインとして表示されている言語が、英語のみでない現実を知る機会にもなる。ヨーロッパの生徒が、母国語のみならず、英語や第三外国語を学習することの大切さに気づく機会としたい。
- ‘ 科学と芸術 ’ を通して、生徒の才能を引き出す教育を教員同士の交流を積極的に進め、授業の深化に努める。

【時期】 2019. 10. 20(日)Stockholm 到着→10. 25(金)Stockholm 出発→10. 26(土)帰国

- スウェーデンの学校は 10 月最終週は休校。長い冬を迎える前に家族で Short Trip に向かう。26 日土曜日の早朝より旅行をはじめのご家族が多いため、ホームステイを考えると、最長で 25 日金曜日朝までお世話になれる限界との事。
- 本校は 10 月第 3 週に後期第 1 回定期試験が予定されている。

【参加対象生徒と参加定員】 中学 2 年生から中学 3 年生。10 名から 15 名まで。

- V. R. S の京都研修は 12 名を予定されている。
- 英語検定 2 級取得のこと

【今後の交流計画】

- 両校教職員に交流の目的を明確にする
- 本校は国際部長橋本千佳先生、教務部百田洋先生(科学)、芸術科主任米田実先生(芸術)を中心に現地と密接に情報を交換し、交流プログラムを作成する

◎事前指導の計画

【広報の時期】

- 今年度末までに概要を作成し、2019 年度 4 月初旬の学校方針説明会で北欧研修のご案内が保護者、生徒に広報したい。

【事前指導】

◎交流計画に伴って事前指導・事後指導の計画も明確にする。第 1 回は今後の連携にとって双方にとって成功を収めることが前提である。

平成30年度 実施教育課程

国際コース

第1学年	国語総合	現代社会	数学 I	数学 A	生物基礎	体育	保健	音楽 I	書道 I	英語 I	コミュニケーション	英語会話	英語表現 I	社会と情報	総合的な学習の時間	KOA学 I	朝読書	H R	
	5	2	4	2	2	2	1	2		5		2	3	(*1)	2	(*2)	4	1	1

(*1) 社会と情報(2単位)のうち、1単位はImmersion授業 (*2) KOA学I(4単位)のうち、2単位は土曜日に実施

第2学年	現代文 B	古典 B	世界史 A	日本史 A	数学 II	化学基礎	地学基礎	体育	保健	英語 II	コミュニケーション	英語表現 II	プレゼンテーション	家庭基礎	総合的な学習の時間	KOA学 II	朝読書	H R
	3	2	2	2	5	2	2	2	1	5		2	3	2	(*3)	3	1	1

(*3) KOA学 II(3単位)のうち、1単位は隔週土曜日に2時間実施し、残り2単位は水曜日の午後に実施

第3学年	現代文 B	古典 B	世界史 B	政治・経済	英語演習 A	英語演習 B	体育	英語 III	コミュニケーション	英語表現 II	プレゼンテーション	総合的な学習の時間	KOA学 III	朝読書	H R
	3	3	5	5	2	2	3	4	2	3	2	2	1	1	31

特進ADVANCED

第1学年	国語総合	現代社会	数学 I	数学 A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	音楽 I	書道 I	英語 I	コミュニケーション	英語会話	社会と情報	家庭基礎	サイエンスグローバルスタディーズ	総合的な学習の時間	朝読書	H R
	5	2	4	3	2	2	2	1	2		5		2	2	2	2	2	1	1

第2学年	現代文 B	古典 B	現代社会	数学 II	数学 B	世界史 B	日本史 A	化学	生物	地学基礎	体育	保健	英語 II	コミュニケーション	英語表現 I	朝読書	H R
	3	3	2	4	3	3	3	2	2	2	2	1	4	2	2	1	1

第3学年	現代文 B	古典 B	体育	コミュニケーション	英語表現 II	生物	現代社会 B 演習	政経倫社	日本史 B	世界史	英語演習 II	英語演習 I	数学演習 I	総合的な学習の時間	朝読書	H R
	3	2	3	4	2	2	4	4	2	2	2	3	3	2	1	1

特進BASICコース

第1学年	国語総合	現代社会	数学I	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	音楽I	書道I	芸術I	コミュニケーション 英語I	英語会話	家庭基礎	総合的な学習	朝読書	HR
	5	2	4	2	2	2	2	1	2	2	2	5	2	2	1	1	1

第2学年	現代文B	古典B	地学基礎	体育	保健	コミュニケーション 英語II	英語表現I	社会と情報	古典演習	世界史A	地理A	日本史B	数学II/理	世界史B	数学B	数学活用	朝読書	HR
	3	2	2	2	1	4	2	2	2	2	2	5	5	5	3	2	1	1

第3学年	現代文B	体育	コミュニケーション 英語III	英語表現II	政治・経済	世界史演習	日本史演習	古典B	英語演習	国語演習	総合的な学習の時間	朝読書	HR
	3	3	4	3	6	5	2	2	3	3	2	1	1

進学コース

第1学年	国語総合	現代社会	数学I	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	音楽I	書道I	芸術I	コミュニケーション 英語I	英語会話	家庭基礎	総合的な学習	朝読書	HR
	4	2	3	2	2	2	2	1	2	2	2	4	2	2	1	1	1

※数学I・数学Aは一人で担当

第2学年	現代文B	古典B	世界史A	日本史A	地学基礎	体育	保健	音楽II	書道II	芸術II	コミュニケーション 英語II	英語表現I	社会と情報	朝読書	HR
	3	3	3	3	2	3	1	2	2	2	5	2	2	1	1

第2学年	現代文B	世界史A	地理A	数学II	数学A	化学	生物	物理基礎	体育	保健	音楽II	書道II	芸術II	コミュニケーション 英語II	社会と情報	朝読書	HR
	2	2	2	4	3	2	2	2	3	1	2	2	2	4	2	1	1

第3学年	現代文B	古典B	国語演習	世界史B	政治・経済	英語演習	社会演習	体育	コミュニケーション 英語III	英語表現II	総合的な学習の時間	朝読書	HR
	3	3	3	5	3	3	3	3	5	2	2	1	1

第3学年	現代文B	数学III	数学B	物理	生物	化学	生物	物理演習	生物演習	化学演習	体育	コミュニケーション 英語III	英語表現I	総合的な学習の時間	朝読書	HR
	3	5	3	2	2	2	4	4	3	3	3	5	2	2	1	1

平成30年度 入学生教育課程

国際コース

第1学年	国際総合	現代社会	数学Ⅰ	数学A	生物基礎	体育	保健	音楽Ⅰ	美術Ⅰ	コミュニケーション英語Ⅰ	英語会話	英語表現Ⅰ	社会と情報	総合的な学習の時間	新読書	HR
	5	2	4	3	2	2	2	1	2	5	2	3	2	4	1	1
(*1) 社会と情報2単位のうち、1単位はImmersion授業 (*2) KOA学7.4単位のうち、2単位は土曜日に実施																
第2学年	現代文B	古典B	世界史A	日本史A	数学Ⅱ	化学基礎	地学基礎	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	プレゼンテーション	家庭基礎	総合的な学習の時間	新読書	HR
	3	2	2	2	5	2	2	2	1	5	2	3	2	3	1	1
(*3) KOA学Ⅱ(3単位)のうち、1単位は隔週土曜日に2時間実施し、残り2単位は水曜日の午後に実施																
第3学年	現代文B	古典B	世界史B	英語演習A	英語演習B	数学B	体育	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅲ	プレゼンテーション	総合的な学習の時間	新読書	HR			
	3	3	5	2	2	2	3	4	2	3	2	1	1	1	1	31

特進ADVANCED

第1学年	国際総合	現代社会	数学Ⅰ	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	音楽Ⅰ	美術Ⅰ	コミュニケーション英語Ⅰ	英語会話	社会と情報	家庭基礎	サイエンス・テクノロジー	総合的な学習の時間	新読書	HR
	5	2	4	3	2	2	2	2	1	2	5	2	2	2	2	2	1	1
第2学年	文系	現代文B	古典B	世界史B	日本史B	数学Ⅱ	数学B	生物	地学基礎	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅱ	英語表現Ⅱ	新読書	HR			
	3	3	4	4	4	3	2	2	2	2	1	4	2	1	1	1	1	38
第3学年	理系	現代文B	古典B	世界史A	地理B	数学Ⅱ	数学B	物理基礎	生物	化学	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅲ	新読書	HR		
	3	3	2	2	4	3	2	2	3	3	2	1	4	2	1	1	1	36
第3学年	文系	現代文B	古典B	日本史B	現代文演習	政治・経済	現代文演習Ⅱ	古典演習Ⅱ	生物	理科演習	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅲ	新読書	HR		
	3	2	4	4	3	3	3	2	3	3	3	4	3	1	1	1	1	38
第3学年	理系	現代文B	古典B	地理B	数学Ⅲ	数学演習	生物	化学	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅲ	新読書	HR				
	3	2	3	6	3	4	3	3	3	4	3	1	1	1	1	1	36	

特選BASICコース

第1学年	国際総合	現代社会	数学I	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	音楽I	美術I	英語I	コミュニケーション	英語表現I	家庭基礎	総合的な学習の時間	新読書	HR	
	5	2	4	2	2	2	2	1	2		5		2	2	1	1	1	34

文系	現代文B	古典B	世界史A	日本史A	数学II	数学基礎	英語演習II	音楽II	美術II	英語II	コミュニケーション	英語表現I	社会と情報	総合的な学習の時間	新読書	HR	
第2学年	3	3	3	3	4	2	2	2	2	2	4	2	2	1	1	1	34

※太枠はコースの枠を超えて履修編成することがある。

理系	現代文B	古典B	世界史A	地理B	数学II	数学B	化学	物理基礎	体育	保健	コミュニケーション	英語表現I	社会と情報	総合的な学習の時間	新読書	HR
第2学年	3	2	2	2	4	2	3	2	2	1	4	2	2	1	1	34

文系	現代文B	古典B	世界史B	日本史B	数学II	政治経済	英語演習II	音楽II	美術II	英語II	コミュニケーション	英語表現II	新読書	HR	
第3学年	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	4	2	1	1	31

※太枠はコースの枠を超えて履修編成することがある。
※文系の理科演習選択者は数学演習を選択することが望ましい。

理系	現代文B	古典B	地理B	数学II	化学	生物	物理	体育	保健	コミュニケーション	英語表現II	新読書	HR	
第3学年	2	2	2	4	3	5	3	3	1	4	2	1	1	31

進学コース

第1学年	国際総合	現代社会	数学I	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	音楽I	美術I	英語I	コミュニケーション	英語表現I	家庭基礎	総合的な学習の時間	新読書	HR
第1学年	4	2	3	2	2	2	2	1	2		4		2	2	1	1	31

※数学I・数学Aは一人が担当

文系	現代文B	古典B	世界史A	日本史A	数学II	数学基礎	英語演習II	音楽II	美術II	英語II	コミュニケーション	英語表現I	社会と情報	総合的な学習の時間	新読書	HR
第2学年	3	2	2	2	4	2	2	2	2	2	4	2	2	1	1	31

※太枠はコースの枠を超えて履修編成することがある。

理系	現代文B	古典B	世界史A	数学II	数学B	化学	物理基礎	体育	保健	コミュニケーション	英語表現I	社会と情報	総合的な学習の時間	新読書	HR
第2学年	2	2	2	4	2	3	2	2	1	4	2	2	1	1	31

文系	現代文B	古典B	世界史B	日本史B	数学II	政治経済	英語演習II	音楽II	美術II	英語II	コミュニケーション	英語表現II	新読書	HR	
第3学年	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	4	2	1	1	31

※太枠は文理の枠、コースを超えて履修編成することがある。
※文系の理科演習選択者は数学演習を選択することが望ましい。

理系	現代文B	古典B	地理A	数学II	数学III	化学	生物	物理	体育	保健	コミュニケーション	英語表現II	新読書	HR	
第3学年	3	2	2	3	3	2	4	3	3	1	5	2	1	1	31



INTERNATIONAL
FESTIVAL
2018

第1回SGH生徒課題研究発表会
2018年8月18日(土)

CONTENTS

1. PRESENTATIONS BY FIRST GRADE INTERNATIONAL COURSE STUDENTS

高校国際コース1年生によるプレゼンテーション

・「持続可能な開発目標(SDGs)をなぜ我々は実現しなくてはならないのか？」

Goal 2 Zero Hunger

Group 1 : 石田桐加 臼井京姫 田尻華子 松本佳乃 村上結菜

Group 2 : 長松アレックスー博 細川貴正 庄坪尚紀 中野大地 柳瀬暁

2. PRESENTATIONS BY SECOND GRADE INTERNATIONAL COURSE STUDENT

高校国際コース2年生によるプレゼンテーション

・Field Trip in Vietnam

・Field Trip in Philippines

3. PERFORMANCE BY SECOND GRADE INTERNATIONAL COURSE STUDENTS

高校国際コース2年生による発表



TRAJECTORY OF INTERNATIONAL COURSE

＜国際コースの軌跡＞



SUMMARY あらすじ

これはある海外留学を控えた京都学園の生徒のお話です。

留学を目前に控えたある日、いつもの日常に奇妙な出来事が起こります。

扉から聞こえた音に誘われ、踏み入れた先には四つの不思議な世界が待ち受けていました。

ディスコ、モノクロ、ワンダーランド、ショー、の4つの世界の中で、主人公はそこで出会った人々、様々な出来事から新しいことに挑戦することの楽しさや辛さを学んでいきます。

さて主人公が体験する出来事とは？ 一体このインターナショナルフェスティバルで何が起こるのか！ ぜひお楽しみください！！
一緒に盛り上がりましょう！

By インフェス演出

ATTENTION

1. You can take photos and videos.

写真、ビデオOKです！！！！

*ただし、個人情報保護のためSNSなどへの投稿は一切禁止です！！

2. Please set your phones to silent.

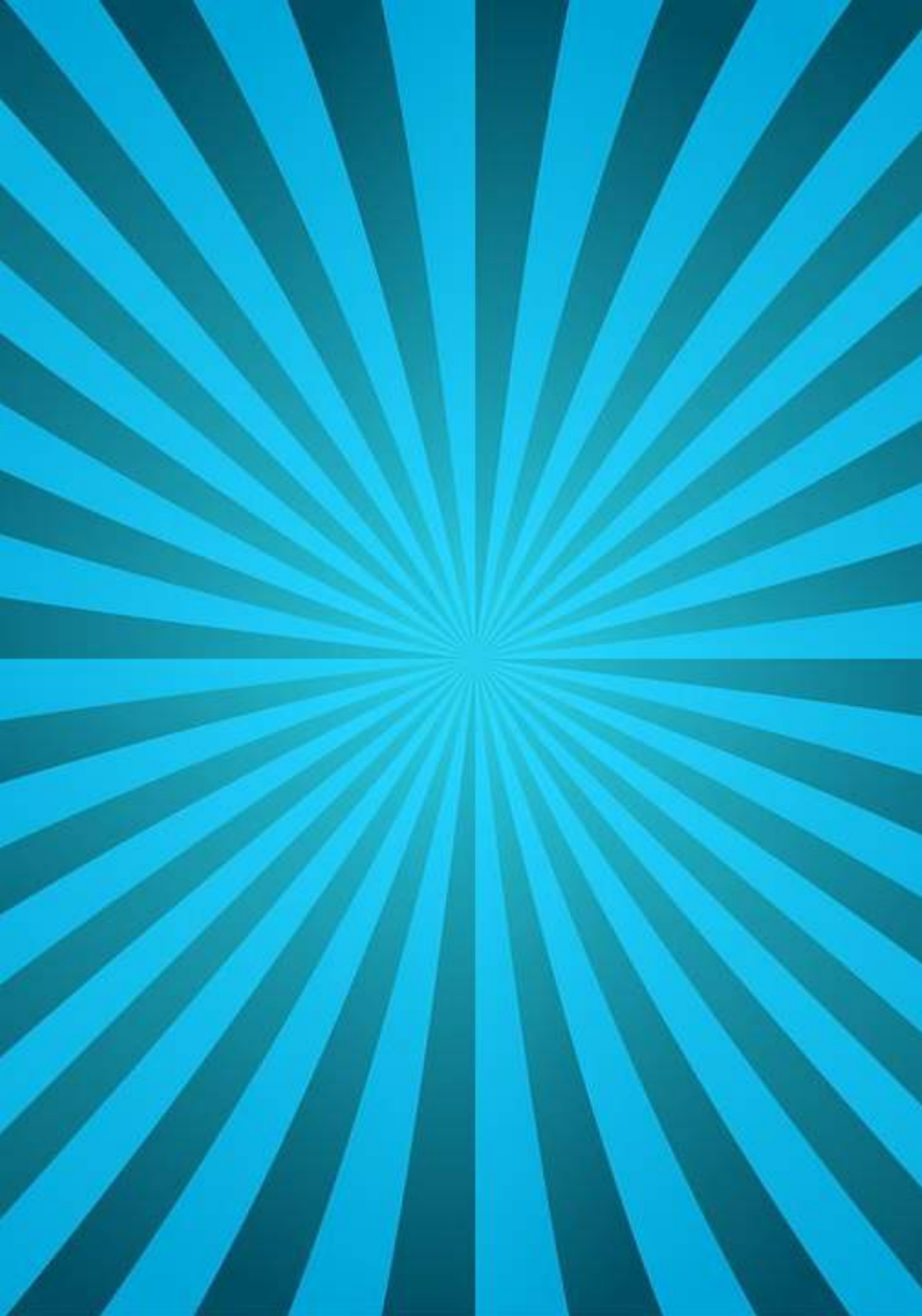
携帯はマナーモードに！

3. Don't move your seat during the performance.

発表中は席を移動しないでください。

4. Please enjoy the international festival!!

インターナショナルフェスティバルを楽しんでください。





平成 30 年度

京都学園高等学校 第 2 回 SGH 課題研究発表会

研究開発構想名

21.3 世紀のグローバルナビゲーター育成プログラム

- ◆ 会 期 平成 31 年 1 月 23 日 (水)
- ◆ 会 場 京都学園高等学校
〒616-8036 京都府京都市右京区花園寺の中町 8
Tel: 075-461-5105

学校法人 京都光楠学園
京都学園中学校・高等学校

◇ 日 程

1月23日

時間	内容
9:00	受付 [翠嵐館 1F ロビー]
9:30	開会式 [翠嵐館ホール] 司会：高校第1学年国際コース生徒 挨拶：学校長 佐々井宏平、Saint Pedro Poveda College T.J. Cipriano 氏 プログラム内容説明：本校 SGH 委員長 黒宮康明
9:45	休憩 10分
9:55	高校第3学年国際コース Super Global Congress 第1日目 [翠嵐館ホール] Intra-Actor Discussion 5分
10:00	Inter-Actor Discussion 50分
10:50	休憩 5分
10:55	Special Conference 2国間交渉、国際グループ交渉
11:55	Inter-Actor Discussion
12:45	SGC 第1日目終了 及び 後半プログラムの紹介
12:50	昼食・休憩
13:30	高校第1学年国際コース課題研究ポスター発表 [翠嵐館 1F ロビー・アクティビティホール] (発表 10分、質疑応答 5分) × 2回
14:10	休憩 30分
14:40	高校第1学年 SGH KOA 代表 (2チーム)、SGS 代表 (1チーム) 高校第2学年特進 BASIC/進学コース代表 (1チーム)、図書館教養講座代表 (1チーム) [翠嵐館 2F スポーツアリーナ]
15:40	閉会式 挨拶：副校長 中西清人 [翠嵐館 2F スポーツアリーナ]
15:45	終了

Super Global Congress 第2日目は1月24日(木)午前9時から翠嵐館アクティビティホールにて開催いたします。こちらも一般公開しておりますので、是非ご参加いただき、ご指導・ご助言賜れば幸いです。

1月24日

時間	内容
8:30	受付 [翠嵐館 1F ロビー]
8:55	2日目開会宣言
9:00	GSG Part2 [翠嵐館アクティビティホール] Inter-Actor Discussion 35分 Intra-Actor Discussion 10分
9:45	休憩 10分
9:55	Plenary Session/UN Food Summit 120分 [翠嵐館アクティビティホール] 総会/国連食糧安全保障サミット
11:55	閉会式
12:00	終了

◇ Global Simulation Gaming について

Global Simulation Gaming (GSG) は東京大学と立命館大学国際関係学部で開発されたシミュレーション・ゲーミングです。本校は、SGH に指定されて 4 年目ですが、アソシエイト校となった 2014 年度入学生が 3 年生となった 2016 年度から立命館大学准教授の宮口貴彰先生（当時、現在は京都外国語大学准教授）のご指導の下、毎週水曜日に 2 時間「総合的学習」の枠内で英語をメイン言語として実施してきました。GSG は、生徒たちが、各アクター（各国家や国連機関、NGO など）そのものについての知識や特定のテーマに関する知識を身につけ、独自の目標設定をし、それに到達するための解決・政策案を研究、発表し、それを国際交渉を通して実現させていくというシミュレーションゲーミングです。本校では、この Global Simulation Gaming を、1 年次と 2 年次に培った、グローバルリーダーに不可欠な 8 つのスキルを駆使し、実際に応用していく SGH 事業の集大成の場として位置付けています。



今年度の場合、生徒たちには「食糧安全保障」がテーマとして与えられました。各アクターは、まず、自分たちが割り当てられたアクターそのものについて研究しました。食糧安全保障に関するそのアクターの基本的考え方はもちろん、なぜそのような考え方・立場をそのアクターが取るようになったのかを探るために、その歴史、文化、気候風土などについてもリサーチしました。そしてそこで自らが掴みとったその国なり組織としての視点から現在の世界を見渡し、未来を予測し、自分の演じるアクターに

とって最善の未来図を描きます。その未来図を実現するために、それぞれが国内政策、そして国際政策を立案し、国際社会と 2 国間、あるいは多国間の交渉を行い、様々な協定、条約を締結し、その未来を掴み取ろうとする。その激しい交渉の舞台が本日と明日の GSG 本番です。私たちはそれを Super Global Congress (SGC) と呼びます。

本来、Super Global Congress においては、各アクターが独自の部屋を持ち、二国間の交渉であれば公の目に触れることがない状態での交渉を行い、協定・条約が締結されていくのですが、それではお客様の目に、何がどう行われているのが見えなくなりますので、今回はあえて二国間交渉や秘密交渉も含めてこのホール一箇所でその全てを行なっていくことにしました。ご来場の皆様は、どうぞご自由にフロアーに出ていただき、各アクターが本当にそのアクターの立場観点から、「らしい」未来を見通しながら交渉を行っているかご確認いただければと思います。

また、本日のもう一つの見所は、フィリピンのポベダの生徒たちも、4 つの国家アクターとして参加していることです。果たして本校国際コース 3 年生がこの言語のバリアーを乗り越えて見事ミッションをコンプリートすることが出来るかどうか。温かい目で見守っていただければ幸いです。

2018 年度 GSG 担当教員一同

◇ SGH 対象生徒によるポスタープレゼンテーション一覧

- Group 1 メンバー：Kirika Ishida, Kei Usui, Rei Suzuki, Yudai Hirano, Ewan Galbraith
テーマ： Joint Venture
- Group 2 メンバー：Tomoki Wada, Kanta Okuda, Kodai Takayama, Haruki Takagi,
Sora Kamimoto,
テーマ： Poverty of Single Mother
- Group 3 メンバー：Rei Nishimura, Ai Takeuchi, Kako Tajiri, Kein Sawamoto
テーマ： Make Hunger Less Large
- Group 5 メンバー：Sana Asano, Runa Okuda, Asahi Takayama, Mai Asayama
テーマ： Why Does Hunger Happen?
- Group 6 メンバー：Rei Ishida, Ayaka Morozumi, Aketo Yanase, Rikyu Aya
テーマ： Desertification
- Group 7 メンバー：Aoina Tanaka, Risa Takehana, Shinai Sotohama
Karen Takagi, Karin Yamauchi
テーマ： Foodbank ~ Reduce food losses ~
- Group 8 メンバー：Saki Okano, Rina Takehana, Kaho Sawada, Harumi Hikawa, Seina Kaneki
テーマ： Food Loss
- Group 9 メンバー：Hinano Ozaki, Mizuki Tateishi, Honori Terao, Chisato Ogura, Runa Nakai
テーマ： Stop Food Loss For the Hunger Problem
- Group 10 メンバー：Alex Nagamatsu, Daichi Nakano, Takamasa Hosokawa, Naoki Shotsubo
テーマ： Duck Out of Global Warming
- Group 12 メンバー：Haruka Kato, Haruka Kobayashi, Yoshino Matsumoto, Natsuki Onishi
テーマ： Influence of Marine Debris
- Group 13 メンバー：Sakura Nonomura, Haruka Kuboi, Neneka Sakawa, Honoka Nishimura
テーマ： Sustainable Fishing Industry

◇ 口頭発表プレゼンテーション

発表 1

テーマ：「Zero Hunger」

発表者： SGH KOA 第1学年国際コース代表
安藤めい、古市果子、村上結菜、渡辺くるみ

発表 2

テーマ：「Clean Meat」

発表者： SGH KOA 第1学年国際コース代表
川勝将吾、濱村海都貴、金山遼、神元理丘

発表 3

テーマ：「外部刺激が発芽に与える影響」

発表者： SGS 第1学年特進 ADVANCED コース代表
寺尾皓、上田翔丈、勝山美葵、岩井安奈、岡部優希

発表 4

テーマ：「Report of Study Tour in the U.S.」

発表者： 第2学年特進 BASIC/進学コース代表
吉川 伶未、林杏美果、中尾美玖、久下凜人

発表 5

テーマ：「SDGs の視点から考える誰もが安心して過ごせる町づくり」

発表者： 第2学年図書館教養講座代表
林里奈、山本莉子

人
人
人
人
人
人
人
人
人
人
人

Super Global Congress

立命館大学と東京大学が共同開発した Global Simulation Gaming をコア学Ⅲとして実施した。7ヶ月間の留学生 16 名に対しては、4 月～7 月に「国際交渉とは」、「Treaties と Agreements」、「国家アクターとは」、「国連アクターとは」、「NGO アクターとは」をテーマに講義をすると共に、英語による議会運営のしかたを「Parliamentary Procedure」として指導した。

9 月からは 10 ヶ月間の留学を終えて帰国した 57 名を加え、73 名の生徒を 15 の国家アクターと、2 つの国連機関、2 つの NGO に分け、本格的に Global Simulation Gaming を開始した。

当初の予定では、9 月からフィリピンの姉妹校 Saint Pedro Poveda College の模擬国連クラブのメンバー 15 名もビデオ会議システムなどを利用して月に 1 度以上の共同セッションを持つ予定であったが、POVEDA の方で、1 月に来日できるメンバーの確定が 12 月になるまでできなかったためリアルタイムでの協働は断念せざるを得なかった。

Super Global Congress は 1 月 22 日～24 日の 3 日間に渡って開催し、19 の条約、20 の合意文書が締結され、24 日の総会においては Draft Resolution について英語で白熱した議論が交わされ、28 人の生徒が 49 回発言し、時間内に Resolution を採択することができた。

次ページから、Plenary Session で討議された Draft Resolution と修正され採択された Resolution を示す。締結された条約、合意文書は <http://shs-kyotogakuen.com/educational/sgh> を参照されたい。

Draft Resolution
2019 GSG/UN Summit on Food Security

We, the Heads of State and Government, or our Representatives and the Representatives of the European Community who have assembled in one at the world summit on Food Security to take urgent action to eradicate hunger from the world,

Reminding all nations to undertake all necessary actions required at national, regional and global levels and by all States and Governments to halt immediately the increase in – and to significantly reduce – the number of people suffering from hunger, malnutrition and food insecurity,

Reaffirming the importance and significance of the Sustainable Development Goals adopted in 2015 and particularly its Goal 2: End hunger, achieve food security and improved nutrition, and promote sustainable agriculture, to be achieved within the agreed timeframe,

Stressing the necessity of enhancement of global governance building on existing institutions and fostering effective partnership, which can be served as catalysts for strengthening international coordination and governance for food security,

Affirming that measures have to be taken to ensure access – physical, social and economic – by all people to sufficient, safe and nutritious food with particular attention to full access by women and children, while noting that food should not be used as an instrument for political and economic pressure,

Alarmed by severe risks posed by climate change to food security and the agriculture sector with its expected impact fraught with danger for smallholder farmers in developing countries, notably the Least Developed Countries (LDCs), and for already vulnerable populations,

1. Urge the international community to come together and mitigate the risk of natural disasters especially among the LDCs, including the measures of installing more resilient infrastructure and helping to restore damaged infrastructure;
2. Welcome the initiatives from the member states that are technologically more advanced and capable of helping those countries in need for more extensive infrastructure for realizing better and stable access to food;
3. Stress the importance of mitigating water shortages and excessive groundwater extraction, which have posed serious limitations toward sustainable agricultural production;
4. Renew its appeal to end any domestic conflicts, which above all pose severe impact to availability and access to food, endangering thousands of refugees within and outside the territories;
5. Recommend [20%] increase of foreign aid to the agricultural sector in order to reverse the decline in international funding for food security in developing countries especially the LDCs,

and promote new investment to increase sustainable agricultural production and productivity, reduce poverty and work towards achieving food security and access to food for all;

6. Support active technology transfer to the LDCs, including such technologies as water filtration, irrigation techniques, promotion of large-scale agriculture, and genetically modified crops;
7. Call for the actions to eliminate various types of inequality within the respective member states that often worsen the degree of access to food, including gender, rural-urban, and income level related inequalities;
8. Emphasize the importance of bilateral trades agreements related to food security and agriculture which can make use of the comparative advantages of two states and thus are mutually beneficial;
9. Recommend that those states with food surplus supply their food and/or grain with a much more reduced price that is equivalent of [20%] of an international market price;
10. Endorse various forms of international cooperation in fostering more effective partnerships in increasing the level of access to food, including South-South Cooperation, Cooperation with NGO actors and other non-state actors, and innovative trade-and-infrastructure partnership such as One Belt One Road Initiative;
11. Reconfirm the principle that sovereign states have the rights to protect its citizens and the agriculture sector with their own national and food security.

Resolution
2019 GSG/UN Summit on Food Security

We, the Heads of State and Government, or our Representatives and the Representatives of the European Community who have assembled in one at the world summit on Food Security to take urgent action to eradicate hunger from the world,

Reminding all nations to undertake all necessary actions required at national, regional and global levels and by all States and Governments to halt immediately the increase in – and to significantly reduce – the number of people suffering from hunger, malnutrition and food insecurity,

Reaffirming the importance and significance of the Sustainable Development Goals adopted in 2015 and particularly its Goal 2: End hunger, achieve food security and improved nutrition, and promote sustainable agriculture, to be achieved within the agreed timeframe,

Stressing the necessity of enhancement of global governance building on existing institutions and fostering effective partnership, which can be served as catalysts for strengthening international coordination and governance for food security,

Affirming that measures have to be taken to ensure access – physical, social and economic – by all people to sufficient, safe and nutritious food with particular attention to full access by women and children, while noting that food should not be used as an instrument for political and economic pressure,

Alarmed by severe risks posed by climate change to food security and the agriculture sector with its expected impact fraught with danger for smallholder farmers in developing countries, notably the Least Developed Countries (LDCs), and for already vulnerable populations,

1. Urge the international community to come together and mitigate the risk of natural disasters with directly or indirectly harm the agricultural sector especially among the LDCs so as not to affect the food security of the nation, in terms of:
 - a. Promoting the installation of more resilient infrastructure in order to promote safety in terms of sanitation and production of food.
 - b. Accepting initiatives that would help restore damaged infrastructure;
2. Welcome the initiatives from the member states that are educated, more technologically more advanced and capable of helping those countries in need of more stable infrastructure and better education for gaining skills in order for there to be more stable access to food;
3. Make concrete actions toward mitigating water shortages and excessive groundwater extraction, which have posed serious limitations toward sustainable agricultural production;
4. Enhance its efforts to end any domestic conflicts, which above all pose severe impact to availability and access to food, endangering thousands of refugees within and outside the territories;

5. Recommend an increase of foreign aid according to the capacity of each state to the agricultural sector in order to reverse the decline in international funding for food security in developing countries especially the LDCs
6. Promote active development of LDCs having autonomy while making new investments to increase sustainable agricultural production and productivity, reduce poverty and work towards achieving food security and access to food for all;
7. Suggests funding for research initiatives to provide solutions for agriculture to develop in and lands;
8. Introduce and train citizens to utilize advanced technology and/or machinery so as not to cause a shock and waste of funds on food security especially among the LDCs for the self-sufficiency in the long run of that state;
9. Support active technology transfer to the LDCs, including such technologies as water filtration to prevent infectious diseases, irrigation techniques, and training of citizens which leads to the promotion of sustainable agriculture, and crops that can realize higher yield in production;
10. Support the LDCs in terms of active technology which can help the state to become more independent and developed especially in food security, at the same time, provide partnership and training for these technological issues, such as water filtration, irrigation techniques and promotion of large agriculture and all the other related technology.
11. Encourage reduction of carbon footprint by prohibiting certain activities that contribute to the increase in fuel, electricity, and gases to further maximize the resources that the international community has and have a wider supply of food for everyone.
12. Encourage states to advertise and inform the citizens on different matters regarding population control in order to have enough food for everyone to be distributed equally among the people;
13. Call for the actions to eliminate various types of inequality within the respective member states that often worsen the degree of access to food, including gender, rural-urban, and income level related inequalities;
14. Emphasize the importance of multilateral agreements related to food security and sharing agricultural technologies which can make use of the comparative advantages of two or more states and thus are mutually beneficial;
15. Agrees to promote self-sufficiency among all nations in order to reduce dependence on other nations and food insecurity overall;

16. Recommend that those states with food surplus, and with food waste over 100kg/year per capita, waste by consumers at consumption, move to redistribute the food surplus to areas experiencing food insecurity;
17. Endorse various forms of international cooperation in fostering more effective partnerships in increasing the level of access to food, including South-South Cooperation, Cooperation with NGO actors and other non-state actors, and innovative trade-and-infrastructure partnership such as One Belt One Road Initiative;
18. Reconfirm the principle that all the sovereign states and unions made up from states have the rights to protect its citizens and the agricultural sector and all other sectors relating to food and their own national food security.
 - a. The citizens should have the right to be able to consume food that are of similar amounts by equally distributing the food.
 - b. The government should enforce rules and regulations to ensure food security among all citizens



Treaty Record Form

(Treaty • Charter • Regulation • Agreement • Other)

* **Name:**

* **Host Actor:**

* **Adopted Time:** (e.g. x session hh:mm)

* **Content:** (aim / rights & duties of parties involved / treaty content)

* **Requirement(s) for Entry into Force:** (ex. ratification of both parties)

* **Notes:**

*** Representative's Signature**

* In principle, the highest policy-maker.

Actor Name	Signature / Adoption		Ratification	
	Title	Name	Title	Name

- * Host actor will manage whether the requirements for entry into force are sufficient.
- * Make sure you submit to reception.
- * Signature/adoption indicates consent of treaty content.
- * Ratification indicates agreement to the legally binding instrument.
- * Staff will post on Course Tool and the bulletin board.

For Reception Use

Reception Time (session x hh:mm)	
Person in Charge	
Notes:	



✧

Formal Agreement Record Form

* **Name of Agreement:**

* **Parties Involved:**

* **Time of Agreement:** (e.g. session x hh:mm)

* **Body (aim / details):**

Notes:

*** Signature:**

Actor Name	Title	Signature

* The formal agreement document indicates an international agreement between states, international organization and NGOs. However, it is a publicly undisclosed document without legal binding force.

For Reception Use

Reception Time (session x hh:mm)	
Person in Charge	
Notes:	

SGU対象大学への進学者数

		SGH対象生徒 (全生徒数73人)	SGH対象外生徒 (全生徒数418人)
a.	文学部（外国語、外国文学を含む）・ 史学（世界史を含む）・哲学・心理関係学部	2人	7人
b.	海外文化・国際コミュニケーション等を含む 人文学関係学部	14人	2人
c.	教育関係学部	2人	1人
d.	法学・政治関係学部	1人	5人
e.	商学・経済学関係学部	12人	5人
f.	社会学・社会事業関係学部	1人	5人
g.	理工学関係学部	0人	9人
h.	農学関係	0人	1人
i.	医学・薬学・看護学など保健関係学	0人	3人
j.	芸術関係学部	0人	0人
k.	その他	0人	3人
	合計	32人	41人

※京都大学、九州大学、広島大学、金沢大学、早稲田大学、明治大学、立教大学、
・法政大学、立命館大学、関西学院大学、東洋大学、創価大学、立命館アジア太平洋大学